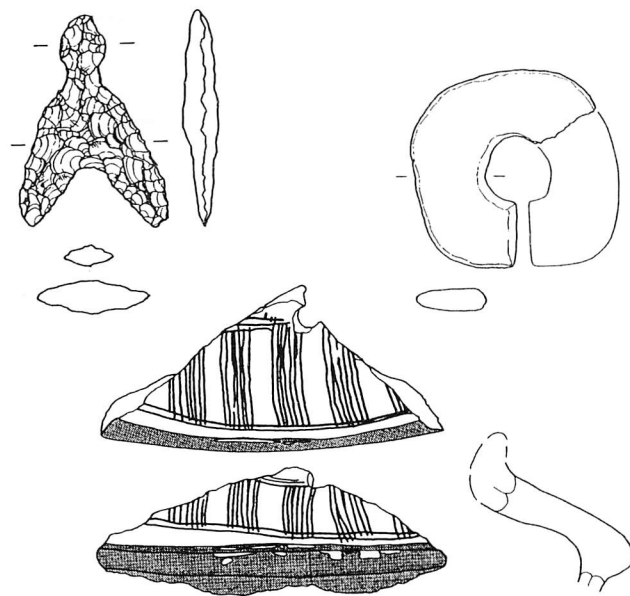


甲ッ原遺跡 (第5次) I

KABUTTUPPARA SITE I

— 県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査報告書 —



1994. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

甲ッ原遺跡 (第5次) I

KABUTTUPPARA SITE I

— 県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査報告書 —

1994. 3

序

本書は、県道須玉・八ヶ岳公園線建設工事に先立って1993年度に行われた、八ヶ岳南麓の山梨県北巨摩郡大泉村西井出に所在する甲ッ原遺跡の第5次発掘調査の報告であります。

本遺跡が位置する八ヶ岳南麓は、縄文時代を中心とする遺跡が数多く存在する地域であります。本遺跡の存在する大泉村には、国指定史跡となっております金生遺跡のほか、天神遺跡や寺所遺跡といった著名な遺跡があり、歴史的環境に大変恵まれた地域となっております。

本遺跡は1989年度より発掘調査が実施されてきました。これらの調査結果については現在整理作業中ではありますが、縄文時代および平安時代の住居跡が76軒発見されるなど、県内で有数の大規模な集落遺跡として注目を受けました。特に縄文時代の住居跡から出土した多量の遺物は、他地域との交流や縄文時代の文化を考える上で貴重な成果を提供しております。

今回は、第5次調査地区といった一部にすぎませんが、僅か約1000㎡の面積ではあります。両サイドに環状に展開するであろう集落と集落との中間地点に位置し、この部分にいったいどんな時期の遺構が存在するのか大変興味深い地点でありました。結果的には、おもしろいことに前期と中期を繋ぐ時間的空白部分を埋める時期の遺構が発見され、生活の営みの継続性と遺構の分布の変遷過程を考える上で貴重な成果が得られました。遺構は縄文時代前期神之木式期1軒・諸磯b式の彩色土器の極めて良好な破片資料が得られたほか、大型の直剪鏃、パステル形石器といった他地域との交流や文化を考える上で興味深い資料が得られました。

以上のとおり、甲ッ原遺跡は縄文時代の集落を主体とする遺跡で、県内でも有数の規模を誇るものと考えられます。本報告書が、近年特に関心の高い八ヶ岳南麓の歴史を究明する一資料として、多くの方々にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々のご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査と整理などに従事していただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

1994年3月



山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

例 言

1. 本報告書は、県道須玉・八ヶ岳公園線建設工事に先立って、1993年度に行った甲ッ原遺跡の第5次発掘調査報告書である。
2. 本報告書は山本茂樹・野代幸和が編集した。執筆分担は次により、原則として文末に明記したが、分析依頼・委託した部分については、文頭に記した。また、考察は調査関係者の協議を経て、執筆されたものである。
山本茂樹・野代幸和・三田村美彦（調査研究課）
村松佳幸（山梨県埋蔵文化財センター調査員）
白川 綾（奈良大学学生）
吉川純子（パレオ・ラボ）
3. 遺物の接合、復元、実測、トレースおよび図版作成にいたる過程において、下記の方々の協力を得た。
平 重蔵・長田てる美・斉藤律子・有賀ひろ子・中込星子・北村春美・高野眞寿美・岩間友子・金杉玲子・小林裕子・石原 恵
4. 遺跡の写真撮影は、それぞれの年度の発掘担当者が撮影し、遺物写真は山本茂樹・野代幸和がおこなった。
5. 炭化物の同定はパレオ・ラボに、彩色土器の鑑定は国立歴史民俗博物館の永島正春氏に依頼した。またパステル形石器については富山市教育委員会の藤田富士夫氏に鑑定して頂いた。
6. 調査の図面・写真・遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡 例

1. 掲載した図面の縮尺は、原則として、住居跡は60分の1、土坑は30分の1および60分の1、溝・ピット群などは120分の1、土器実測図・拓本は3分の1、石鏃などの小型の石器類は3分の2、その他の石器は2分の1であるが、特殊な遺構および遺物はこの限りではない。
2. 拓本で両面を載せてあるものは、断面右側が表面、左側が内面である。
3. 石器の内、磨石などの磨面には  のスクリントーンがかけてある。
4. 遺構平面図のスクリントーンは次のとおりである。
焼土 
5. 遺構平面図のインレタは次のとおりである。
●土器 ▲石器・△石・■炭化物
6. 遺構番号は命名した順番については1次～4次調査の結果をふまえて行ったため、便宜上通し番号で記した。このため、本文中でもこれに従って途中からの番号が記されていることについて了承して頂きたい。

甲ッ原遺跡 (第5次) I 正誤表

ページ	行	誤	正
凡例	1	土坑は <u>30</u> 分の1 および <u>60</u> 分の1、	土坑は <u>20</u> 分の1 および <u>40</u> 分の1、
2	第1図	第5次調 <u>土</u> 区	第5次調 <u>査</u> 区
60	11	<u>磨</u> 製石斧	<u>磨</u> 製石斧
図版7	キャプション	第45・46…住居跡 <u>実施</u> 状況	第45・46…住居跡 <u>完掘</u> 状況
図版7	キャプション	第48号住居跡 <u>実施</u> 状況	第48号住居跡 <u>完掘</u> 状況
図版8	キャプション	第45号住居跡 <u>炉遺物</u> 出土状況	第45号住居跡 <u>埋甕</u> 出土状況
図版8	キャプション	第45号住居跡 <u>埋甕</u> 出土状況	第45号住居跡 <u>炉遺物</u> 出土状況

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第I章 発掘調査経過	1
第1節 調査日程	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査方法	1
第II章 環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第III章 遺構と遺物	4
第1節 住居跡	4
第2節 土坑	40
第3節 溝・河川跡	56
第4節 包含層出土遺物	56
第IV章 総括	62
第1節 縄文時代の遺構変遷	62
第2節 彩色土器	63
第V章 まとめ	64
附編	65
甲 原遺跡出土の炭化種実	65

第 I 章 発掘調査経過

第 1 節 調査日程

県道須玉・ハケ岳公園線の建設工事予定地となっている甲ッ原遺跡について、前年度から続く事業の一貫として具体的な工事計画が県土木部葦崎土木事務所より提出された。これにより同事務所との協議により、直接工事によって影響を受ける部分の、記録保存を目的とした調査を実施した。本調査はその第 5 次の調査報告書である。

今年度の調査としては、約1,000㎡を対象として実施した。

第 5 次調査 1993年 6 月 1 日～10月 8 日

本調査地区は、桑畑などに利用されていた点や、遺構確認面までの深さが浅かったため、遺構の遺存状態は悪いものと考えていたが、予想以上に良好な状態で確認することができた。本調査において、縄文時代の住居跡11軒、土坑など72基のほか、平安時代以降の河川跡、近世の溝などが発見できた。またこれらの遺構に伴って、数多くの土器や石器も出土している。その中でも、漆に顔料を混ぜて文様が描かれた彩色土器の破片や直剪鋸、パステル形石器といった、日本海沿岸部に近い地域との交流を窺わせるこれらの資料はとても興味深いものである。

(野代)

第 2 節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会教育長

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター 所 長 大塚初重
次 長 三科英訓
調査研究課長 森 和敏

調査担当者 山本茂樹（主任文化財主事）
野代幸和（文化財主事）

作業員・整理員 千野三男、千野松代、千野あやめ、千野町子、千野金子、浅川民子、浅川茂子、浅川三千代、浅川保代、平嶋弘子、平 重蔵、長田てる美、中込星子、斉藤律子、有賀ひろ子

協力機関 葦崎土木事務所、大泉村教育委員会、パレオ・ラボ、(株)シン技術コンサル

協力者 国立歴史民俗博物館 永島正春、富山市教育委員会 藤田富士夫、奈良県立橿原考古学研究所 室賀照子、大泉村教育委員会 伊藤公明、明野村教育委員会 佐野 隆 (野代)

第 3 節 調査方法

一般県道須玉・ハケ岳公園線建設事業に伴い、1989年度から1993年度まで実施され、残りの部分についてはなお引き続き調査が行われている。調査の方法は、調査区域が南北に長く、また建設道路は緩やかに弧を描いているため、調査年度によって北からB区・A区・C区と設定を行った（第 1 図）。1989年度にA区にA-1グリッドの設定を行った関係上、A区より北の調査区にB区を設定することとなった。A区とB区の境を0基準として、北方向に1から順にグリッドを、A区内には0を基準として南へ1から順に番号を付した。調査は用地買収にもなっていたため未調査区域が存在するとともに、本線を横切る道路部分および緩やかなカーブを有していることから、A区から独立したC区を設定した。よってA区とC区のグリッドは、若干の修正が行われている。

今回報告するA区は、1989年度の調査に基づいて調査区内約1,000㎡に5m×5mを基本とするグリッドが設定されており、東西方向にアルファベットを、北から南へ数字の設定を行った（第 2 図）。尚、表土除去作業はベルトコンベアを使用し、人力による遺構確認を実施した。

(山本)

第II章 環境

第1節 地理的環境

大泉村は八ヶ岳連峰を境として長野県に接する山梨県の北西部に位置し、その大泉村の南端に甲ッ原遺跡は存在する。地番は、山梨県北巨摩郡大泉村西井出字大林である。遺跡の標高は約790mであり、南に緩く傾斜した尾根上に立地する。遺跡のすぐ東側には油川、西側には甲川が流れ、本遺跡は両河川に挟まれた所に立地する。これらの河川は八ヶ岳の裾野、標高約1000m付近の自然湧水帯から流れ出たものであり、周辺には油川・甲川を含む大小の河川により開析された谷と、北から南に傾斜する細長い尾根が多く見られる。このような尾根上には多くの遺跡が存在し、甲ッ原遺跡もそのうちの一つである。

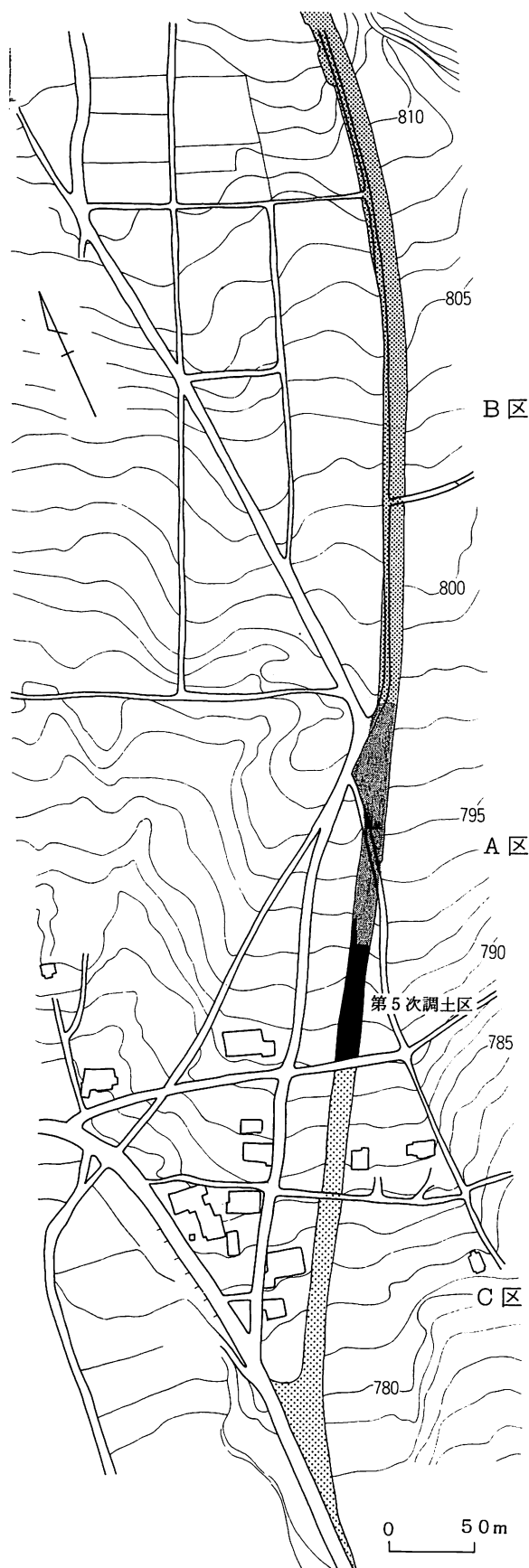
第2節 歴史的環境

昭和55年に大泉村教育委員会がまとめた遺跡分布図によると、村内には72ヶ所の遺跡が確認されている。その内縄文時代の遺跡数は61を数え、それらは山岳部を除く村内全域に分布している。複数の時期にまたがる遺跡がある為、合計数を越えるが、縄文時代の遺跡の内訳は、早期5、前期26、中期41、後期22、晩期3となる。

今回の第5次調査においては、縄文時代前期後半（諸磯b式期）、中期初頭（五領ヶ台II式期）、中期後半（曾利V式期）の住居が主体を占めることから、これらの時期に該当する周辺の遺跡を概観したい。

甲ッ原遺跡より北西約1kmの地点に、天神C遺跡が存在する。天神C遺跡からは、住居が諸磯式期49軒、五領ヶ台式期8軒確認されている。諸磯式期の住居は重複しながら環状に巡っており、その住居に囲まれた中央部に土坑が集中している。また、西約1.5kmの地点には御所遺跡が存在し、諸磯式期の住居が2軒確認されている。西約1kmの寺所遺跡は平安時代を中心とした遺跡であるが、諸磯式期の住居が2軒確認されている。他に周辺で諸磯式期の住居が確認されているのは、和田第2遺跡、原田遺跡、下井出遺跡、古林第3遺跡であり、それぞれ200~300m程度の距離に存在しており、集落間の関係など当時の社会を考えるうえで、非常に興味深い。

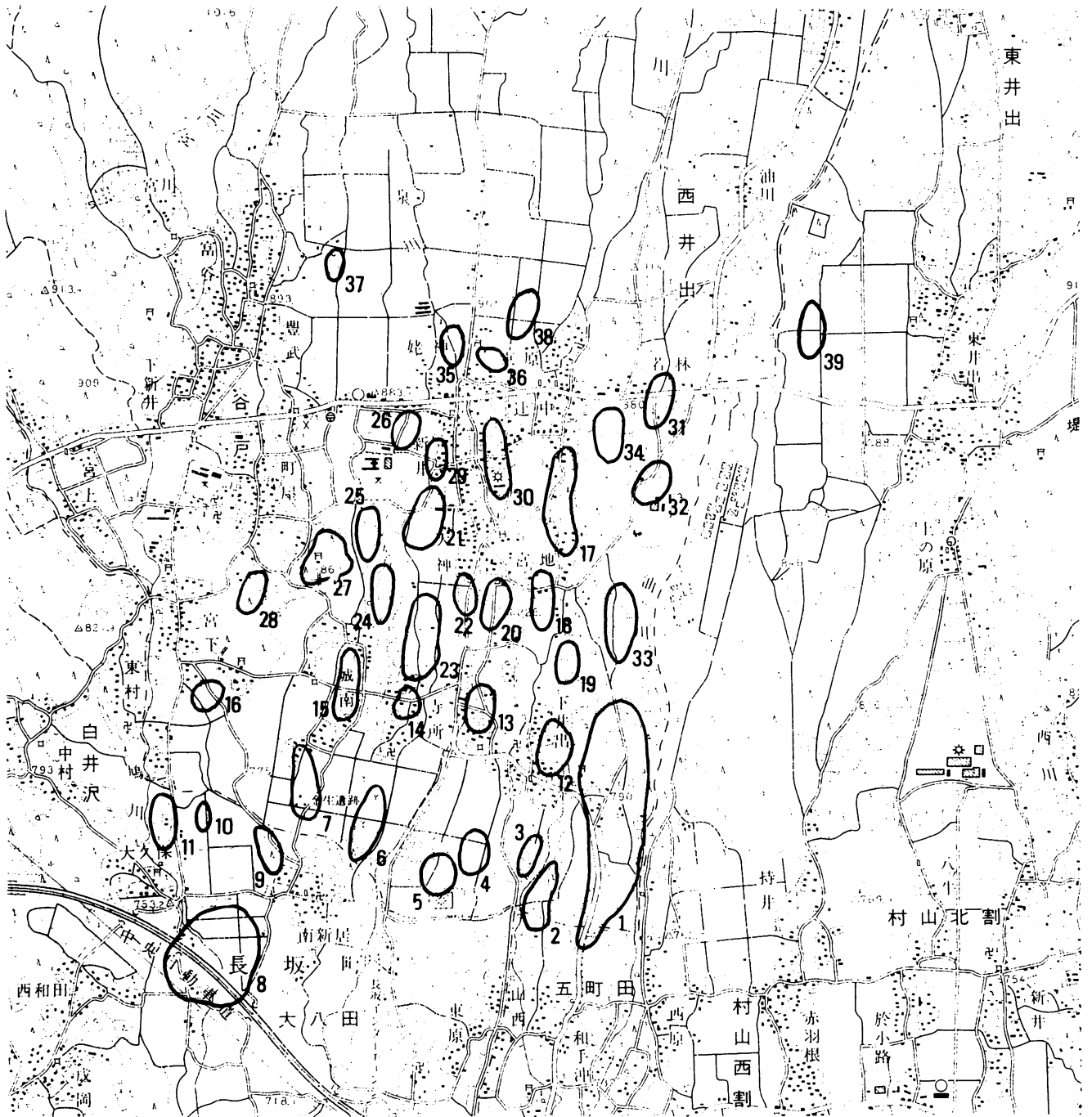
曾利式期では、北約1.8kmに姥神遺跡がある。中期から後期にかけての遺跡で、住居20軒中2軒が曾利式期のものである。また、北西約1.2kmの方城第1遺跡では、曾利式



第1図 調査区設定図

期の住居が7軒確認されている。西へ約1km離れた地点では国指定史跡の金生遺跡がある。後・晩期を主体とする遺跡であるが、曾利式期の住居が2軒確認されている。

縄文時代の多くの遺跡が分布する大泉村も弥生・古墳・奈良時代の遺跡数は極端に少なく、この地域の自然的条件にこれらの時代の生産手段が適合し得なかったことが指摘できる。再び遺跡数の増大を見るのは、平安時代以降である。
(白川)



第2図 遺跡分布図

- 1. 甲ッ原遺跡 2. 和田第2遺跡 3. 甲ッ遺跡 4. 原田遺跡 5. 木ノ下・大坪遺跡 6. 寺所遺跡
- 7. 金生遺跡 8. 小和田遺跡 9. 深草館址 10. 別当一三塚遺跡 11. 別当遺跡 12. 下井出遺跡
- 13. 清水遺跡 14. 寺所壘址 15. 城下遺跡 16. 豆生田第3遺跡 17. 宮地第1遺跡 18. 宮地第2遺跡
- 19. 宮地第3遺跡 20. 宮地第4遺跡 21. 天神A・B遺跡 22. 天神C遺跡 23. 山崎第1遺跡
- 24. 山崎第2遺跡 25. 城上第1遺跡 26. 城上第2遺跡 27. 谷戸城址 28. 御所遺跡 29. 新井遺跡
- 30. 辻遺跡 31. 古林第1遺跡 32. 古林第2遺跡 33. 古林第3遺跡 34. 古林第4遺跡 35. 姥神遺跡
- 36. 東姥神B遺跡 37. 方城第1遺跡 38. 東原遺跡 39. 石堂B遺跡

第Ⅲ章 遺構と遺物

ここに報告する調査区は、第1次～第4次調査において両側が前期および中期の集落が確認されており、ちょうどその中間部分に位置することから、位置的にも興味深い地点であった。結果的には縄文時代前期～中期、平安時代以降、近世に属する遺構の存在が明らかとなった。本調査区においては遺構の密度はそれほど濃くなく、それぞれの時期において集中して存在する傾向が認められた。

遺構番号については、前年度以前の調査結果を踏まえた上で、通し番号としたため土坑は227号～、住居跡は41号～以降としたことを触れておく。

第1節 住居跡

住居跡は合計11軒が確認され、全体的に調査区の北東側に集中する傾向がある。時代的にはすべて縄文時代に属し、第48号住居跡が前期前半神之木式期、第42・43・44・47・49号住居跡が前期後半諸磯b式期、第41号住居跡は中期初頭五領ヶ台II式期、第44'・46号住居跡は中期前葉落沢式期、第45・45'号住居跡は中期末葉曾利V式期に位置付けられる。

第41号住居跡（C・D-36・37グリッド）（第4～8図）

位置 本調査区の南側に存在する。

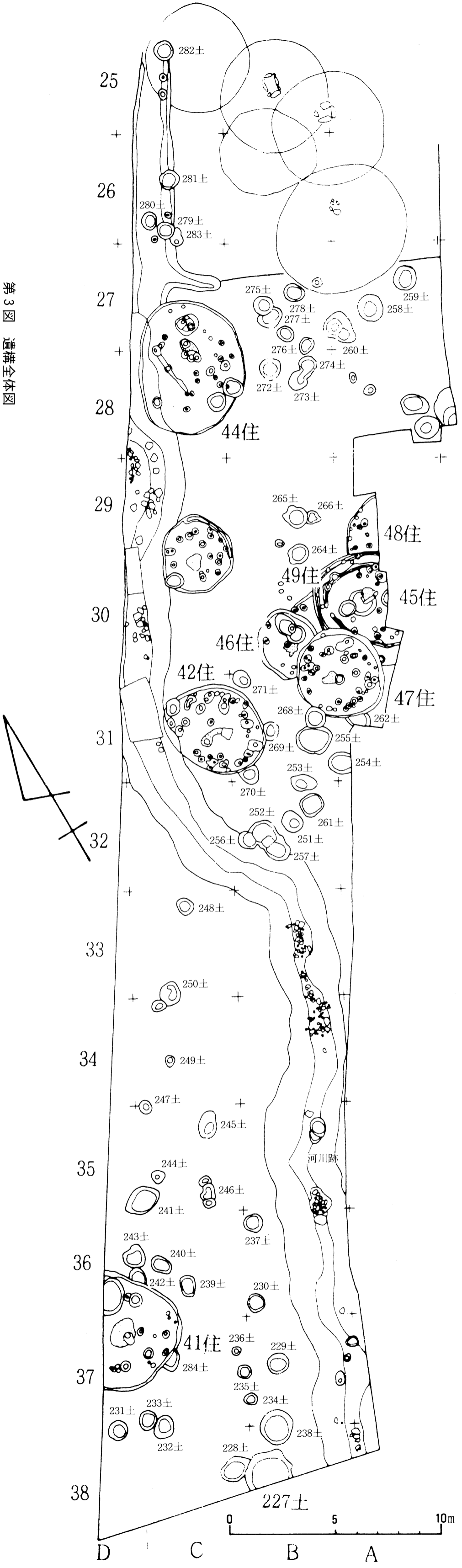
形態・規模 住居跡の西側約3分の1が調査区外に当たる為、正確な形態・規模は明確ではないが、一辺が約5mの円形を呈するものと思われる。遺構確認面から床面までの深さは、北壁45cm、東壁25cm、南壁30cmである。周溝は認められない。柱穴は3、6、11、14が主柱穴になると思われる。ピット3は径23×22cm、深さ50cm、ピット6は径36×30cm、深さ45cm、ピット11は径26×23cm、深さ41cm、ピット14は径26×20cm、深さ47cmである。他にピット10、12、16がそれぞれ22cm程度の深さを有し、補助柱的なものと考えられる。炉は埋甕炉である。炉の掘り込みは径57×45cm、深さ12cmであり、掘り込みの北側のやや深い箇所に土器は存在している。住居跡の時期は五領ヶ台II式期に位置付けられる。

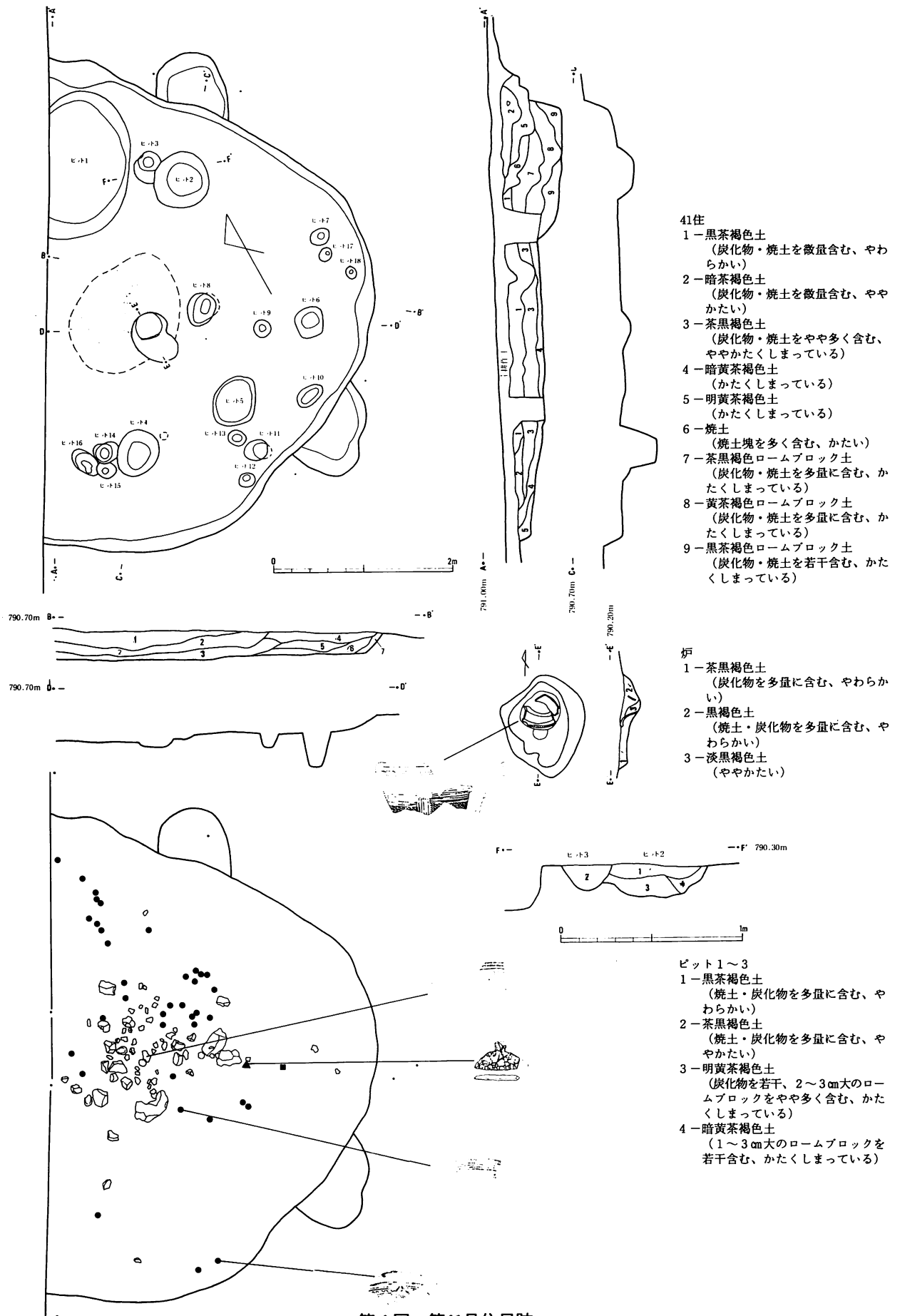
遺物 五領ヶ台II式に比定される。1は口縁部に交互刺突文が施され、その直下に爪形を刻んだ隆帯が巡らされる。頸部は無文で、胴部小突起部から半截竹管文による懸垂文が施される。小突起部からは沈線文が横位にも施されており、沈線区画内には、半截竹管による格子目文が施される。2は頸部に爪形を刻んだ隆帯が一条巡り、小突起部から半截竹管による懸垂文が施され、懸垂文に並行して交互刺突文が施される。また、横位にも沈線文が施され、沈線間にも交互刺突文が施される。沈線区画内は斜位の沈線で充填される。3・4は口縁部破片で、爪形を刻んだ隆帯が巡らされる。3は胎土に黒色鉱物粒が目立つ。5は口縁部破片で、交互刺突文と爪形文が巡らされる。渦巻状の貼り付けの上にも爪形が刻まれる。6は一条の沈線文が巡らされ、その下に交互刺突文が施される。7・21は小突起部から懸垂文と横位の沈線文が施される。7の沈線区画内には斜位の沈線文が施される。8～10・12は横位の平行沈線文が巡り、隆帯上に爪形文が施される。9・10・12には交互刺突文が施される。15・19は横位の沈線区画内が斜位の沈線で充填される。17・18は沈線区画内に格子目文が施される。20は弧状平行沈線文が施され、刻みが施された隆帯を有する。21～27は平行沈線文が縦位ないし斜位に施される。14・28～30は横位に平行沈線文が施される。50～59は口縁部内側に押し引き文を加えた浅鉢である。54は口唇部に刻みが施される。55・56・58は押し引き文により円形状に文様が施される。60～62は縦位に平行沈線文が施された胴部破片である。
(白川)

本跡から出土した石器は13点であり、その内訳は石鏃2点(15.4%)、石匙1点(7.7%)、スクレイパー1点(7.7%)、打製石斧4点(30.7%)、磨石1点(7.7%)、凹石1点(7.7%)、石皿2点(15.4%)、二次加工のある剥片1点(7.7%)である。

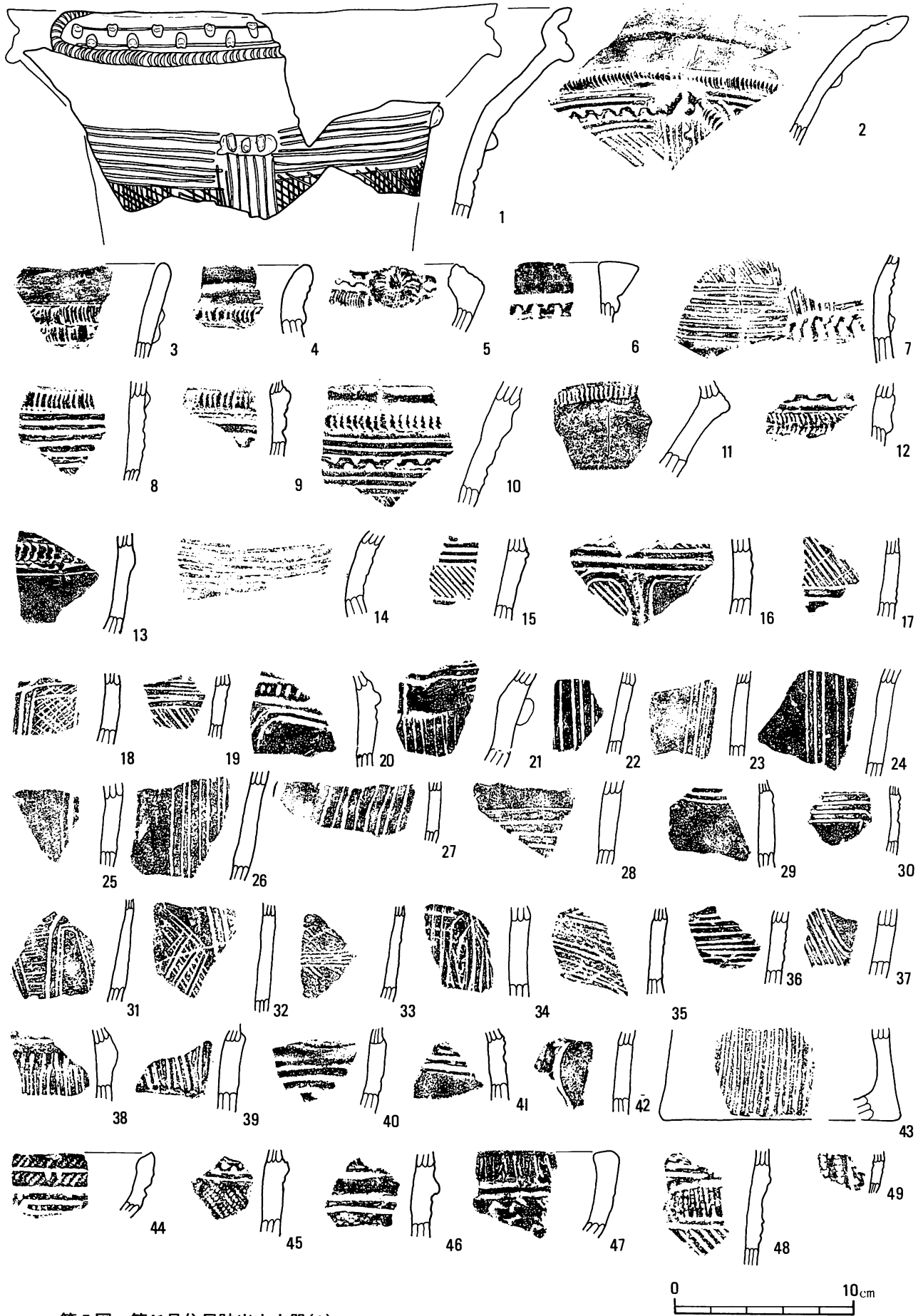
1・2は石鏃であり、1は完形、2は先端部と脚部が欠損している。どちらも無茎凹基で黒曜石製である。3は側辺部に二次加工のある剥片で黒曜石製である。4は黒曜石製の横型の石匙であり、つまみ部と刃部の一部が

第3図 遺構全体図

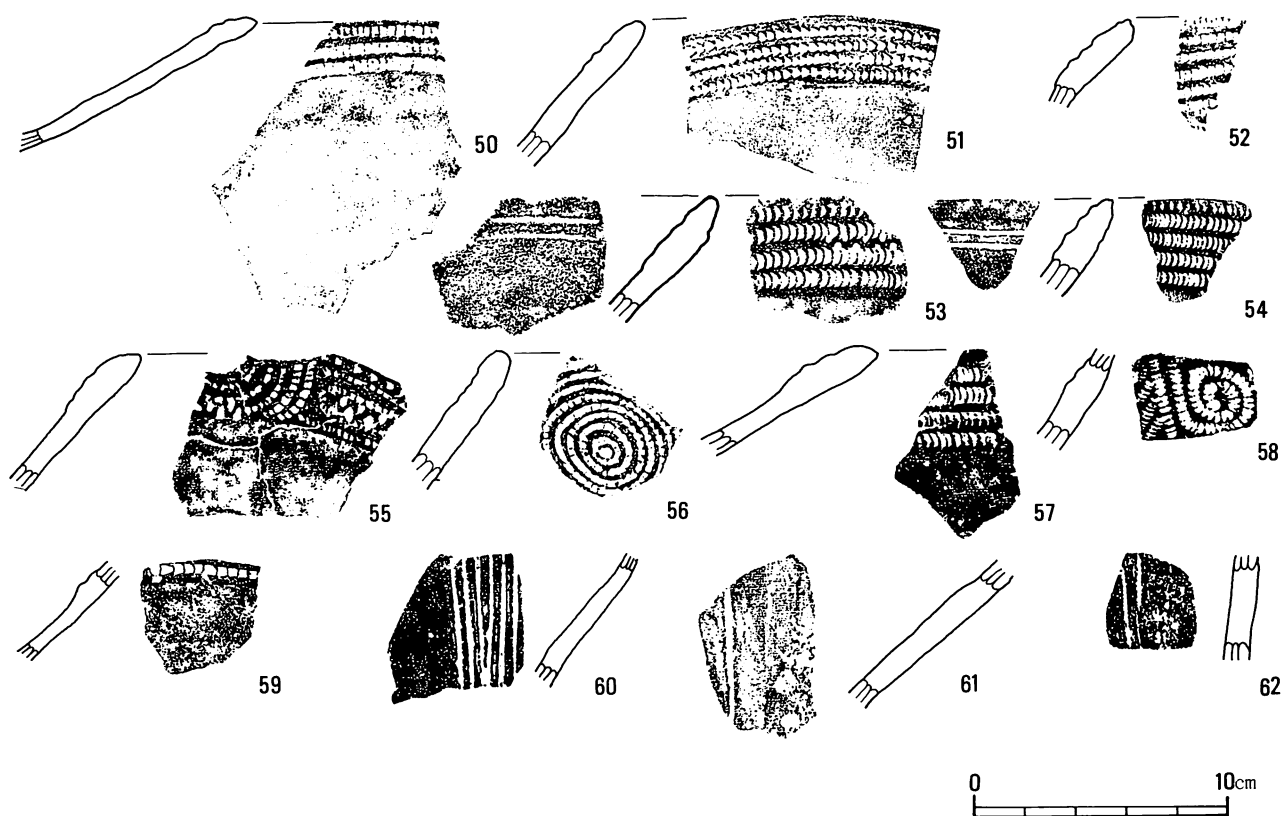




第4図 第41号住居跡



第5图 第41号住居迹出土土器(1)



第6図 第41号住居跡出土土器(2)

欠損している。5はチャート製のスクレイパーである。形態としては三角に近いが、その一辺が折れており、全体の形態は不明である。一辺に円みのある刃部を形成している。

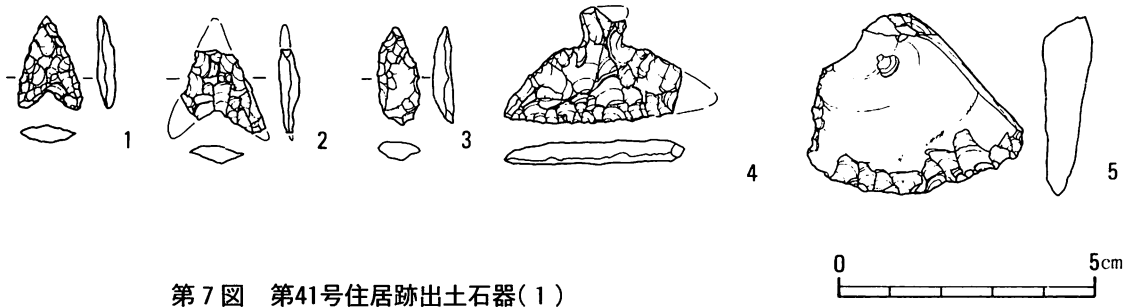
6～9は打製石斧である。6・8・9は短冊形であり、さらに6・9は刃部へいくに連れて少し幅広くなっているものである。7は楔形であり、胴部にわずかな屈折がみられる。6・7は完形であり、8・9は基部である。石材はすべてホルンフェルスである。10・11は石皿である。10は平らな作業面があるが破片で全体の形は分からない。11も欠損部が多いので全体の様子は分からないが、浅く平らな作業面がある。12は棒状礫の半分が欠損した磨石である。磨面は5面確認できた。13は凹石で、凹みは表裏両面に1つずつあり、磨面はない。石材は10～13とも安山岩である。
(村松)

第42号住居跡 (B・C-31グリッド) (第9～13図)

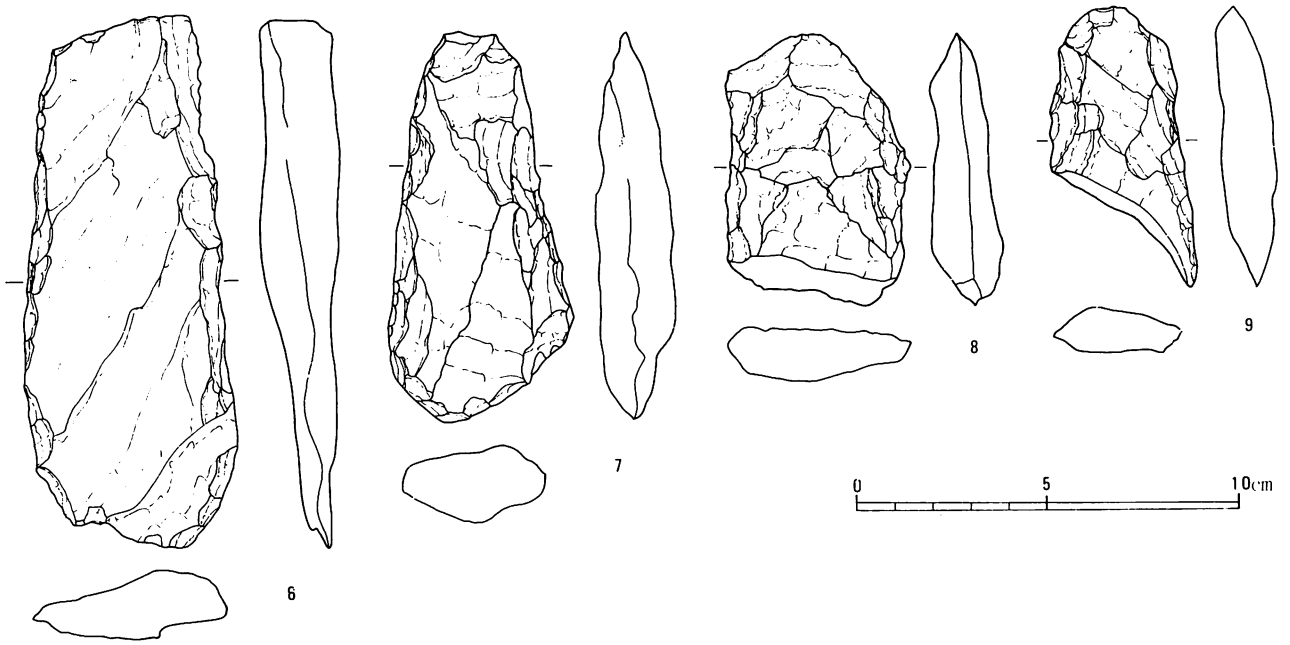
位置 調査区北東部に位置する。住居跡の西側一部が、旧河道によって切られている。

形態・規模 長円形を呈し、長軸4.9m、短軸推定3.8mである。住居の掘り込みは、なだらかなすり鉢状を呈し、遺構確認面から床までの深さが、東壁20cm、南壁4cm、北壁16cmである。床面は平坦であり、炉の周辺はしまりがよい。周溝は認められない。支柱穴と思われるものは、ピット2、3、7、20、25である。ピット2は径72×54cm、深さ57cm、ピット3は径61×42cm、深さ74cm、ピット7は径42×29cm、深さ51cm、ピット20は径58×41cm、深さ44cm、ピット25は径52×41cm、深さ45cmである。炉は地床炉で、住居跡中央部からやや西よりに皿状に浅く掘り込まれる。焼土は炉の中央から東へ長く認められる。地床炉の東側には、台石が見られ地床炉に伴うものと考えられる。住居跡の西側には、柱穴の確認できない部分があり、住居の入口部が想定できる。住居跡の時期は諸磯b式期に位置付けられる。

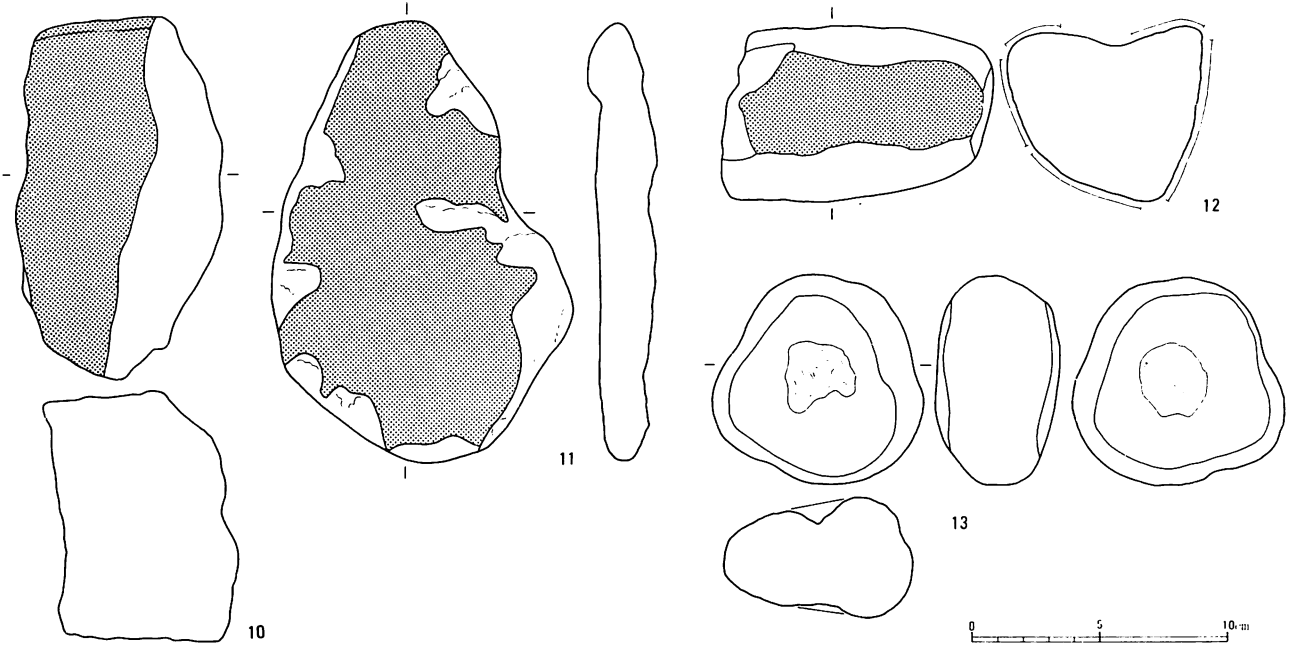
遺物 諸磯b式に比定される。1～3・7・8は口縁部破片で、横位の浮線文に矢羽根状の刻みが施される。4・5・6は縦位や斜位の浮線文に刻みが施される。9・10は粘土紐が梯子状に貼り付けられることにより、文様が



第7图 第41号住居跡出土石器(1)



第8图 第41号住居跡出土石器(2)



構成されるもので、9には刻みを有する浮線文が認められる。11・12は浮線文に矢羽根状の刻みが施されるもので、浮線間には棒状工具による刺突が巡らされる。13は沈線間に刻みが施される。14・15・16は口縁部が「く」の字に内湾する器形で、縄文を地文とし、2条一単位の沈線文が横位に施される。14・16には口縁部にボタン状の貼り付けがなされる。17～21は多截竹管状工具により文様が施される。22・24～31・33・34・36は縄文を地文とし、横位の沈線文が施される。22は沈線の下部に櫛状工具による刻みがなされる。23は縄文を地文とするもので、棒状工具による刺突により文様が構成される。32は半截竹管による沈線文が横位に施される。35は細い半截竹管を斜め下から突くように刺突がなされる。37・38は半截竹管による沈線で文様が構成される浅鉢形土器で、胎土がきめ細かい。39～42は器面が縄文で充填される。39・40は胴部が「逆ハ」字状に開き、口縁部がわずかに立ち上がる。41は口縁部が「く」の字状に内湾し、口唇部に小突起の貼り付けがなされる。42・43は底部破片である。

(白川)

出土した石器総数は16点であり、その内訳は石鏃6点(37.5%)、石匙1点(6.25%)、スクレイパー1点(6.25%)、打製石斧1点(6.25%)、凹石4点(25%)、石皿1点(6.25%)、二次加工のある剥片2点(12.5%)である。

1～6は黒曜石製の石鏃である。全て無茎凹基であるが、基部形態をみると比較的挟りが浅いもの(1～3)深いもの(6)、基部中央に少し挟りをいれたもの(4・5)の三つに分けられる。1・2・3は完形だが、4は脚部、5は左半分、6は先端部がそれぞれ欠損している。7は横型の石匙である。つまみ部と刃部の一部が欠けている。黒曜石製である。8は黒曜石の剥片の一部に小剥離が認められたものである。9は一側辺に刃部を作り出してあるスクレイパーであろう。一部小剥離もみられ、石材はチャート製である。

10は打製石斧の刃部である。胴部上半が欠損しているが、おそらく短冊形になると思われる。石材は頁岩である。11は二次加工のある剥片であるが、細かな調整はあまり施されていない。石材は砂岩である。

12～15は凹石である。いずれも一部あるいは半分ぐらい欠損している。12は表面に3つ、13も表面に3つ、14は表面に2つ裏面に3つ、15は表面に3つそれぞれ凹みがある。石材はどれも安山岩である。16は平らな作業面をもつ安山岩製の石皿である。

(村松)

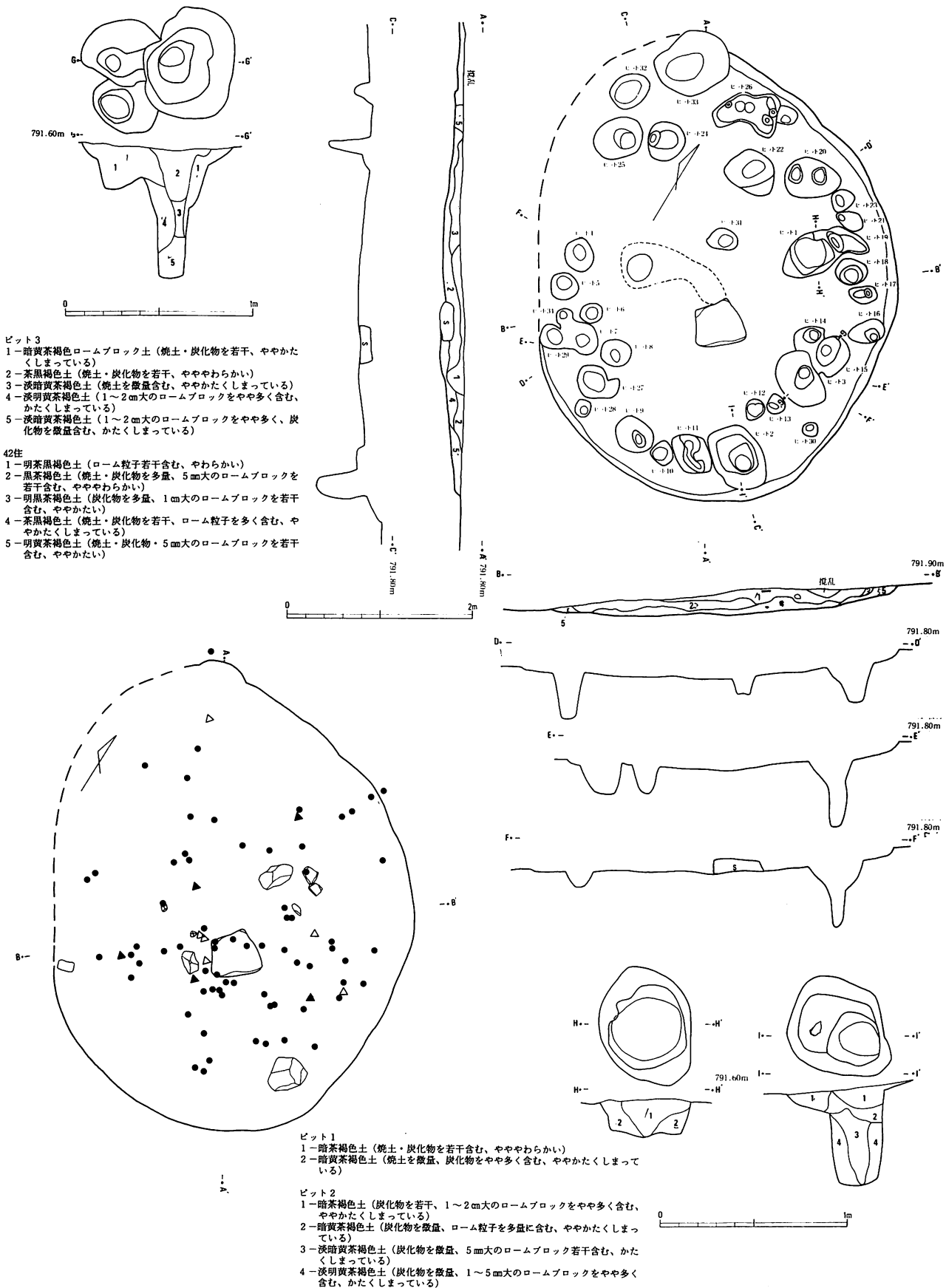
第43号住居跡(B・C-29・30グリッド)(第14～17図)

位置 調査区の北部に位置する。

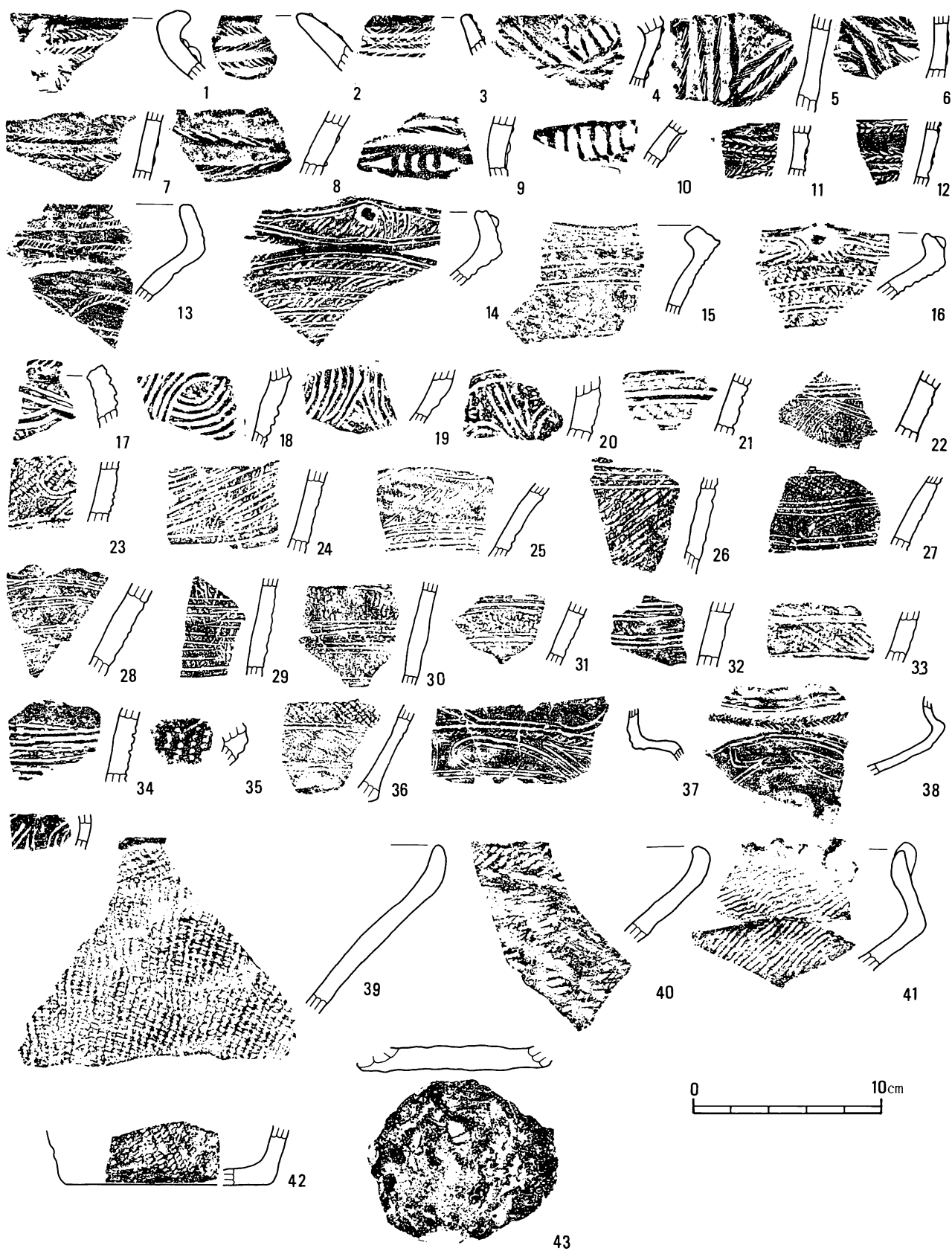
形態・規模 ほぼ円形のプランを呈し、長軸3.55m、短軸3.2mである。遺構確認面から床までの深さは、東壁9cm、西壁5.7cm、南壁8.5cm、北壁12cmである。床面ほぼ平坦で、北東から南西へ緩く傾斜する。支柱穴と思われるものに、ピット2、3、7、12、19がある。ピット2は径27×24cm、深さ22cm、ピット3は径30×27cm、深さ35cm、ピット7は径45×33cm、深さ44cm、ピット12は径23×19cm、深さ26cm、ピット19は径32×28cm、深さ52cmである。周溝は北東部で認められ、幅25～13cm、深さ10cm程度である。ピットの配列から、住居の入口部は南側であったと思われる。炉は住居跡中央やや南よりに設置された径40×31cm、深さ3cmの地床炉であり、焼土の確認できる範囲は35×12cm程度とやや狭い。住居跡の時期は諸磯b式期に位置付けられる。

遺物 諸磯b式に比定される。1～4は口縁部が「く」の字状に内湾するもので、浮線文が施される。1はくびれより上の浮線文には矢羽根状の刻みがなされるが、それより下部の浮線には刻みが施されない。5と同一個体。2は浮線文が渦巻状に貼り付けられ、浮線文には刻みが施される。3は口縁部がわずかに内湾する立ち上がりの短いもので、刻みを有する浮線文が横位に貼り付けられる。4は浮線が貼り付けられた後、撫でられているため文様が明瞭ではないが、浮線文に刻みがわずかながら残存する。6は沈線文が引かれた後、縄文が施され、刻みを有する浮線文が2本一単位で横位に巡らされる。7～10は浮線文に矢羽根状の刻みがなされる。7の胎土は他のものと異なり、色調は白っぽい。11～19・20・27は縄文を地文とするもので、平行沈線文が施される。文様は曲線を多様した弧状が主体である。21～25・27は縄文を地文とし、21・22・24・27は横位の、23・25は斜位の平行沈線文がそれぞれ施される。26は櫛状工具により、斜位の沈線文が施される。28～31は縄文が施される。32・33は浅鉢の破片である。

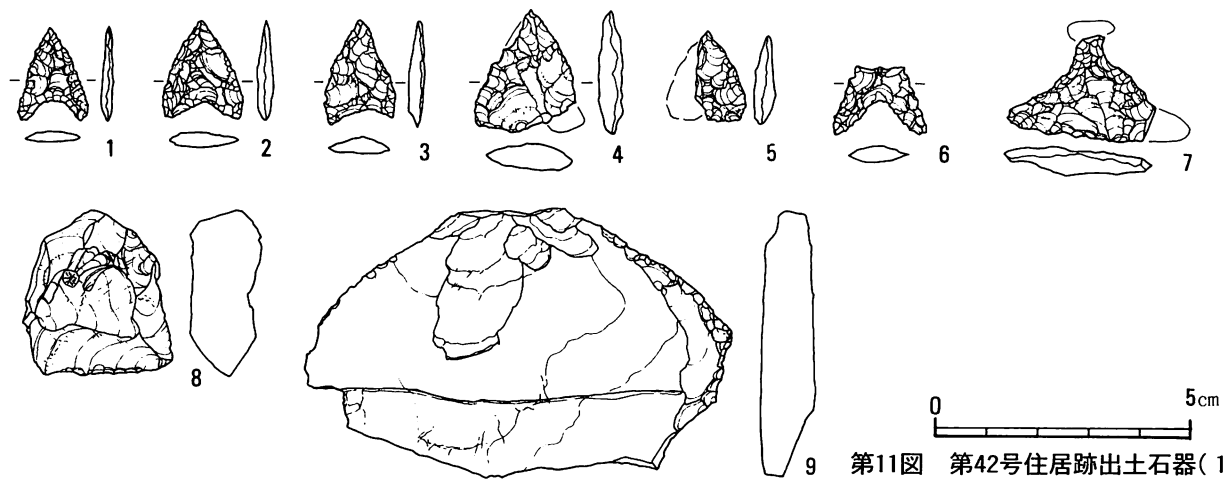
(白川)



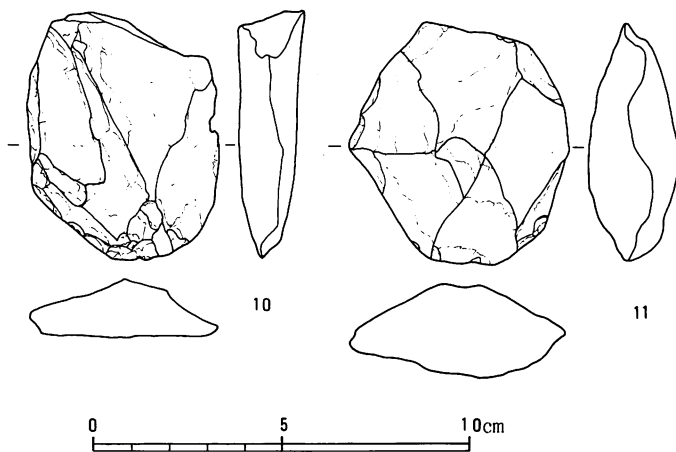
第9図 第42号住居跡



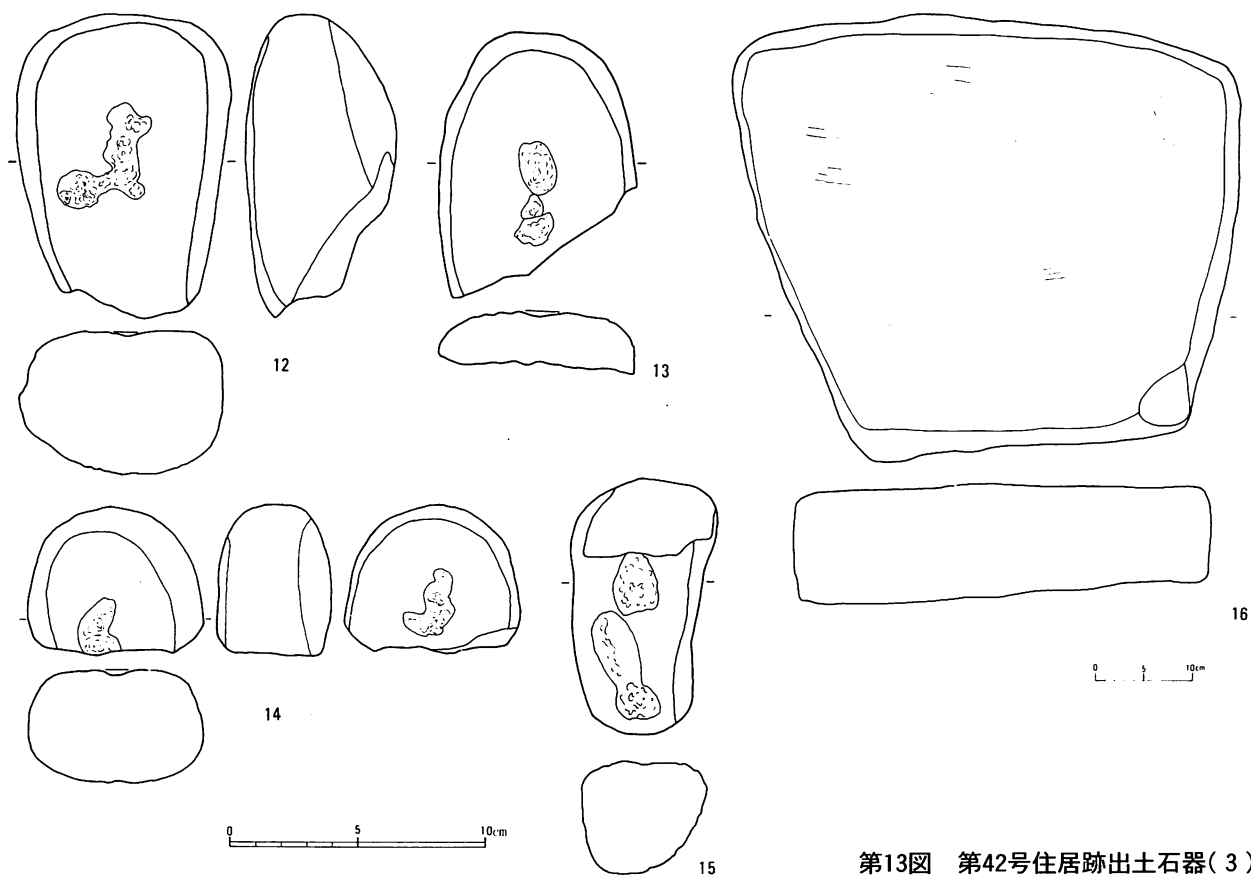
第10图 第42号住居跡出土土器



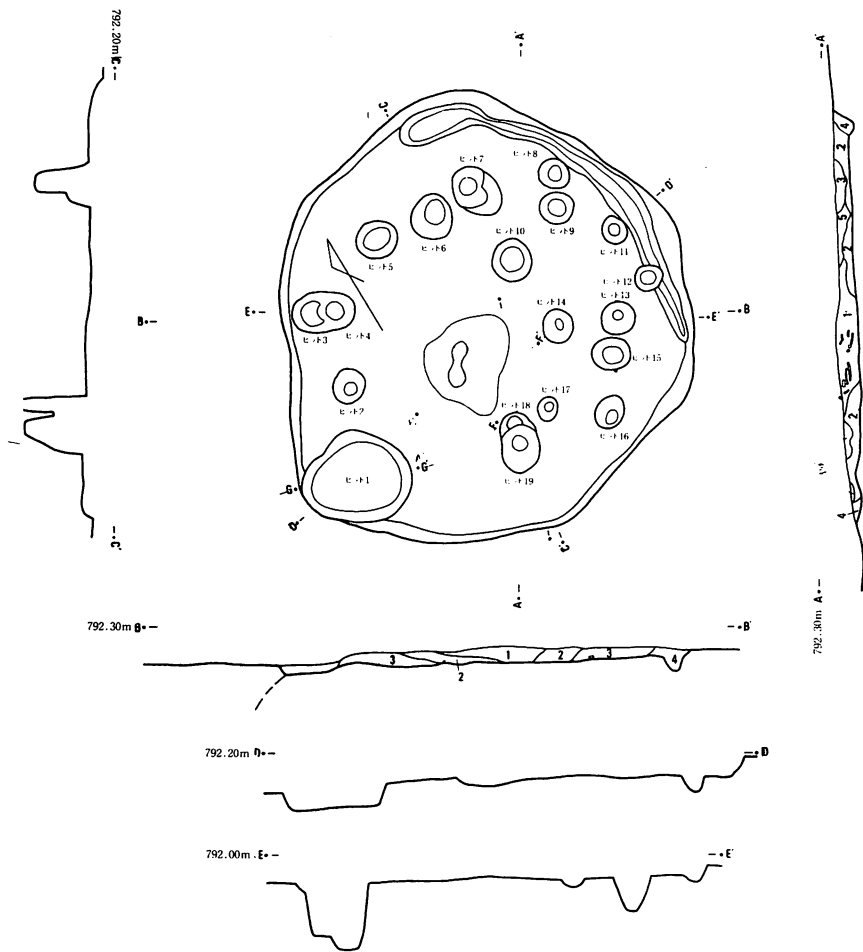
第11图 第42号住居跡出土石器(1)



第12图 第42号住居跡出土石器(2)

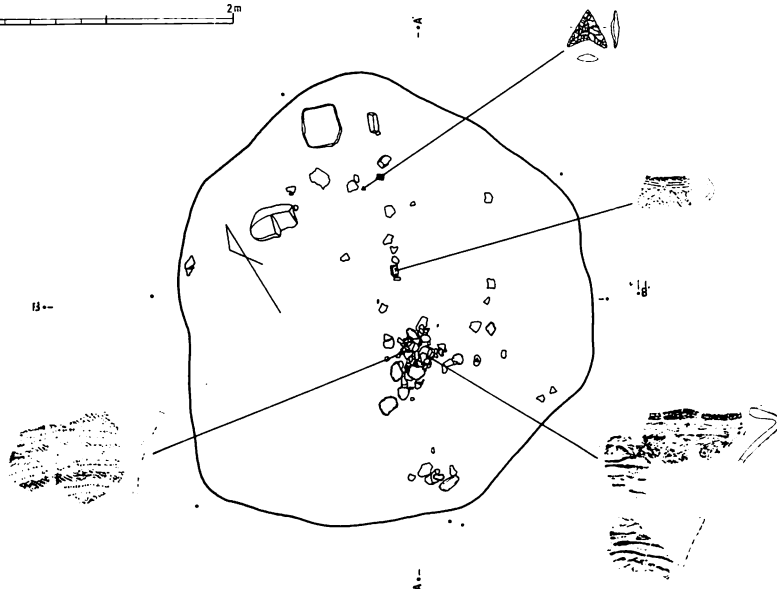
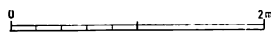
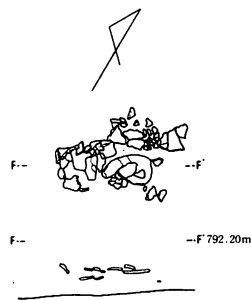


第13图 第42号住居跡出土石器(3)



43住

- 1-暗黄褐色土
(焼土・炭化物・2cm大のロームブロックを若干含む、ややかたくしまっている)
- 2-明黄茶褐色土
(焼土・炭化物を微量、ローム粒子をやや多く含む、ややわらかい)
- 3-暗黄茶褐色土
(焼土を微量、炭化物・ロームブロックを若干含む、やわらかい)
- 4-明黄褐色土
(焼土を若干含む、ややかたくしまっている)
- 5-暗黄茶褐色土
(2~3cm大のロームブロックを多く含む、ややわらかい)



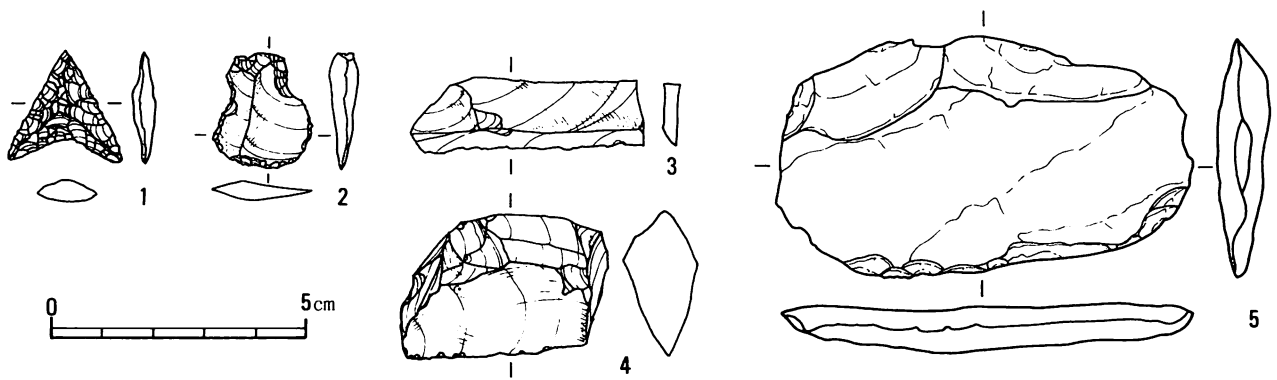
ピット1

- 1-暗茶褐色土
(焼土・炭化物を微量含む、やわらかい)
- 2-暗黄茶褐色土
(炭化物を微量、ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、ややかたい)
- 3-黒褐色土
(やわらかい)
- 4-淡暗黄茶褐色
(かたくしまっている)
- 5-黒茶褐色土
(かたくしまっている)

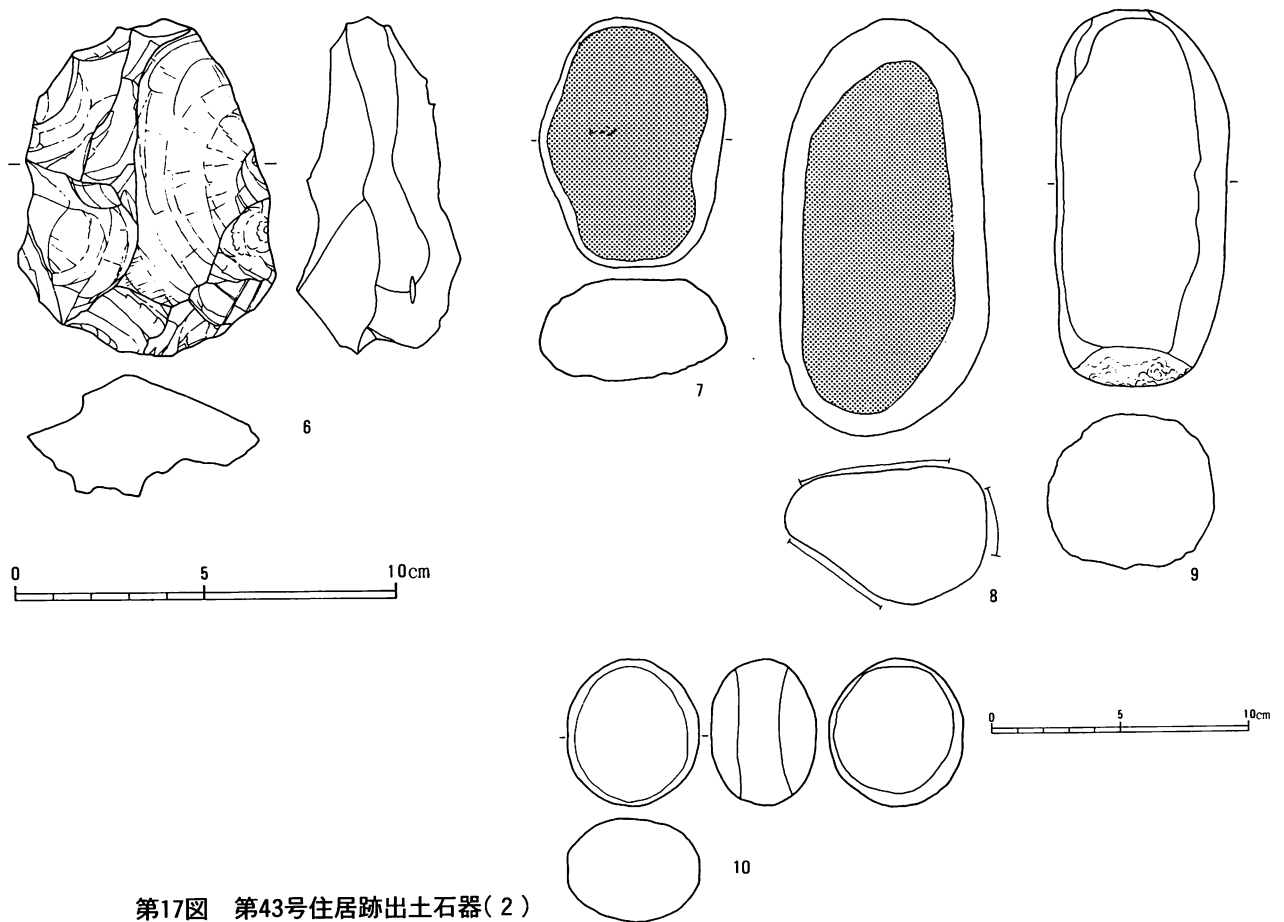
第14図 第43号住居跡



第15图 第43号住居跡出土土器



第16図 第43号住居跡出土石器(1)

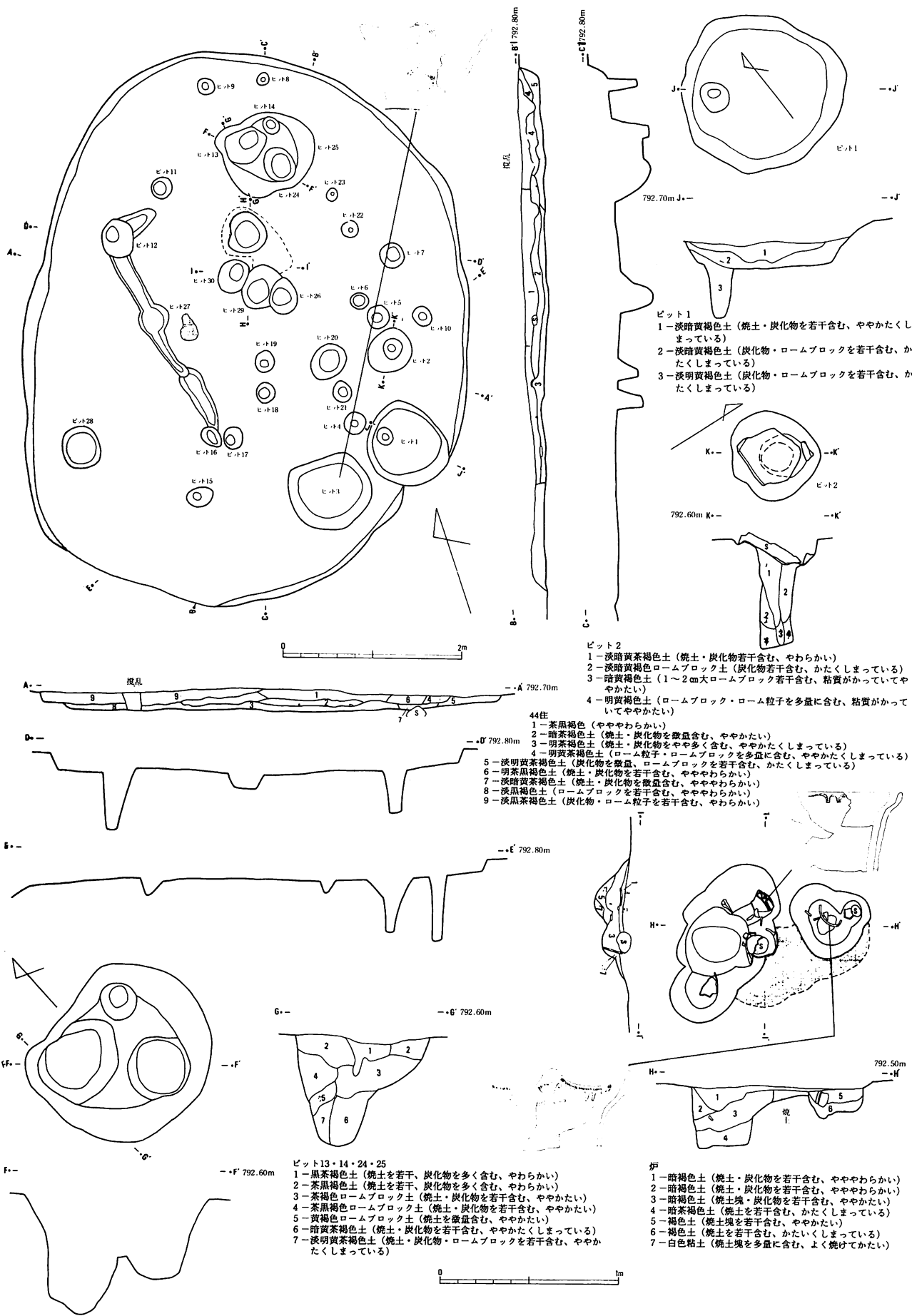


第17図 第43号住居跡出土石器(2)

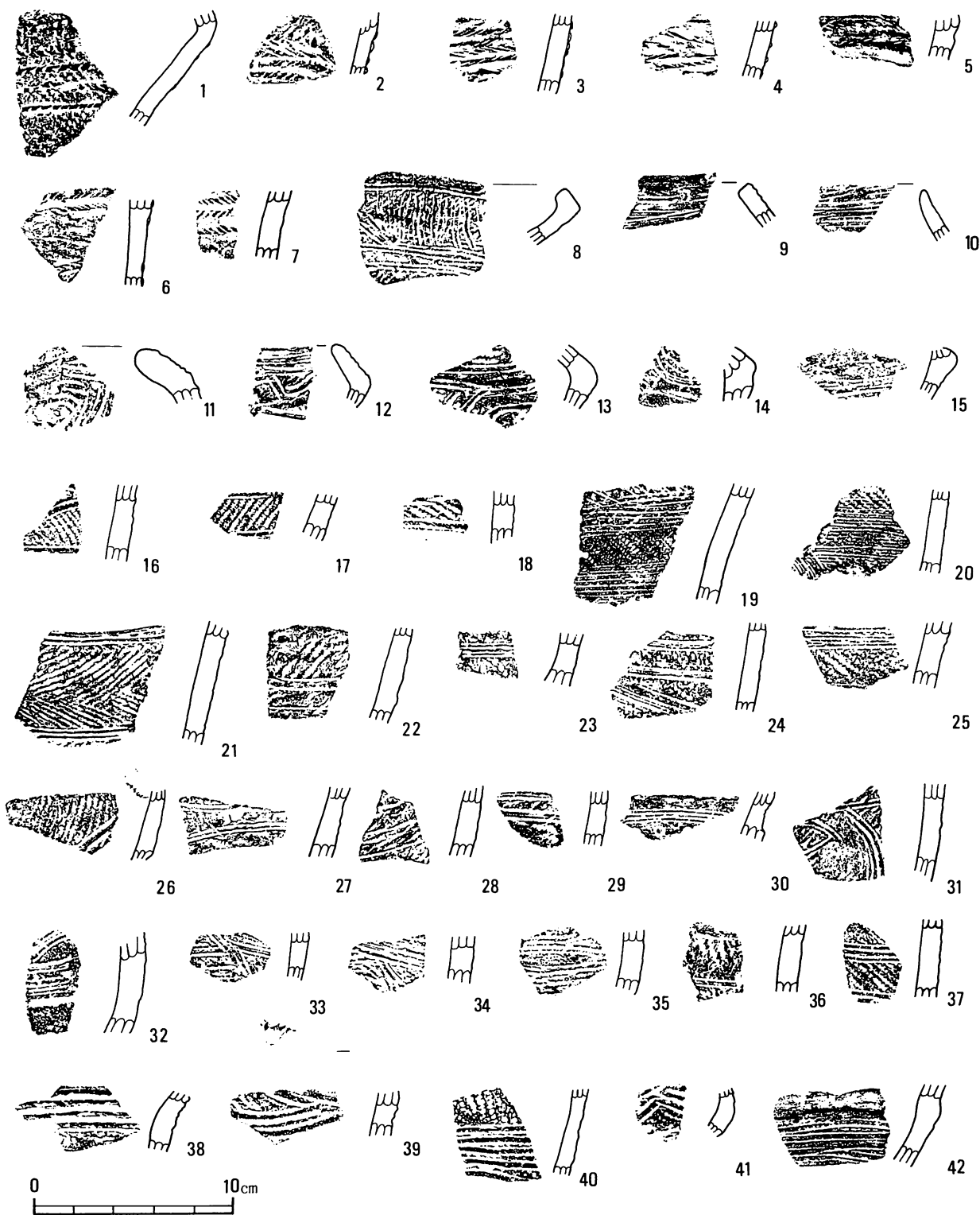
総数10点の石器の出土があり、その内訳は石鏃1点(10%)、石匙1点(10%)、横刃形石器1点(10%)、礫器1点(10%)、磨石3点(30%)、敲石1点(10%)、小剥離のある剥片2点(20%)である。

1は無茎凹基の石鏃である。2は横型の石匙である。3・4は一側片に刃こぼれと思われる小剥離のある剥片である。1～4の石材は黒曜石である。5は横刃形石器で、長方形をしており、一側辺に少し調整を施してある。石材は頁岩である。

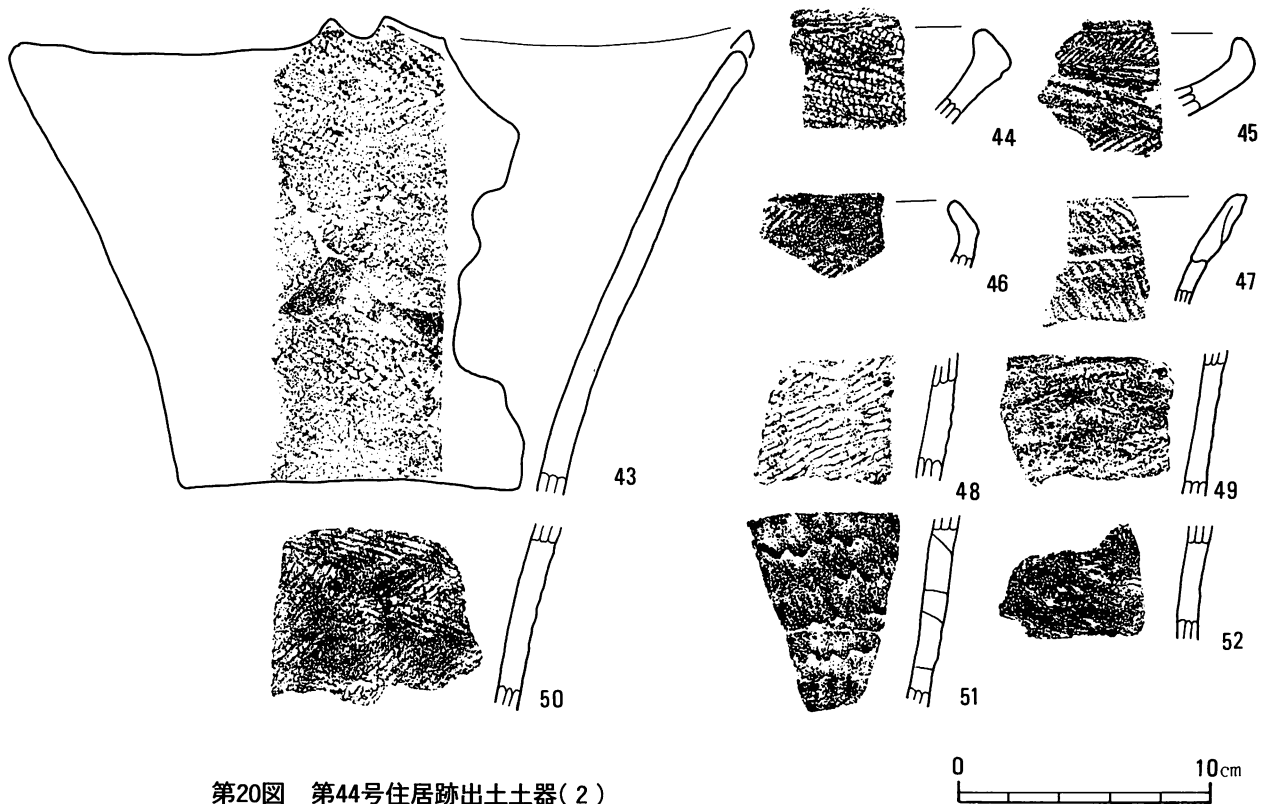
6は礫器であり、石材はホルンフェルスである。7・8・10は磨石である。7は不整楕円形をしており、磨面が1つと側面に敲打痕をもつ。8は棒状礫で磨面が3つ、10は球形に近い形をしており、表と裏の2面に磨面が認められた。石材は全て安山岩である。9は下端部に敲打痕をもつ敲石であり、花崗岩製である。(村松)



第18図 第44号住居跡



第19图 第44号住居跡出土土器(1)



第20図 第44号住居跡出土土器(2)

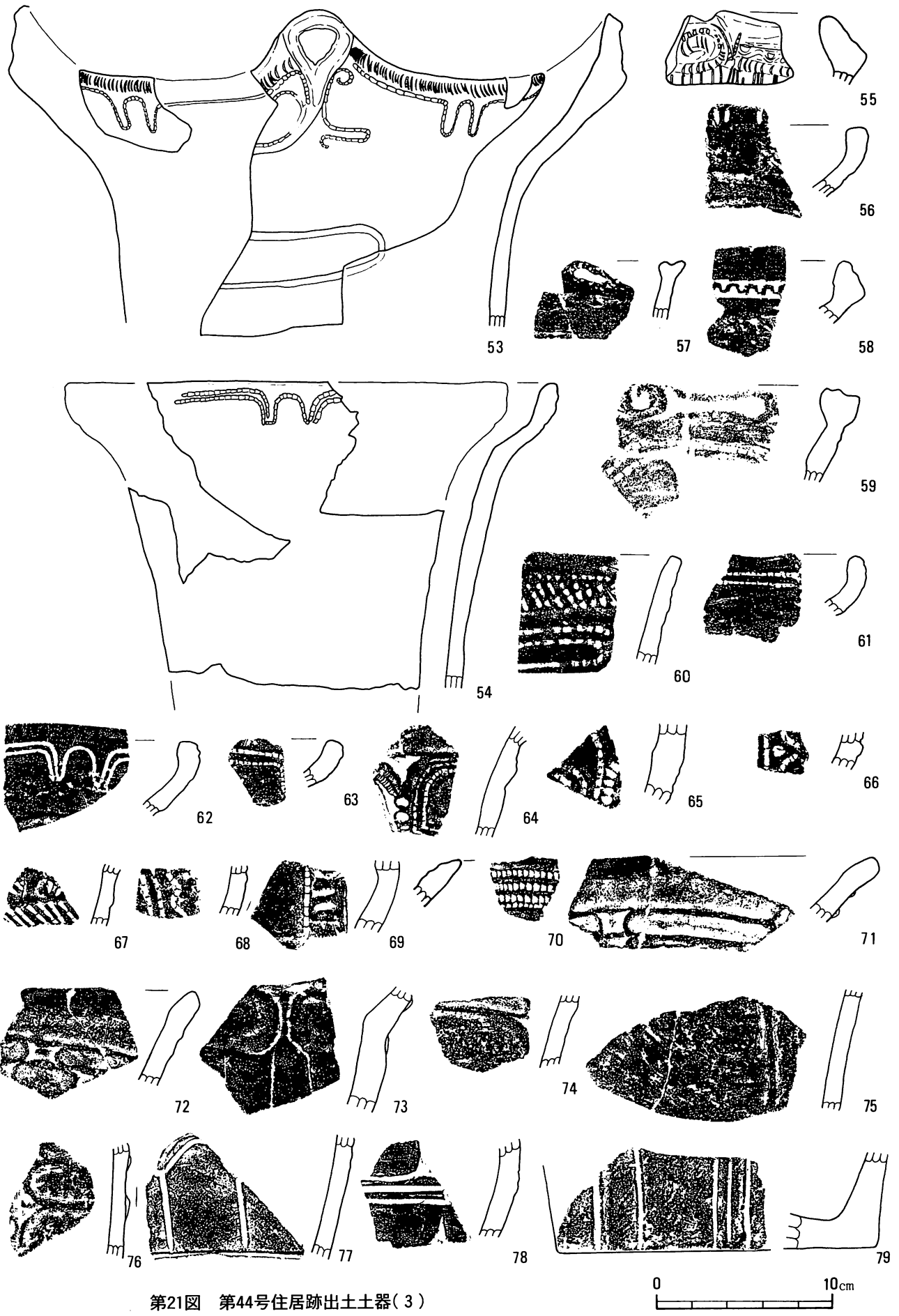
第44・44'号住居跡 (B・C-27・28グリッド) (第18~23図)

位置 本調査区では最も北に位置する。

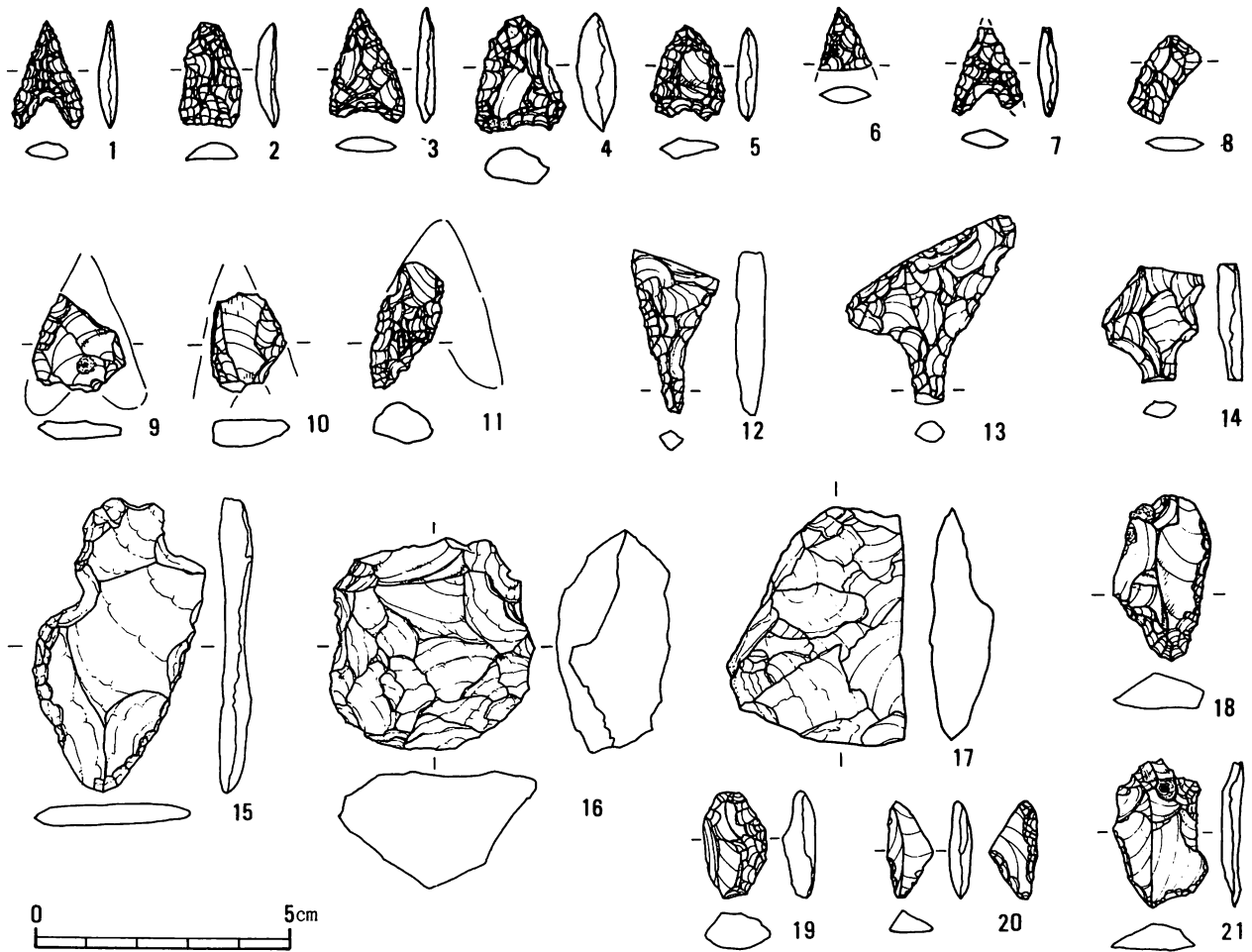
形態・規模 諸磯b式期(44住)と貉沢式期(44'住)の住居跡が重複する形で確認されている。諸磯b式期の住居跡は、長円形を呈し、長軸推定6.08m、短軸推定4.92mを側る。遺構確認面から床面までの深さは、東壁5cm、西壁13cm、南壁10cmである。支柱穴を断定することはできない。炉は貉沢II式期の住居の構築時に破壊されたものと考えられる。貉沢式期の住居跡は、諸磯b式期の住居跡の北側大部分と重複するように掘り込まれている。長軸推定5.4m、短軸推定4.3mであり、長円形を呈すると思われる。遺構確認面から床面までの深さは、東壁16cm、西壁15cm、北壁22cmである。支柱穴と思われるものに、ピット2、12、13、17がある。ピット2は径47×45cm、深さ61.5cm、ピット12は径40×34cm、深さ64.7cm、ピット13は径43×35cm、深さ64.5cm、ピット17は径22×19cm、深さ82cmであり、それぞれ60cmを越える深さを有する。周溝は西側にのみ確認できる。幅10~20cmで、深さが4cm程度である。炉は埋甕炉であり、掘り込みは42×40cmの不整円形で、深さ11cmである。炉体土器は破片しか残っておらず残存状況は極めて悪いと言えよう。

遺物 1~52は諸磯b式に比定される。1~7は浮線文に刻みが施される。8は口縁部が「く」の字に内湾し、横走する平行沈線文間に縦位の沈線文が施される。9・10は横位の沈線文が巡る口縁部破片である。11・12も口縁部破片で、11は弧状平行沈線が施される。12は斜位・弧状の沈線文が横位の沈線文間に施される。16~42は縄文を地文とし、沈線文が施されたもので、17~25・29・30・35~38・40・42は横走する平行沈線文が施される。16・26~28・31~34・39・41は斜位の平行沈線文が施される。43は胴部が「逆ハ」字状に開く器形で、双頭状の波状口縁を呈し、器面は縄文で充填される。44~46は口縁部が「く」の字状に内湾し、縄文を地文とする。49~51は無文の胴部破片である。51は粘土紐積み上げ痕が明瞭に確認できる。

53~79は貉沢式に比定される。53・54は埋甕炉の炉体土器である。53は4単位の波状口縁を呈し、口縁部に沿って爪形の刻みが施され、その下部に角押文が施される。54は平縁のもので、角押文により口縁部文様帯が構成される。55・58は交互刺突文を有する口縁部破片である。56は口唇部に刻みが施される。59~69は角押文により文



第21图 第44号住居跡出土土器(3)



第22図 第44号住居跡出土石器(1)

様が構成される。70は内面に角押文が施される浅鉢である。71~74・76は押圧の施された隆帯により、楕円区画が構成される。75は半隆起線文が縦位に施される。77は「Y」字状の沈線文が施される。79は底部破片で、垂下する沈線文が施される。器面には縄文がわずかながら認められる。(白川)

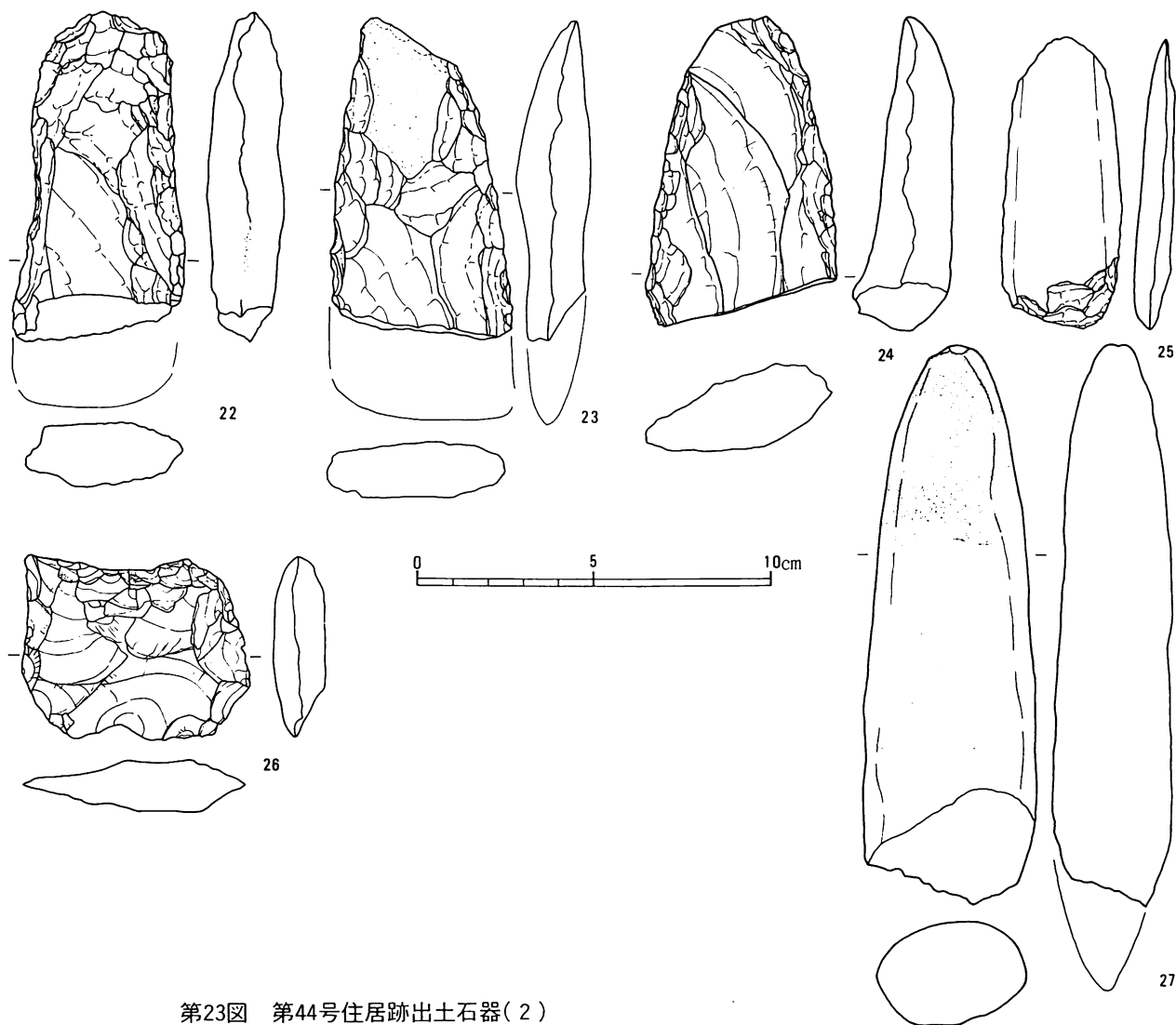
本跡から出土した石器は、全部で27点である。その内訳は石鏃11点(40.8%)、石匙1点(3.7%)、石錐3点(11.1%)、打製石斧2点(7.4%)、横刃形石器1点(3.7%)、磨製石斧2点(7.4%)、二次加工のある剥片6点(22.2%)、石核1点(3.7%)である。

1~11は石鏃である。1・3・4・5・7・9・10・11は無茎凹基、2は無茎平基であり、6・8基部が欠損しており基部形態は不明である。無茎凹基の中でも抉りの深いもの(1・7・11)、抉りの浅いもの(3・4・5)に分けられる。石材は全て黒曜石である。12~14はチャート製の石錐、15は頁岩製の斜型の石匙である。16はチャート製の石核、17~21・26は二次加工のある剥片であり、17・26はチャート、18~21は黒曜石である。

22・23は打製石斧であり、22は刃部側がわずかに膨らみ、23は側縁部が刃部へいくにつれ幅広くなっている。形態としては短冊形で、いずれも刃部を欠損している。24は横刃形石器で、図の左側が刃部になる。25・27は磨製石斧である。25は胴部の破片であり、27は刃部を欠損している乳棒状磨製石斧である。石材は22・24・25は頁岩、23は砂岩、27は流紋岩である。(村松)

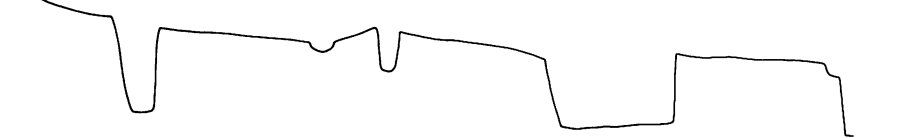
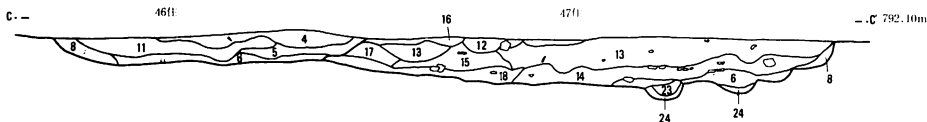
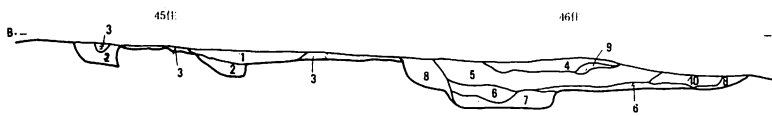
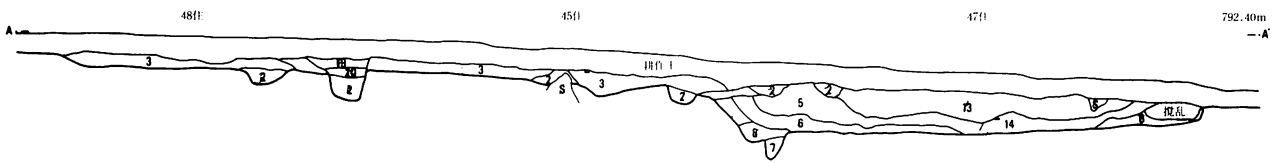
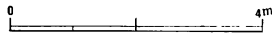
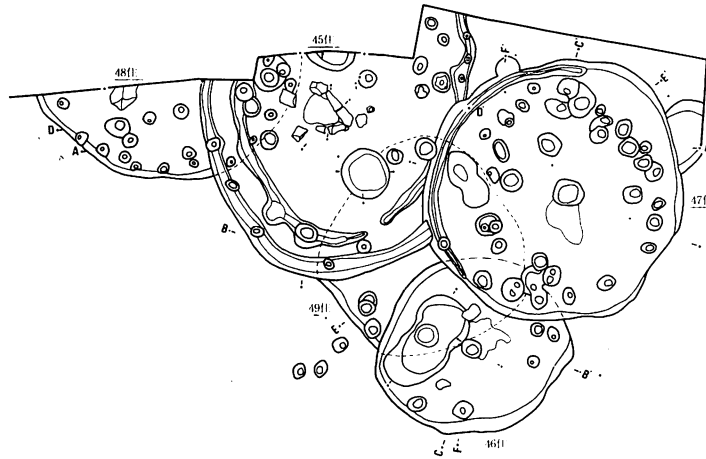
第45・45'号住居跡(A・B-29・30グリッド)(第24~28図)

位置 調査区の中央東寄りに位置している。住居跡の東側約半分は調査区外に位置するため、完掘調査はできなかった。形態・規模 楕円形を呈している。周溝が二重に認められることと、ピットの切り合い状況から拡張して重複関係を持つことがわかる。ここでは45(内)、45'(外)として扱うこととする。規模は45住では径が約4m、45'



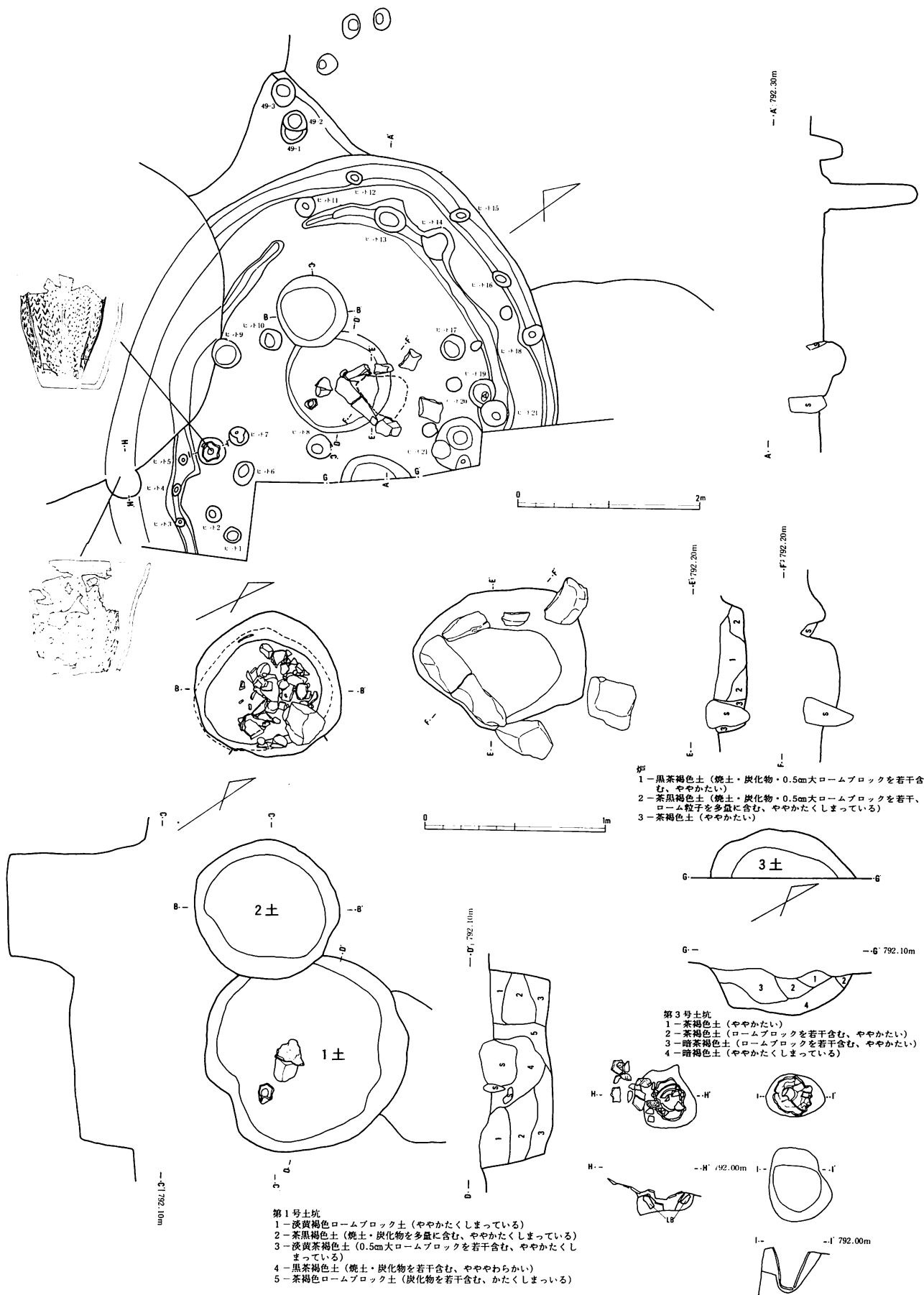
第23図 第44号住居跡出土石器(2)

住では約5mを測るが、形態が楕円を呈していることと未調査部分が存在するため、明らかにすることはできない。掘り込みは、10cm弱しか認めることができなかった。各住居跡に伴う柱穴の区分は、断定することができないが、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径20×18cm、深さ33.1cm、ピット2は径20×17cm、深さ11cm、ピット3は径12×11cm、深さ23.6cm、ピット4は径15×9cm、深さ18.3cm、ピット5は径11×9cm、深さ30.5cm、ピット6は径27×20cm、深さ41.1cm、ピット7は径21×20cm、深さ23.9cm、ピット8は径30×27cm、深さ28.3cm、ピット9は径34×31cm、深さ60.4cm、ピット10は径25×23cm、深さ19cm、ピット11は径23×21cm、深さ19.8cm、ピット12は径18×14cm、深さ36.6cm、ピット13は径37×26cm、深さ54cm、ピット14は径42×40cm、深さ19.4cm、ピット15は径22×16cm、深さ33.9cm、ピット16は径23×15cm、深さ28.7cm、ピット17は径30×28cm、深さ52.6cm、ピット18は径25×21cm、深さ14.3cm、ピット19は径32×28cm、深さ34.8cm、ピット20は径31×30cm、深さ44.1cm、ピット21は径57×57cm、深さ54.6cmを測る。ただしピット9・10・11は第49号住居跡に伴う可能性が配列状考えられることができる。周溝は全周しているようで、幅20~40cm、深さ20~30cmを測る。炉はおそらく第45'号住居跡に伴う石囲炉が存在し、これは北東部が壊されて石が抜けているが、表土が浅いため耕作途上で破壊されたものとする。掘り込みを含めた規模は、径98×78cm、深さ18cmを測る。埋甕は45住に伴うI-I'(第26図22)、45住に伴うH-H'(第26図1)が存在し、どちらも住居の南側に設置されている。また住居内において土坑が3基発見されている。第1号土坑は径1.1×1m、深さ0.38mを測り、層的に土坑の上に1層とした住居跡の貼床が施された後、再びこの貼床を掘り下げている様子がわかる。第2号土坑は径0.80×0.79m、深さ0.74mを測り、覆土中より該期の土器片と共に礫が多数混入していた。第3号土坑は調査区外に位置するため完掘できなかったが、径0.8×—m、深さ0.24mを測る。



- 45~48住
- 1- 黒茶褐色土 (炭化物・0.5~1cm大ロームブロックを若干含む、ややらかい)
 - 2- 淡暗茶褐色土 (1~3cm大ロームブロックを多量に含む、ややかたくしまっている)
 - 3- 茶黒褐色土 (1~3cm大ロームブロックを多量に含む、やややわらかい)
 - 4- 淡黒茶褐色土 (焼土・炭化物を若干、ローム粒子を微量含む、ややかたい)
 - 5- 暗黒茶褐色土 (焼土・炭化物をやや多く、ローム粒子を微量含む、やややわらかい)
 - 6- 明黒褐色土 (焼土・炭化物をやや多く、ローム粒子を微量含む、ややかたい)
 - 7- 淡暗黒茶褐色土 (焼土・炭化物をやや多く、ローム粒子をやや多く含む、かたくしまっている)
 - 8- 暗黄茶褐色土 (焼土・炭化物をやや多く、1~3cm大ロームブロックを若干含む、ややかたくしまっている)
 - 9- 明黒褐色土 (焼土・炭化物をやや多く、1~3cm大ロームブロックを若干含む、ややかたくしまっている)
 - 10- 暗黄茶褐色土 (焼土・炭化物を微量、1~3cm大ロームブロックを若干含む、ややかたくしまっている)
 - 11- 黒茶褐色土 (炭化物・ローム粒子を微量含む、ややかたい)
 - 12- 暗黒茶褐色土 (炭化物を多く含む、やややわらかい)
 - 13- 茶黒褐色土 (焼土・炭化物を若干、ローム粒子をやや多く含む、ややかたくしまっている)
 - 14- 暗黄茶褐色土 (焼土・炭化物を若干、ローム粒子をやや多く含む、ややかたくしまっている)
 - 15- 茶黒褐色土 (焼土・焼土塊・炭化物を多量、ローム粒子を若干含む、ややかたくしまっている)
 - 16- 明黒茶褐色土 (炭化物・ローム粒子を若干含む、ややかたい)
 - 17- 暗黄茶褐色土 (ローム粒子を若干含む、ややかたくしまっている)
 - 18- 明黄茶褐色土 (焼土・炭化物を微量、ローム粒子を若干含む、ややかたくしまっている)
 - 19- 黒茶褐色土 (とてもやわらかい)
 - 20- 茶黒褐色ロームブロック土 (ややかたくしまっている)
 - 21- 黒茶褐色ロームブロック土 (ややかたくしまっている)
 - 22- 淡茶黒褐色土 (焼土・炭化物を若干含む、ややかたくしまっている)
 - 23- 暗黄茶褐色土 (ローム粒子を多量に含む、ややかたくしまっている)
 - 24- 暗黄茶褐色ロームブロック土 (かたくしまっている)

第24図 第45~49号住居跡



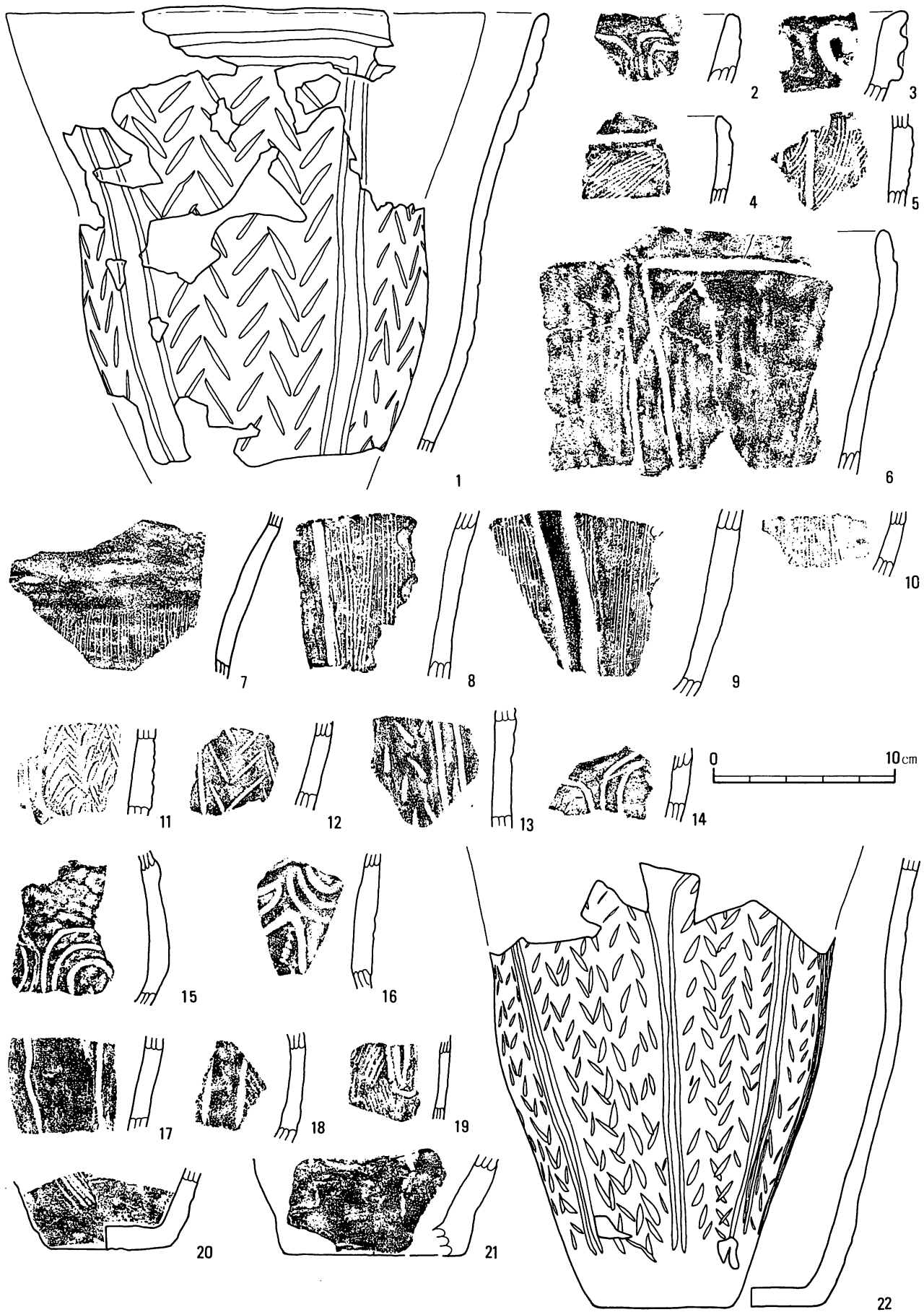
第1号土坑
 1-淡黄褐色ロームブロック土(ややかたくしまっている)
 2-茶黒褐色土(焼土・炭化物を多量に含む、ややかたくしまっている)
 3-淡黄茶褐色土(0.5m大ロームブロックを若干含む、ややかたくしまっている)
 4-黒茶褐色土(焼土・炭化物を若干含む、ややわらかい)
 5-茶褐色ロームブロック土(炭化物を若干含む、かたくしまっている)

第2号土坑
 1-黒茶褐色土(焼土・炭化物・0.5m大ロームブロックを若干含む、ややかたい)
 2-茶黒褐色土(焼土・炭化物・0.5m大ロームブロックを若干、ローム粒子を多量に含む、ややかたくしまっている)
 3-茶褐色土(ややかたい)

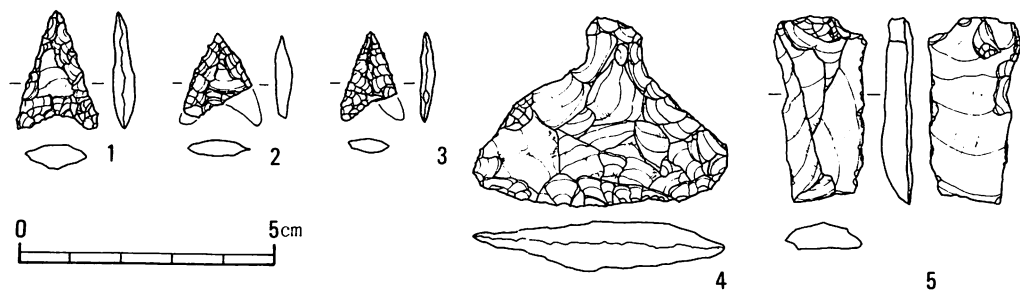
第3号土坑
 1-茶褐色土(ややかたい)
 2-茶褐色土(ロームブロックを若干含む、ややかたい)
 3-暗茶褐色土(ロームブロックを若干含む、ややかたい)
 4-暗褐色土(ややかたくしまっている)

埋蔵
 1-茶褐色土(ややわらかい)
 2-茶黒褐色ロームブロック土(ややかたくしまっている)

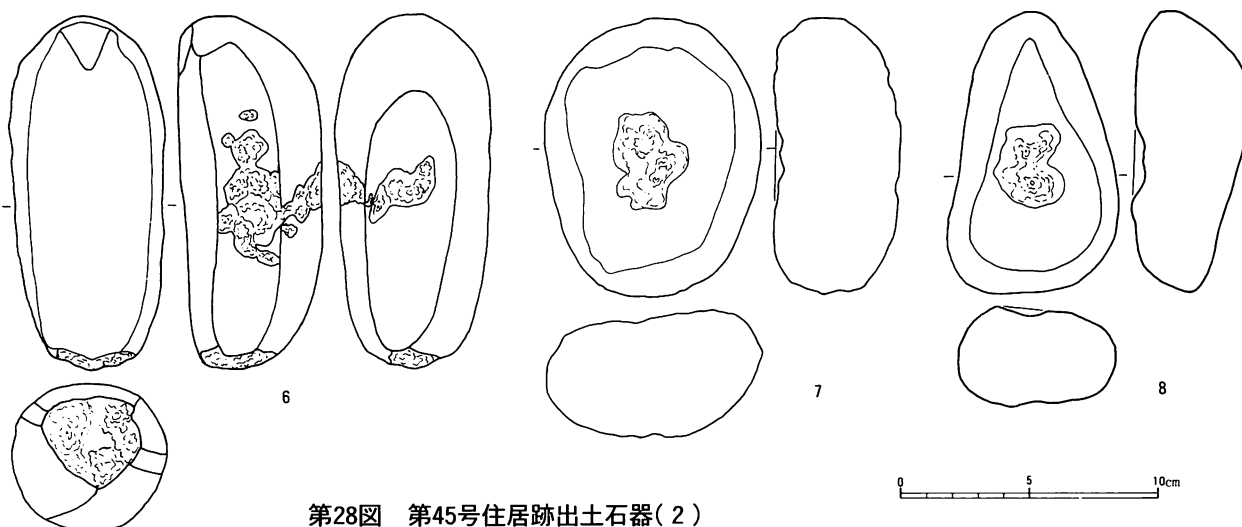
第25図 第45号住居跡



第26图 第45号住居跡出土土器



第27図 第45号住居跡出土石器(1)



第28図 第45号住居跡出土石器(2)

遺物 第26図が出土土器で、曾利V式に比定されるものが主体である。第26図1・22は埋甕で、1は残存する器高27cm、口径は推定で約30cmを測る。22は残存する器高24cmを測る。口縁部は平行沈線が横位に、胴部には縦位に垂下する。縦位の平行沈線文間には、所謂「ハの字」文が施されている。2・11~14も同類である。6・17は沈線の懸垂文のみ。4・5、7~10、18~20は懸垂文区画後に、櫛状施文具で綾杉状の地文を施す。8・9は懸垂文間に蛇行の沈線文を施す。15・16は円文か渦巻文ともとらえることができる沈線文様を施す。(野代)

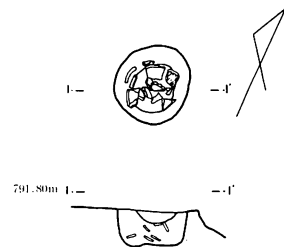
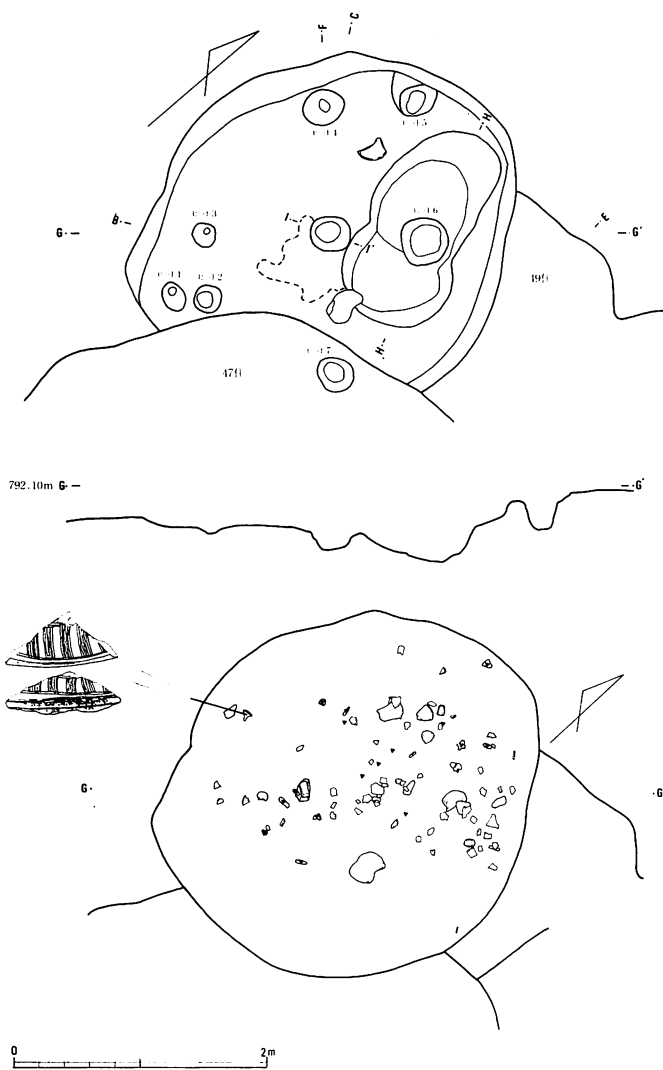
本跡から8点の石器が出土し、石鏃3点(37.5%)、石匙1点(12.5%)、凹石3点(37.5%)小剥離のある剥片1点(12.5%)の内訳である。

1~3は黒曜石製の石鏃であり、いずれも無茎凹基である。2・3は脚部を欠損している。4はチャート製の横型の石匙である。5は一側辺部に小剥離のある剥片で黒曜石製である。6~8は凹石である。6は棒状の礫の胴部中央に2つ凹みがあり、下端部に敲打痕が認められる。7は表裏両面に凹みが1つずつあり、8は表面に凹みが1つある。石材はいずれも安山岩である。(村松)

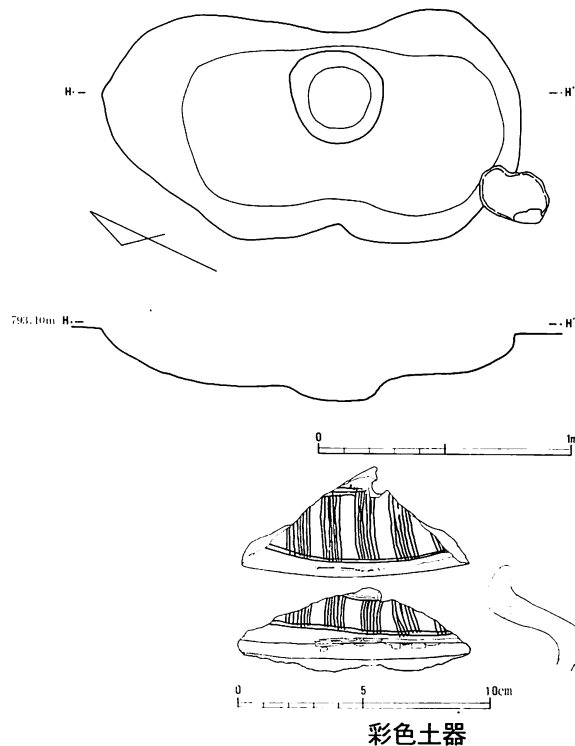
第46号住居跡(B-30、31グリッド)(第24・29~33・64図)

位置 調査区のほぼ中央に位置している。第47、49号住居跡を切って造っている。

形態・規模 不整がかった円形を呈しているが、全体的によく残っている。規模は径が3×2.7m、掘り込みは5~20cmを測る。支柱穴はピット2・4・5・6・7と考えられるが、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径22×15cm、深さ19.9cm、ピット2は径22×21cm、深さ19.9cm、ピット3は径21×18cm、深さ9.6cm、ピット4は径34×28cm、深さ26.8cm、ピット5は径33×28cm、深さ17.5cm、ピット6は径39×38cm、深さ26.9cm、ピット7は径30×25cm、深さ32.2cmを測る。炉はほぼ中央に地床炉が存在し、規模は28×26cmで、焼土が80×70cmの範囲にアメーバー状の広がりを持ち、掘り込みには土器がほぼ円形に混入していた。住居の東側に存在する土坑状のものは、時期的には伴出遺物からほぼ該期のものと考えられるが、土層の切り合い関係から住居の廃絶後に設けられた可能性が強い。入口については柱穴の間隔から東側部分に存在したのと考えられる。住居の時期は貉沢式期に位置付けられる。

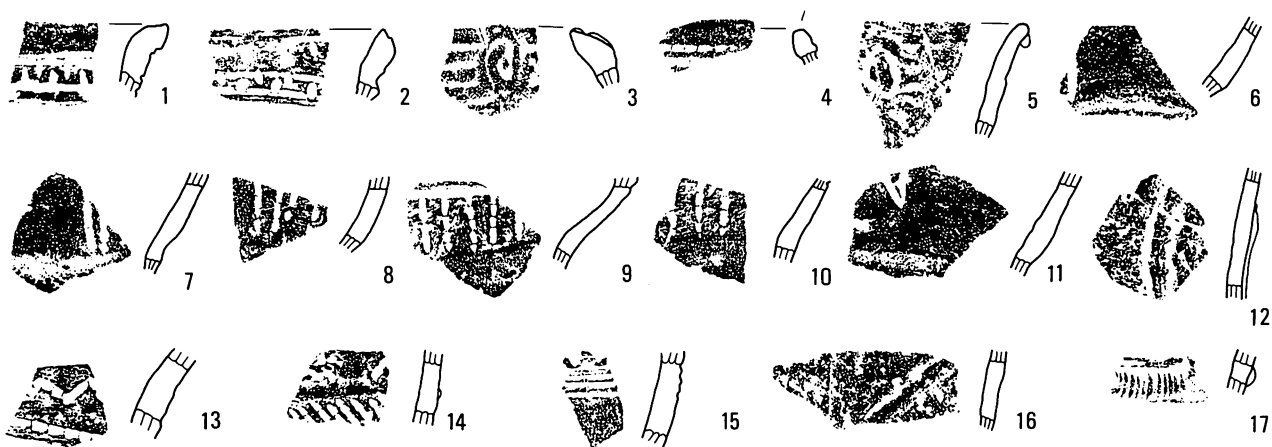


炉
 1-暗褐色土
 (焼土塊・炭化物を若干含む、ややかたく
 しまっている)
 2-暗褐色土
 (焼土を若干含む、かたくしまっている)

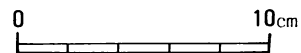


第29図 第46号住居跡

彩色土器

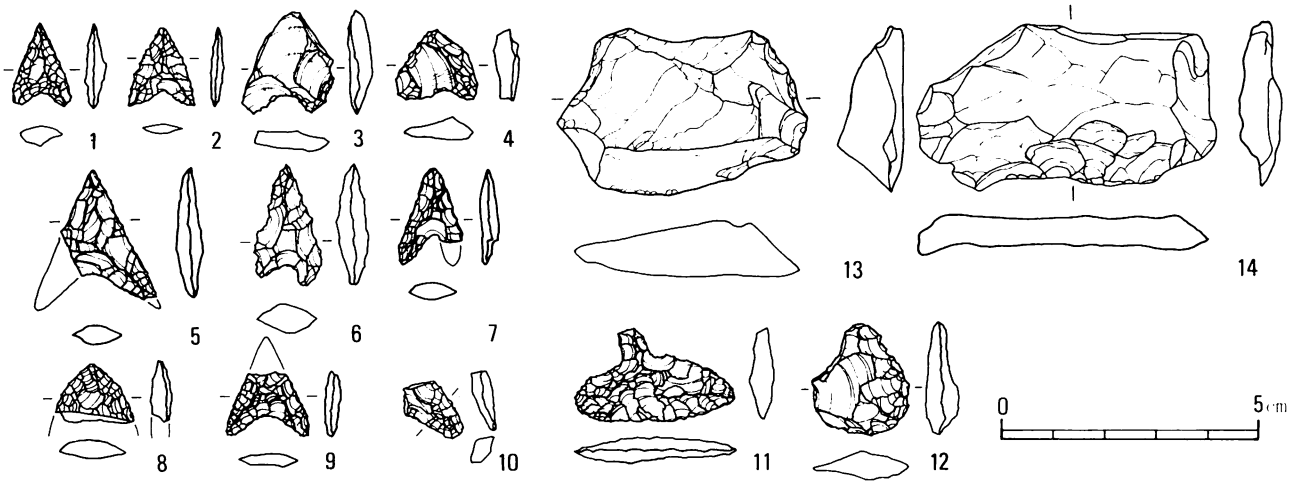


第30図 第46号住居跡出土土器

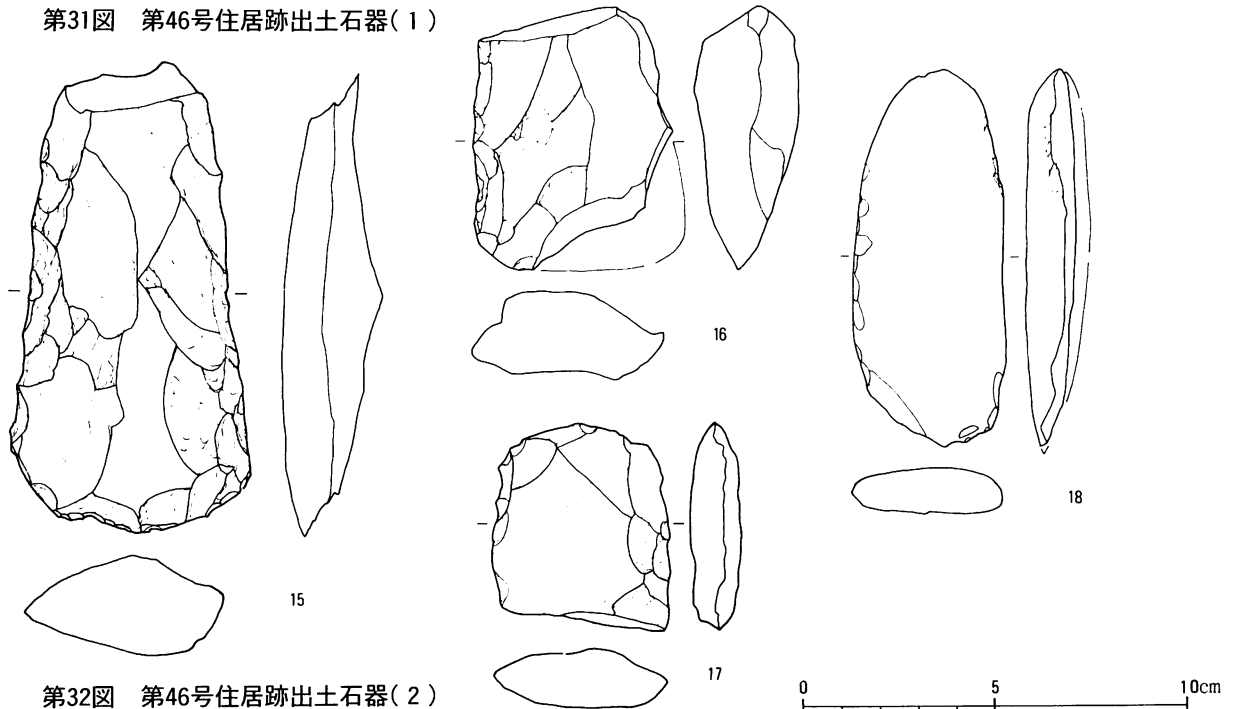


遺物 第30図が出土土器である。1・2口縁部で、平行沈線上に交互刺突文が、17は隆帯上に連続した爪形文を施している。これらのものは五領ヶ台II式に比定される。3～11、13・14は棒状工具の押し引きによる結節沈線文を施したもので、3～5は口縁部、6～11は口辺部、12～14は胴部である。15は胴上部で、平行沈線と交互刺突文が施される。12・16は胴部で、隆帯が巡らされている。これらのものは貉沢式に比定される。

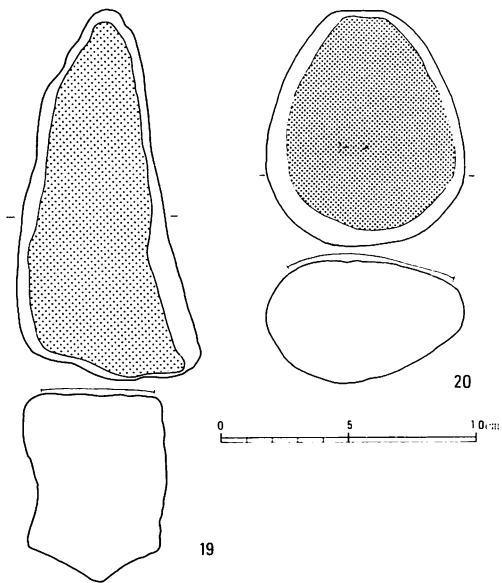
特筆すべきものに直接伴うものではないが、前期の彩色土器(第63図)が出土していることを表記しておく。
 (野代)



第31図 第46号住居跡出土石器(1)



第32図 第46号住居跡出土石器(2)



第33図 第46号住居跡出土石器(3)

出土した石器は20点であり、その内訳は石鏃10点(50%)、石匙1点(5%)、打製石斧3点(15%)、磨製石斧1点(5%)、磨石2点(10%)、二次加工のある剥片3点(15%)である。

1~10は石鏃である。基部の欠損している8以外は、基部形態は無茎凹基である。3は未製品であろう。石材は5がチャートで、それ以外は黒曜石である。11は黒曜石製の横型の石匙であり、12は黒曜石、13・14はチャートの二次加工のある剥片である。

15~17は打製石斧であり、いずれも短冊形をしている。15は基部の一部が、16は刃部の一部と基部が、17は刃部がそれぞれ欠損している。15は安山岩、16は凝灰岩、17はホルンフェルスである。18は頁岩製の磨製石斧で、刃部の一部と裏面が欠損している。19・20は表面に磨面をもつ磨石である。いずれも石材は安山岩である。

(村松)

第47号住居跡（B-30、31グリッド）（第24・34～41図）

位置 調査区の中央東寄りに位置している。

形態・規模 ほぼ円形を呈している。規模は径が4.3×4.1mを測る。掘り込みは30～40cm認められ、かなりしっかりした造りとなっている。周溝は南東壁から北壁にかけて存在し、掘り込みは10cmと浅い。支柱穴はピット1・2・3・7・11・14・19・20・21・24・26・27・30・31・35と考えられる。各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径25×15cm、深さ35.5cm、ピット2は径27×25cm、深さ52.3cm、ピット3は径31×27cm、深さ33.7cm、ピット4は径30×25cm、深さ13.9cm、ピット5は径32×31cm、深さ10.3cm、ピット6は径38×32cm、深さ36.4cm、ピット7は径55×42cm、深さ43cm、ピット8は径48×28cm、深さ13cm、ピット9は径20×17cm、深さ19.4cm、ピット10は径23×18cm、深さ5cm、ピット11は径30×22cm、深さ30.2cm、ピット12はみち36×22cm、深さ17.8cm、ピット13は径37×37cm、深さ19cm、ピット14は径95×47cm、深さ44.5cm、ピット15は径13×12cm、深さ9.2cm、ピット16は径20×20cm、深さ18.4cm、ピット17は径27×23cm、深さ12.9cm、ピット18は径20×18cm、深さ8.5cm、ピット19は径36×33cm、深さ35.5cm、ピット20は径35×27cm、深さ24.5cm、ピット21は径42×30cm、深さ27.5cm、ピット22は径28×25cm、深さ17.8cm、ピット23は径34×27cm、深さ11cm、ピット24は径26×20cm、深さ31.1cm、ピット25は径31×19cm、深さ18.7cm、ピット26は径20×14cm、深さ23.1cm、ピット27は径28×26cm、深さ25.6cm、ピット28は径20×18cm、深さ5.9cm、ピット29は径32×23cm、深さ18.8cm、ピット30は径30×25cm、深さ26.1cm、ピット31は径28×18cm、深さ28cm、ピット32は径17×14cm、深さ12.6cm、ピット33は径40×34cm、深さ12.3cm、ピット34は径20×16cm、深さ10.6cm、ピット35は径24×15cm、深さ33.5cmを測る。ただしピット15・19などは第49号住居跡に伴う可能性が配列状考えることができる。炉は地床炉で、50×43cmのピットを伴い、この西側に焼土80×55cmの範囲で広がっている。遺物は破片類が主体で、ほとんど器形が復元できるものはなかった。

遺物 第35～38図が出土土器である。第35図に示したものは浮線文系土器群で、全て深鉢形土器である。1～9は口縁・口辺部、10～38は胴部、39は底部の破片である。これらは地に縄文を施し、その上に平行浮線文を施文する。この浮線上には、刺突文や矢羽状の刻みを持つものと、無文のものが存在する。

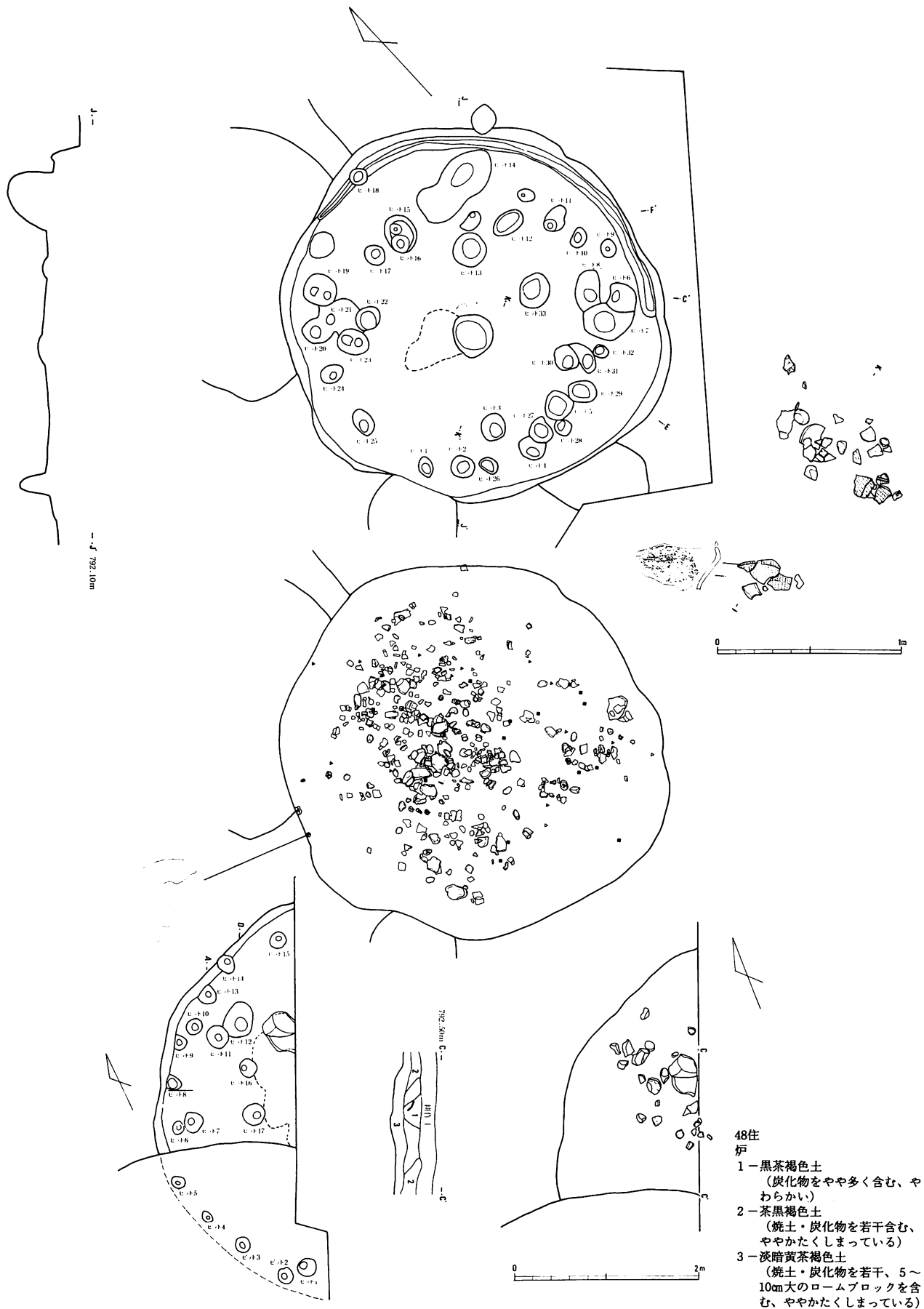
第36図に示したものは沈線文系土器群で、全て深鉢形土器である。40～53は口縁・口辺部、55～85は胴部、67は底部の破片である。これらの地は縄文ないし無文で、その上に半截竹管で平行沈線文を施す。40は口唇部に耳状突起を持つ。54は三角や渦巻で平行沈線で表現し、この中を連続した爪形文を施す。

第37・38図に示したものが縄文のみの土器群で、88～100・116は口縁部、101～115、117は胴部破片である。118～121は無文、122は胴部は無文であるが、口縁部には刺突文が施され、これを沈線で区画する。第38図123～134は、有孔浅鉢形土器を一括した。123～128、130、131～134は無文で器面がよく磨かれているが、彩色を施したと考えられる痕跡は認められなかった。129は浮線文、132は竹管文と爪形文が施され、器面に僅かな赤彩の痕跡を示す。第36図86は口縁部で、棒状工具による刺突文が、また口唇部には斜行の刻みを持つ。85は胴部で、縄文地に連続爪形文を施す。

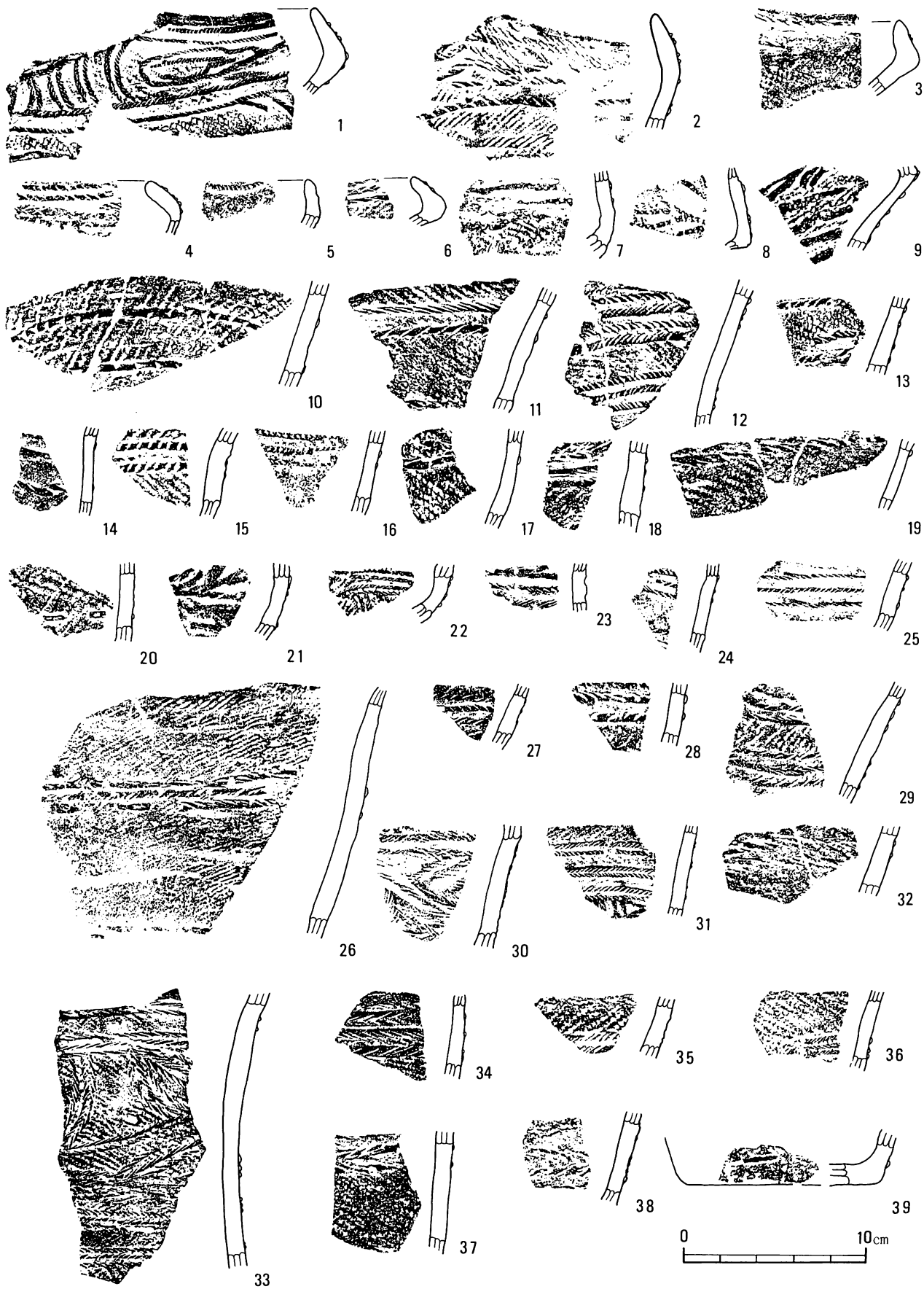
（野代）

本跡から出土した石器は47点と、他の住居跡と比べて非常に多数出土している。その内訳は石鏃7点（14.9%）、石匙4点（8.5%）、スクレイパー1点（2.1%）、石錐2点（4.3%）、磨石2点（4.3%）、凹石5点（10.6%）、二次加工のある剥片15点（31.9%）、小剥離のある剥片11点（23.4%）である。その他、玦状耳飾が1点、剥片2点が出土している。この内24点を図示した。

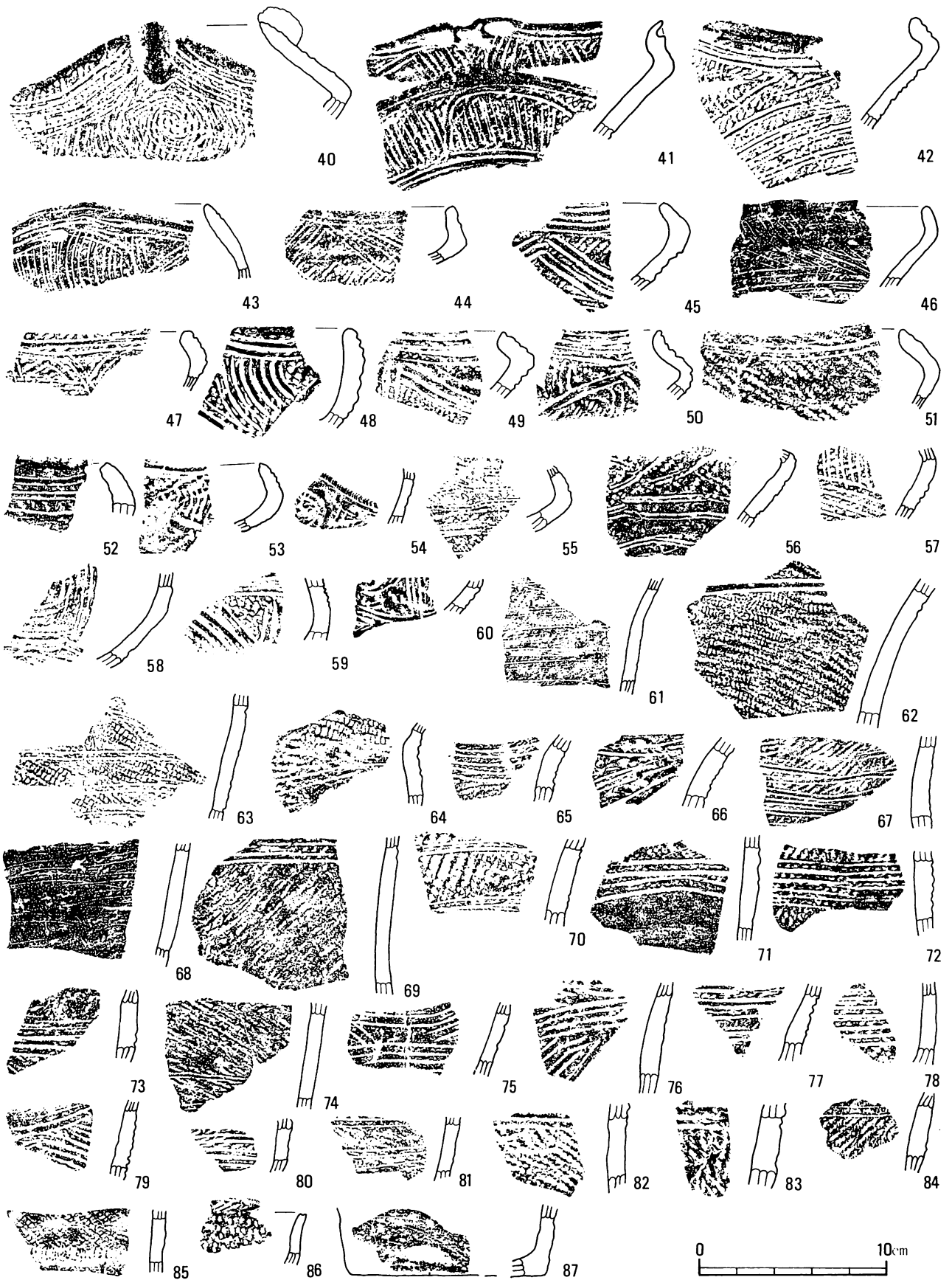
1～7は石鏃である。1～6は無茎凹基で、7は基部が欠損しており基部形態は不明である。石材は3がチャートで、それ以外は黒曜石である。8は凝灰岩製、9は黒曜石製の石錐である。10～12・15は石匙である。10・12はチャート製の横型、11は凝灰岩製の縦型、15は頁岩製の縦型である。13は一部欠損しており全体の形態は不明であるが、一側辺部を刃部としたスクレイパーであろう。石材は頁岩である。14はチャートの二次加工のある剥片である。一側辺部が刃部の様に調整されているので、スクレイパーであるかもしれない。16は蛇紋岩製の玦状耳飾である。不整形な円形をしており、約1/3が欠損している。



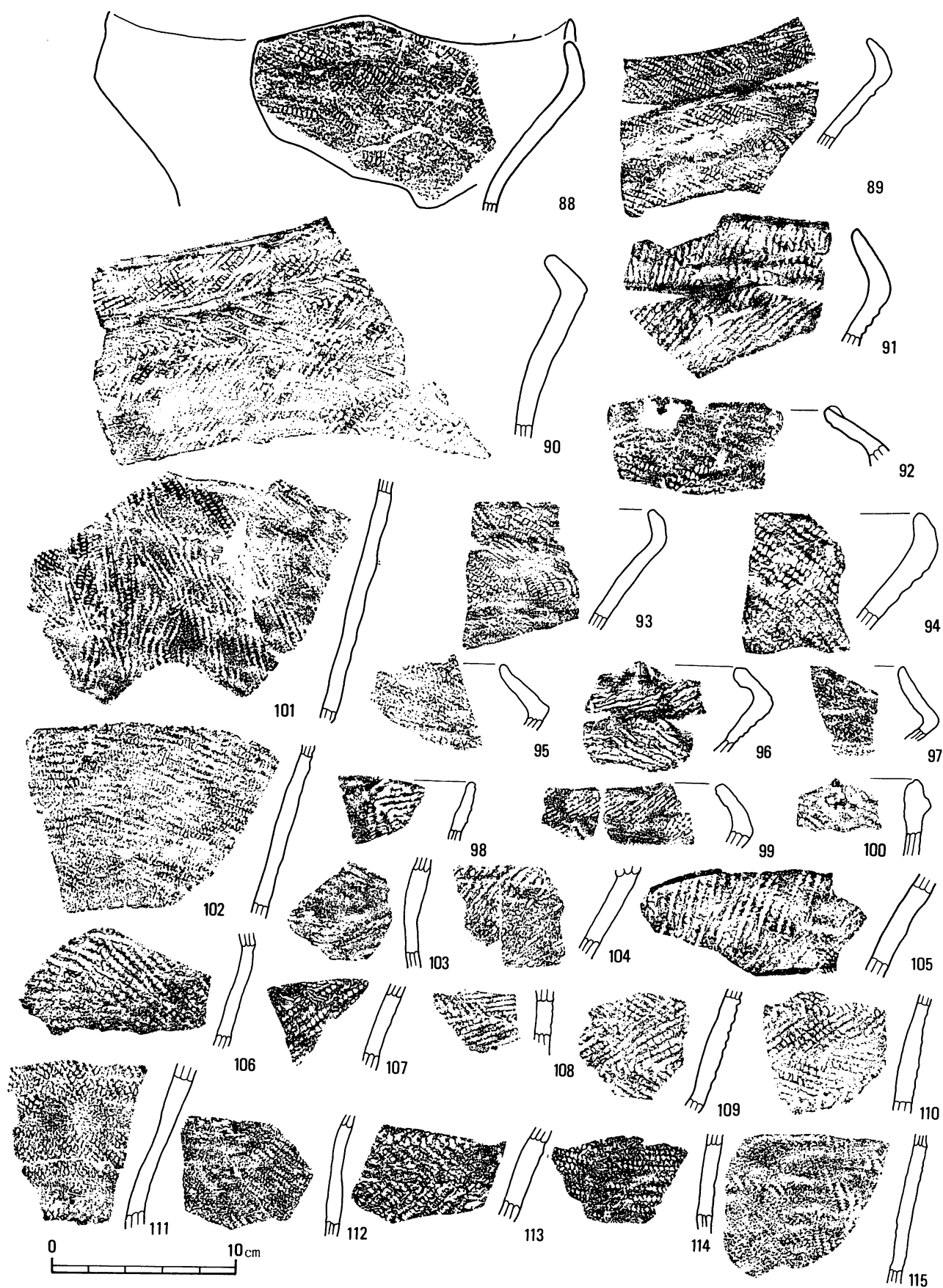
第34図 第47・48号住居跡



第35图 第47号住居跡出土土器(1)



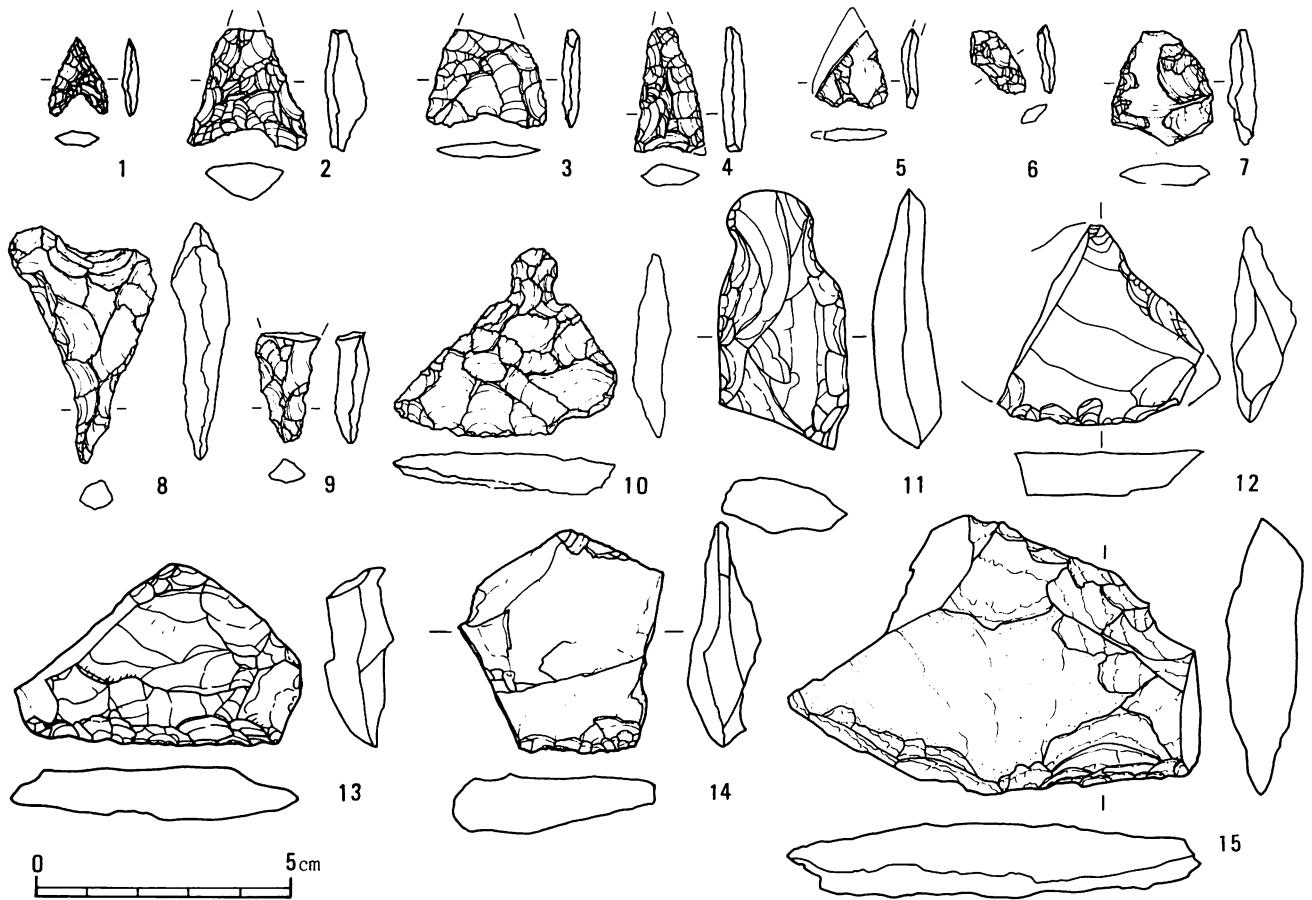
第36图 第47号住居跡出土土器(2)



第37图 第47号住居跡出土土器(3)



第38图 第47号住居跡出土土器(4)



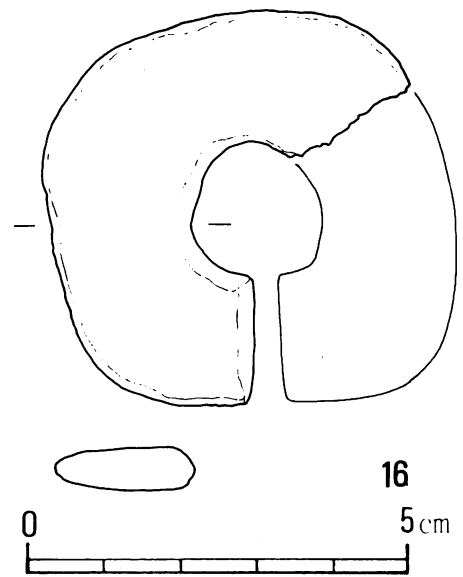
第39図 第47号住居跡出土石器

17は二次加工のある剥片で、石材は頁岩である。18・19は磨石である。18は剥片であり、19は磨面が表裏にあり、表面に敲打痕が認められる。20～24は凹石である。20～22・24は表裏両面に凹みを持ち、23は表面のみ凹みをもつ。23・24は半分欠損している。石材は22が玄武岩で、それ以外は安山岩である。(村松)

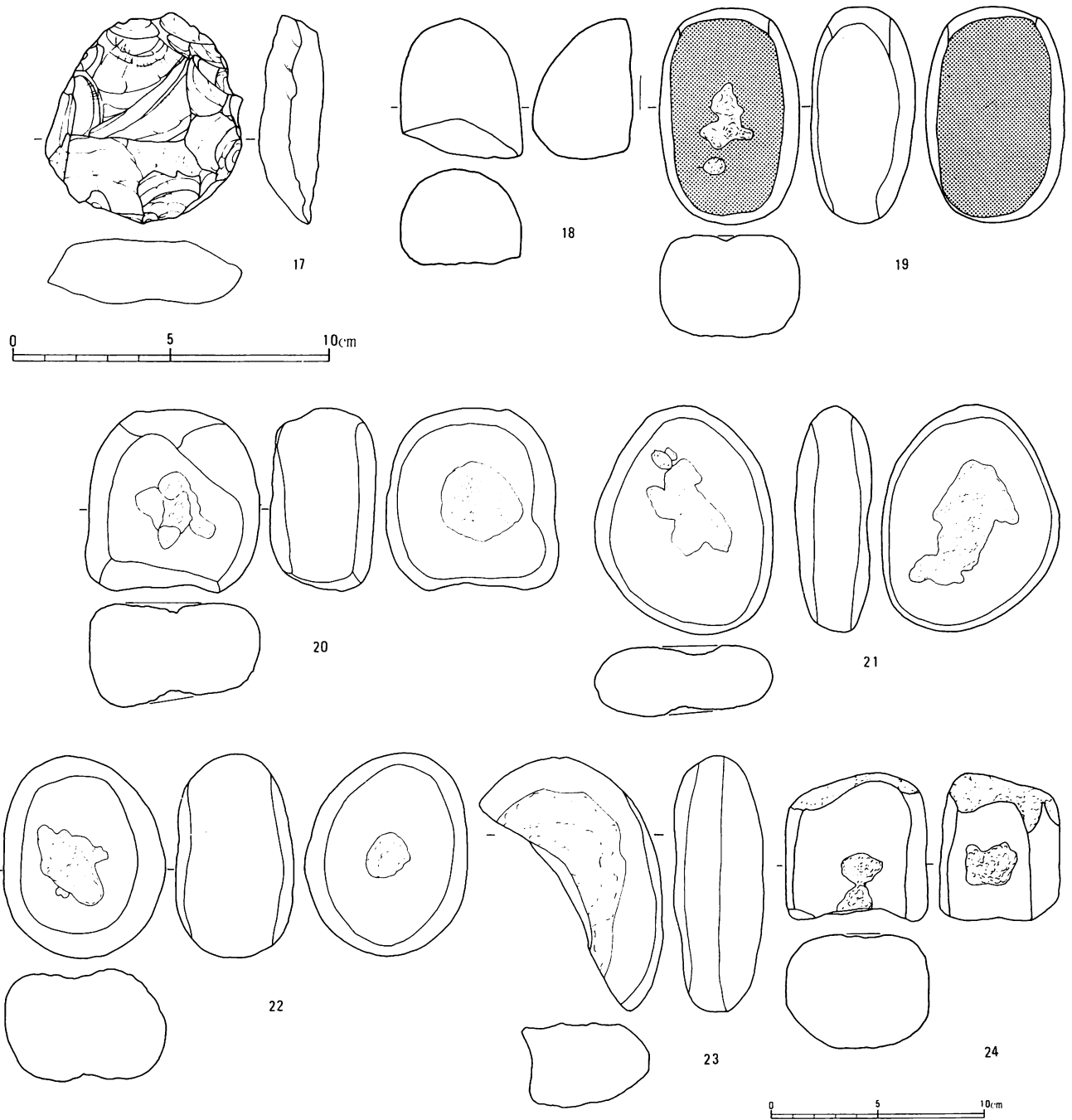
第48号住居跡 (A-29グリッド) (第24・42～43図)

位置 調査区北東部に位置し、西側を第45号住居跡に切られている。
 形態・規模 住居跡のほとんどの部分が調査区外に当たる為、正確な形態・規模は不明である。遺構確認面から床面までの深さは、西壁9cm、北壁12cmである。床面は軟弱である。周溝は認められない。ピット1～6、8～10、13～15が壁に沿って巡る。ピット1は径20×20cm、深さ19cm、ピット2は径18×15cm、深さ21cm、ピット3は径17×15cm、深さ14cm、ピット4は径14×9cm、深さ29cm、ピット5は径15×13cm、深さ14cm、ピット6は径14×12cm、深さ13cm、ピット8は径16×15cm、深さ7cm、ピット9は径15×13cm、深さ10cm、ピット10は径18×16cm、深さ10cm、ピット13は径18×18cm、深さ15cm、ピット14は径20×16cm、深さ10cm、ピット15は径18×16cm、深さ16cmを測る。住居跡の時期は神之木式期に属するものと考えられる。

遺物 1～11は諸磯b式に比定される。1は口唇部に棒状工具による刻みを有し、口縁直下に数条の沈線が施される。2は口縁部に棒状工具による刻みが施された隆帯が貼り付けられる。隆帯下の浮線文には矢羽根状の刻み



第40図 第47号住居跡出土石製品



第41図 第47号住居跡出土石器

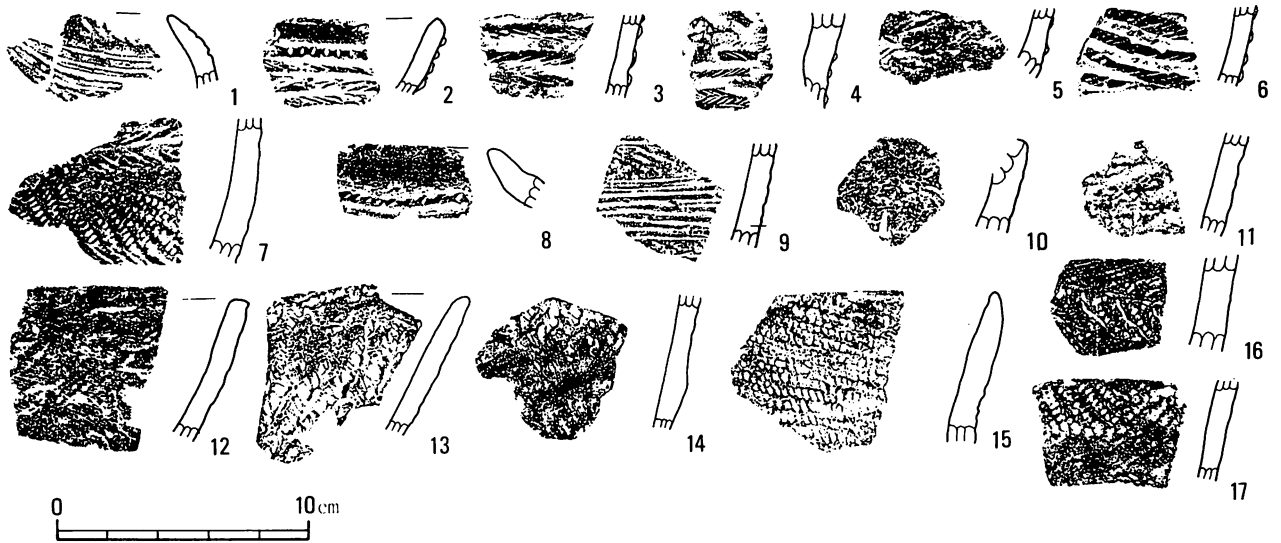
が施される。3・4・6は矢羽根状の刻みを有する浮線文が施される。7は縄文を地文とし、一部矢羽根状の文様で構成される。8は有孔土器である。浮線文に棒状工具による刻みが施され、直下に貫通孔が開けられる。内面は荒い横ナデ。9は縄文を地文とし、平行沈線文が数条巡る。12~17は胎土に繊維を含むもので、前期前半の神之木式に位置付けられるものであろう。(白川)

本跡からは磨石2点が出土している。

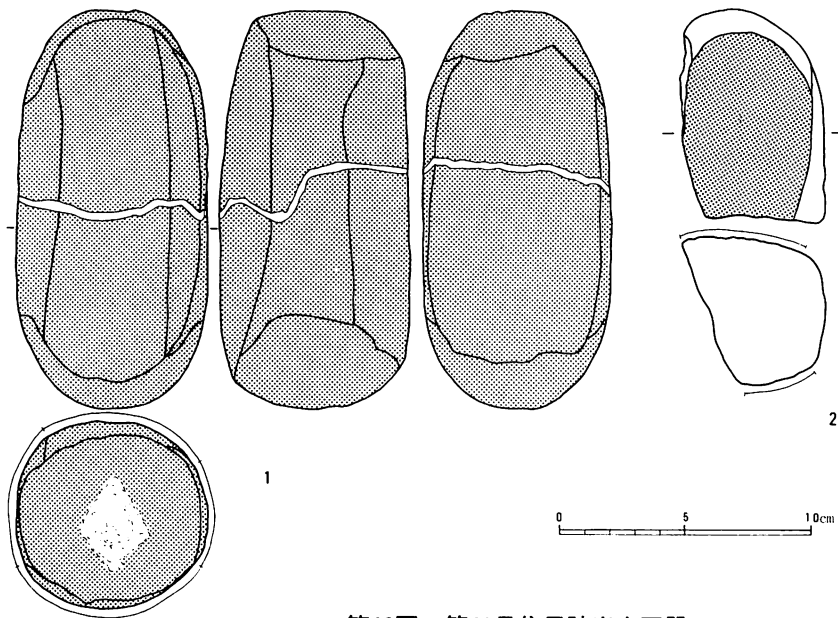
1は棒状の礫の磨石で全面に磨面をもつ。上下両端に敲打痕が認められる。胴部中央で半分に割れており、接合している。2は表裏両面に磨面をもつ磨石で、一部欠損している。石材はいずれも安山岩である。(村松)

第49号住居跡 (B-30グリッド) (第24図)

位置 調査区のほぼ中央に位置している。第45、46、47号住居跡と切り合っている。



第42図 第48号住居跡出土土器



第43図 第48号住居跡出土石器

形態・規模 不整がかった円形を呈していると考えられるが、ほとんど周辺の遺構に切られており、北側の僅かな部分を残すのみである。規模は径が3.8m程度、落ち込み5cmを測る。支柱穴は不明であるが、各ピットの規模は以下のとおりである。ピット1は径 \times 23cm、深さ22.9cm、ピット2は径30 \times 23cm、深さ28cm、ピット3は径31 \times 26cm、深さ23.5cmを測るが、この他にも45住のピット9～11および47住のピット11、19については本住居跡に伴うものと考えられる。また、住居跡の北側に3基のピットが存在するが、本遺構との関連性は不明である。ピットの規模は、ピット4は径24 \times 20cm、深さ28.9cm、ピット5は径27 \times 20cm、深さ19cm、ピット6は径24 \times 20cm、深さ13.9cmを測る。本住居跡に付随するピット以外の施設については、破壊され不明である。時期は形態から、前期後半諸磯b式期と考えられる。

遺物 伴出すると考えられる遺物は、確認できなかったため図示しなかった。

(野代)

表1 住居跡出土石器観察表

※()は現存値

図番号	出土位置	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	形態	備考
第7図1	41住	石 鏃	1.70	1.26	0.34	0.4	黒曜石	無茎凹基	
" 2	"	"	(1.62)	(1.60)	0.32	(0.6)	"	"	先端・両側欠損
" 3	"	二次加工の剥片	1.94	0.81	0.37	0.5	"		
" 4	"	石 匙	(3.56)	(2.25)	0.41	(2.9)	"	横 型	刃部・つまみ部欠損
" 5	"	スクレイパー	3.51	4.16	0.90	10.8	チャート		
第8図6	"	打製石斧	13.90	5.69	2.09	181.3	ホルソフェルス	短冊形	
" 7	"	"	10.21	4.94	1.99	103.8	"	撥形	
" 8	"	"	(7.06)	(4.89)	(1.83)	(76.0)	"	短冊形	刃部欠損
" 9	"	"	(7.32)	(3.69)	(1.43)	(39.8)	"	"	"
" 10	"	石 皿	(14.07)	(6.87)	(9.84)	(1241.1)	安山岩		破片
" 11	"	"	(17.27)	(11.97)	(2.53)	(663.6)	"		
" 12	"	磨石	(7.72)	(10.49)	(7.08)	(885.6)	"		磨面4 凹み1
" 13	"	凹石	8.07	8.23	4.74	308.6	"		表1 裏1
第11図1	42住	石 鏃	1.82	1.40	0.20	0.4	黒曜石	無茎凹基	
" 2	"	"	1.90	1.59	0.29	0.6	"	"	
" 3	"	"	2.02	1.43	0.31	0.6	"	"	
" 4	"	"	(2.32)	(2.03)	(0.40)	(1.4)	"	"	片脚欠損
" 5	"	"	1.74	(0.90)	(0.41)	(0.5)	"	無茎平基	半分欠損
" 6	"	"	(1.33)	1.83	0.31	(0.4)	"	無茎凹基	先端部欠損
" 7	"	石 匙	(2.04)	(2.83)	0.50	(2.0)	"	横 型	刃部・つまみ部欠損
" 8	"	二次加工の剥片	3.16	2.82	1.53	12.7	"		
" 9	"	スクレイパー	5.25	8.45	1.03	47.6	チャート		
第12図10	"	打製石斧	(6.52)	(5.03)	(1.79)	(74.3)	頁岩	短冊形	基部欠損
" 11	"	二次加工の剥片	6.40	5.97	2.43	93.6	砂岩		
第13図12	"	凹石	(11.75)	(8.41)	(5.78)	(627.5)	安山岩		一部欠損 凹み3
" 13	"	"	(10.27)	(7.92)	(2.58)	(254.6)	"		凹み3
" 14	"	"	(5.80)	(6.88)	(4.43)	(241.5)	"		半分欠損凹表2裏3
" 15	"	"	(10.22)	(5.78)	(4.69)	(351.6)	"		一部欠損 凹み3
" 16	"	石 皿	46.80	53.50	11.90	9500.0	"		
第16図1	43住	石 鏃	2.12	2.26	0.42	1.0	黒曜石	無茎凹基	
" 2	"	石 匙	2.23	1.96	0.55	1.4	"	横 型	小型
" 3	"	小剥離の剥片	1.50	4.57	0.29	3.2	"		横長剥片
" 4	"	"	2.76	4.06	1.44	17.3	"		
" 5	"	横 刃	4.61	8.01	1.17	43.3	頁岩		
第17図6	"	礫器	8.64	6.95	4.10	233.3	ホルソフェルス		
" 7	"	磨石	9.71	7.45	4.37	416.8	安山岩		磨面1 敲痕あり
" 8	"	磨石	15.50	7.89	5.66	1092.7	安山岩		磨面3
" 9	"	敲石	14.70	6.65	6.47	901.6	花崗岩		磨面・側面に敲打痕

図番号	出土位置	器 種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石 材	形 態	備 考
第17図10	43住	磨 石	5.67	5.21	4.16	137.4	安山岩		磨面2
第22図1	44住	石 鏃	2.08	1.39	0.32	0.5	黒曜石	無茎凹基	
" 2	"	"	2.03	1.20	0.41	0.8	"	無茎平基	
" 3	"	"	2.21	1.46	0.32	0.8	"	無茎凹基	
" 4	"	"	2.25	1.76	0.71	2.2	"	"	
" 5	"	"	1.77	1.42	0.35	0.7	"	"	
" 6	"	"	(1.21)	(1.02)	0.30	(0.3)	"	—	先端部破片
" 7	"	"	(1.71)	(1.32)	0.31	(0.5)	"	"	先端部・脚部欠損
" 8	"	"	(1.65)	(1.35)	(0.24)	(0.4)	"	—	先端部破片
" 9	"	"	(1.79)	(1.76)	(0.31)	(1.0)	"	"	先端部・脚部欠損
" 10	"	"	(1.92)	(1.43)	(0.48)	(1.3)	"	"	"
" 11	"	"	(2.53)	(1.18)	(0.69)	(1.6)	"	"	片脚破片
" 12	"	石 錐	(3.18)	1.66	0.57	(2.5)	チャート		先端欠損
" 13	"	"	(3.52)	3.28	0.72	(5.6)	"		"
" 14	"	"	(2.21)	1.93	0.43	(1.8)	"		"
" 15	"	石 匙	5.79	3.43	0.69	6.5	頁岩	斜 型	
" 16	"	石 核	4.12	3.94	2.32	45.0	チャート		
" 17	"	二次加工の剥片	4.72	3.57	1.31	23.9	"		
" 18	"	"	3.20	1.99	0.87	3.9	黒曜石		
" 19	"	"	2.07	1.23	0.56	1.4	"		
" 20	"	"	1.88	0.91	0.43	0.6	"		
" 21	"	"	2.79	1.81	0.46	2.5	"		
第23図22	"	打製石斧	(9.20)	(4.84)	(2.18)	(116.9)	頁岩	短冊形	刃部欠損
" 23	"	"	(9.26)	(5.12)	(2.01)	(103.2)	砂岩	"	"
" 24	"	横 刃	(8.82)	(5.40)	(2.31)	(118.8)	頁岩		一部欠損
" 25	"	磨製石斧	(8.16)	(3.35)	(0.97)	(35.9)	"		胴部破片
" 26	"	"	(15.79)	(4.74)	(3.50)	(356.3)	流紋岩	乳棒状	刃部欠損
" 27	"	二次加工の剥片	5.10	6.47	10.48	59.7	チャート		
第27図1	45住	石 鏃	2.29	1.56	0.40	0.9	黒曜石	無茎凹基	
" 2	"	"	(1.59)	(1.27)	0.30	(0.4)	"	"	両脚一部欠損
" 3	"	"	(1.67)	(1.09)	0.23	(0.3)	"	"	片脚欠損
" 4	"	石 匙	3.71	5.00	0.82	11.8	チャート	横 型	
" 5	"	小剥離の剥片	3.59	1.71	0.50	3.4	黒曜石		
第28図6	45住	凹 石	(13.69)	6.12	5.90	(706.9)	安山岩		凹み2 下端部敲打痕
" 7	"	"	(10.61)	8.63	5.07	(561.3)	"		凹み表1裏1
" 8	"	"	10.94	6.86	4.62	342.0	"		凹み表1
第31図1	46住	石 鏃	1.58	1.14	0.37	0.4	黒曜石	無茎凹基	
" 2	"	"	1.52	1.31	0.21	0.3	"	"	
" 3	"	"	1.96	1.73	0.37	1.1	"	"	未製品
" 4	"	"	1.34	1.60	0.42	0.7	"	"	
" 5	"	"	(2.50)	(1.85)	0.49	(1.3)	チャート	"	片脚欠損

図番号	出土位置	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	形態	備考
第31図6	46住	石 鎌	2.33	1.31	0.51	1.0	黒曜石	無茎凹基	
〃 7	〃	〃	(1.82)	(1.21)	0.32	(0.4)	〃	〃	片脚欠損
〃 8	〃	〃	(1.13)	(1.51)	(0.34)	(0.5)	〃	—	先端部破片
〃 9	〃	〃	(1.23)	1.62	0.24	(0.4)	〃	無茎凹基	先端部欠損
〃 10	〃	〃	(1.15)	(1.06)	(0.33)	(0.3)	〃	〃	片脚破片
〃 11	〃	石 匙	1.82	3.13	0.43	1.8	〃	横 型	
〃 12	〃	二次加工の剥片	1.82	2.15	0.57	1.7	〃		
〃 13	〃	〃	3.17	4.88	1.30	21.2	チャート		
〃 14	〃	〃	3.09	5.88	0.82	18.1	〃		
第32図15	〃	打製石斧	(12.13)	6.30	2.65	(189.3)	安山岩	短冊形	基部欠損
〃 16	〃	〃	(6.82)	(5.30)	2.82	(105.6)	凝灰岩	〃	刃部・基部欠損
〃 17	〃	〃	(5.32)	(4.71)	(1.49)	(53.4)	ホルソフェルス	〃	刃部欠損
〃 18	〃	磨製石斧	(9.79)	(4.10)	(1.21)	(83.7)	頁岩		刃部・側縁部欠損
第33図19	〃	磨石	(14.62)	(6.83)	(7.60)	(1063.3)	安山岩		磨面1
〃 20	〃	〃	9.01	7.75	4.85	415.2	〃		〃
第39図1	47住	石 鎌	1.48	1.11	0.23	0.3	黒曜石	無茎凹基	
〃 2	〃	〃	(2.29)	2.29	0.70	(2.7)	〃	〃	先端部欠損
〃 3	〃	〃	(1.88)	2.32	0.32	(1.4)	チャート	〃	〃
〃 4	〃	〃	(2.42)	(1.40)	0.43	(1.2)	黒曜石	〃	先端部・脚部欠損
〃 5	〃	〃	(1.51)	(1.32)	(0.25)	(0.4)	〃	〃	先端部欠損
〃 6	〃	〃	(1.25)	(0.93)	(0.27)	(0.2)	〃	〃	脚部破片
〃 7	〃	〃	(2.21)	(1.97)	0.46	(1.8)	〃	—	先端部・基部欠損
〃 8	〃	石 錐	4.31	2.97	1.05	9.2	凝灰岩		
〃 9	〃	〃	(2.18)	(1.27)	(0.60)	(1.2)	黒曜石		つまみ部欠損
〃 10	〃	石 匙	3.60	4.41	0.65	7.5	チャート	横 型	
〃 11	〃	〃	(5.13)	(2.58)	(1.13)	(16.2)	凝灰岩	縦 型	刃部欠損
〃 12	〃	〃	(3.80)	(4.02)	(1.17)	(13.4)	チャート	横 型	刃部破片
〃 13	〃	スクレイパー	(3.55)	(5.65)	(1.87)	(23.0)	頁岩		
〃 14	〃	二次加工の剥片	4.38	3.97	1.21	19.6	チャート		
〃 15	〃	石 匙	(5.33)	(8.05)	(1.44)	(60.0)	頁岩	縦 型	つまみ部・刃部欠損
第40図16	〃	塊状耳飾	(5.11)	(5.13)	(0.54)	(16.4)	蛇紋岩		1/3欠損
第41図17	〃	二次加工の剥片	6.67	6.18	1.99	98.5	頁岩		
〃 18	〃	磨石	(6.86)	(5.83)	(4.71)	(218.4)	安山岩		破片
〃 19	〃	〃	10.21	6.59	4.76	481.0	〃		磨面2 敲打痕あり
〃 20	〃	凹石	8.36	7.93	4.93	482.4	〃		凹み表1裏1
〃 21	〃	〃	10.51	8.14	3.50	386.2	〃		〃
〃 22	〃	〃	9.49	7.66	5.35	477.7	玄武岩		〃
〃 23	〃	〃	(12.23)	(8.61)	(4.20)	(302.8)	安山岩		半分欠損 凹み表1
〃 24	〃	〃	(7.11)	(6.79)	(5.57)	(420.2)	〃		半欠 凹み表1裏1
第43図1	48住	磨石	15.72	7.30	7.35	1211.9	〃		全面磨り 両端敲打痕
〃 2	〃	〃	(8.22)	(5.59)	(6.06)	(350.3)	〃		磨面2

第2節 土坑

土坑は合計で58基確認され、時期的なバラつきはあるものの調査区全域に分布している。時代的にはすべて縄文時代に属するものと考えられ、各時期ごとに住居跡の周辺に集中する傾向がある。時期的な遺構数の推移は前期18基、中期39基、後期1基という具合になり、これらのものは前期の諸磯b式期、中期では五領ヶ台式期・猪沢式期・藤内式期・曾利Ⅰ～Ⅴ式期、後期では称名寺式期に属することが判っている。

土器（第47～52図）

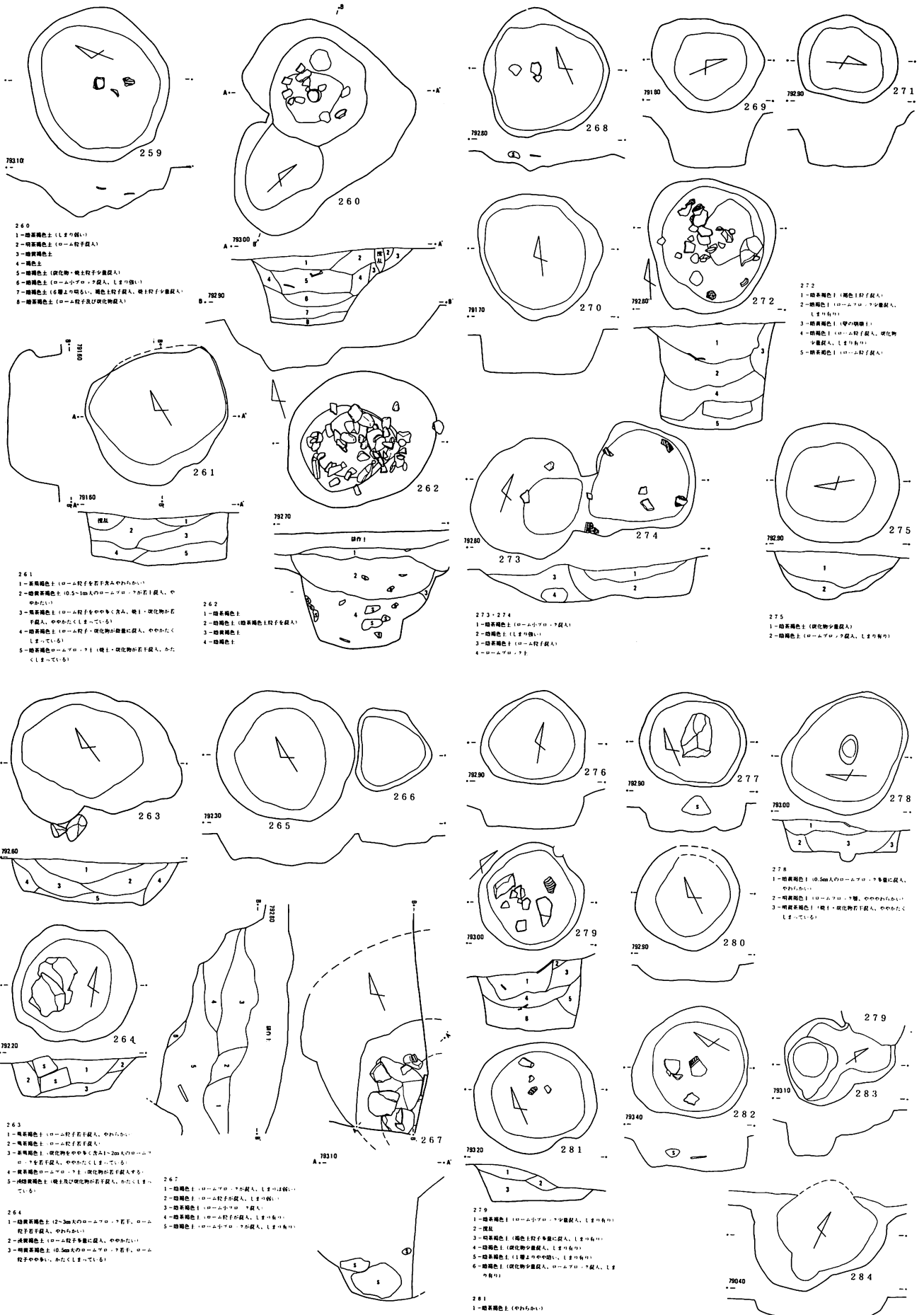
本遺跡の土坑から出土した土器は、以下のとおりである。

1～3は諸磯b式期で、第230号土坑出土遺物である。縄文を地文として、平行沈線文が施文されるものである。4は諸磯b式期、5は五領ヶ台式期に属するもので、第231号土坑出土のものである。5は口縁部の破片である。口唇部直下には、横位に平行沈線文が引かれ、以下胴部に向かって縦位に平行沈線文が施される。施文順位は、縦位のあとに横位に沈線文が引かれる。6・7は五領ヶ台式期に属するもので、第233号土坑出土のものである。6は5と同様な施文手法で、口縁部は波状を呈する。8～15は曾利Ⅲ式期に属するもので、第237号土坑出土のものである。9は渦巻文、10は平行沈線文、13は綾杉状文がそれぞれ施される。14・15は地文を縄文とするものである。16～24は第238号土坑出土遺物で、諸磯b式・五領ヶ台式・井戸尻式・曾利式期の土器片が混在している。25は第239号土坑出土で、縄文を地文とするものであり、中期の所産と思われる。26は五領ヶ台式期～猪沢式期に属するものと思われ、第248号土坑出土遺物で浅鉢である。口唇部には、連続する角押文で文様が構成され、「コ」の字状に区画帯が施され、第44号住居の54の施文手法に類似するものである。27～35は第251号土坑出土遺物で、曾利式期の破片が比較的多く出土し、粘土紐の貼り付け、平行沈線文、列点文等が認められる。これらのものは曾利Ⅱ式期と考えられる。36～41は第252号土坑出土遺物で、諸磯b・猪沢・曾利式期が出土する。41は曾利Ⅲ式期に属するもので、横位に浅い平行沈線文が施文されたのち、縦位に巾の広い平行沈線文と蛇行沈線文が施される。42、43は第253号土坑出土で、曾利Ⅳ式期に属する。43は、「コ」の字状に沈線文によって器面は区画され、区画内には「ハ」の字状文で充填される。44～49は第254号土坑で、縄文を地文とするもの、平行沈線文、粘土紐の貼り付けが施されるもので、諸磯b式期に属する。特に48は胎土が脆く、粘土紐の貼り付けが剥がされている箇所が多い。また色調は灰色がかったもので、このような土器は本遺跡においてほとんど認められない。49は、中期後半のものと思われる。50～53は第255号土坑で、器面には粘土紐による隆帯が施されたのち、刻みが施文される。中期後半のものと思われる。54～58は第256号土坑出土遺物である。54は諸磯b式期で、口縁部は「く」の字状に折れ曲がる。他は曾利式期に属するものと思われる。59～65は第257号土坑で、59は諸磯b式期、他は口縁部に幅広の沈線文が横位に施され、綾杉文と蛇行沈線文が施文される。これらは曾利Ⅲ式期のものである。66～94は第258号土坑出土で、諸磯b式期のまとまった遺物である。地文を縄文として、平行沈線文・刻みが施されるものである。なかには羽状を呈する84.86.88.90.92がある。特に93は有孔土器で、円盤状を呈するものである。また94は、施文手法が93と同一であることから、有孔土器と思われる。内外面には赤彩されており、このことから、93にも同様に赤彩されていたものと考えられる。これらの遺物の特徴から、諸磯b式期でも古手のものと思われる。95～106は第259号土坑出土遺物である。95～98.100.101は諸磯b式期で、99は前期末である。102～106は、縄文を地文とするもので、102は口縁部に交互刺突が横位に施され、縦位による隆起帯によって器面は左右に区画される。106も同様な手法による。これらは五領ヶ台式期に属するものである。

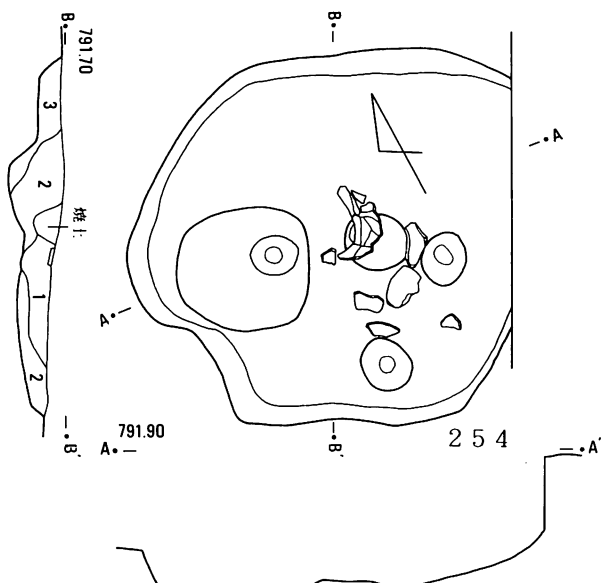
(山本)

石器（第55・58図）

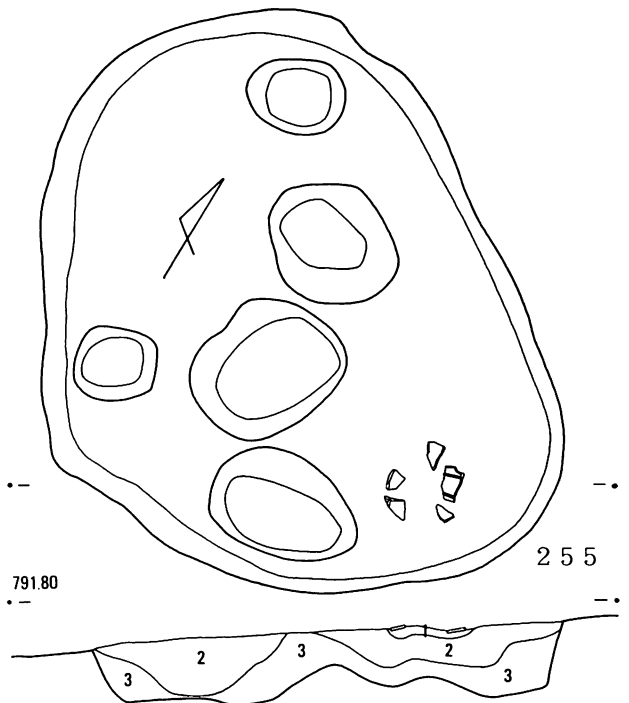
土坑より出土した石器は少なくここに示したものが全てである。特筆すべきものには第227号土坑より出土したものが挙げられ、特に第55図に独立して示したが、後述のとおり焼土や炭化物を覆土に多く含むといった特殊



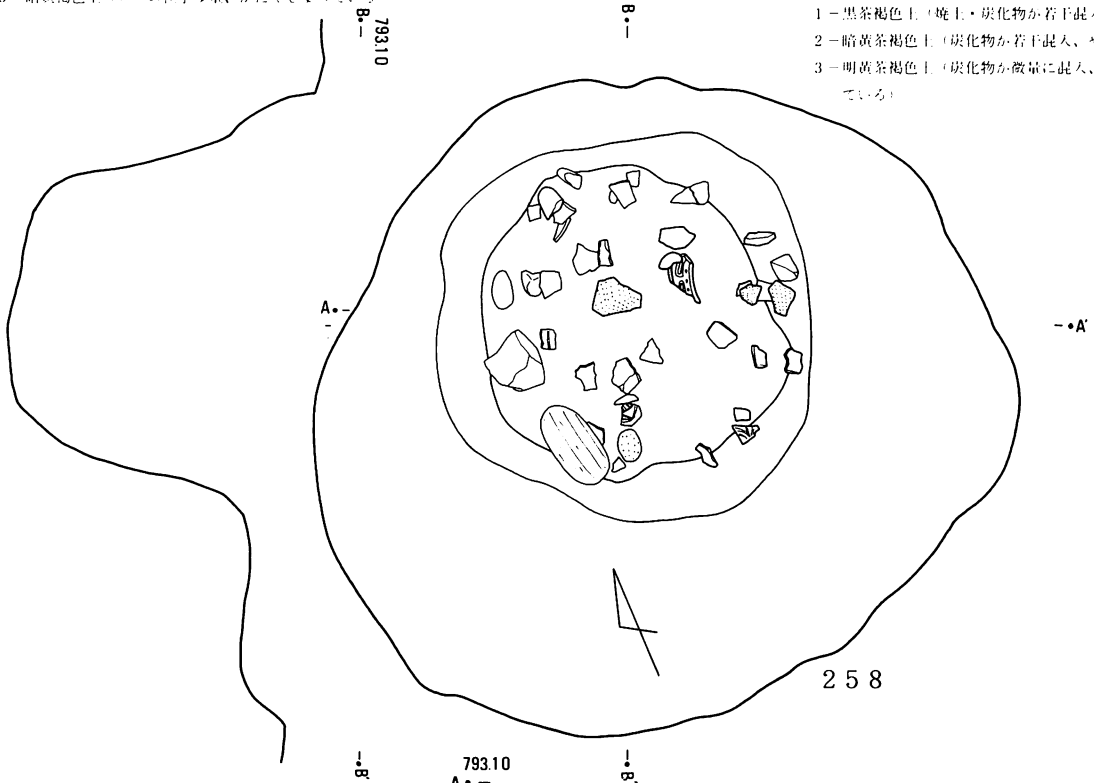
第45図 土坑(2)



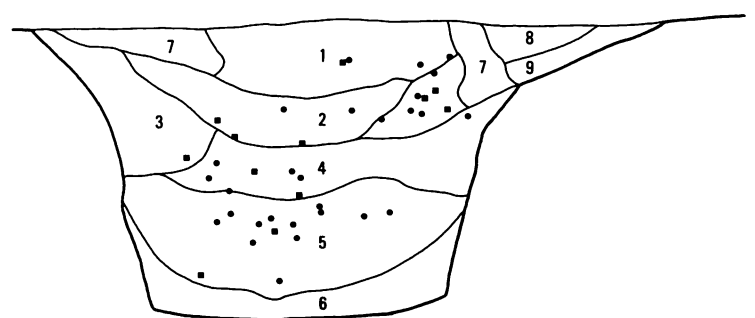
- 254
- 1-黒茶褐色土(焼土・炭化物若干混入、ロームブロック若干、やや細かい)
 - 2-明黄茶褐色土(炭化物若干、やや細かい)
 - 3-暗黄褐色土(ローム粒子多量、かたくなしまっている)



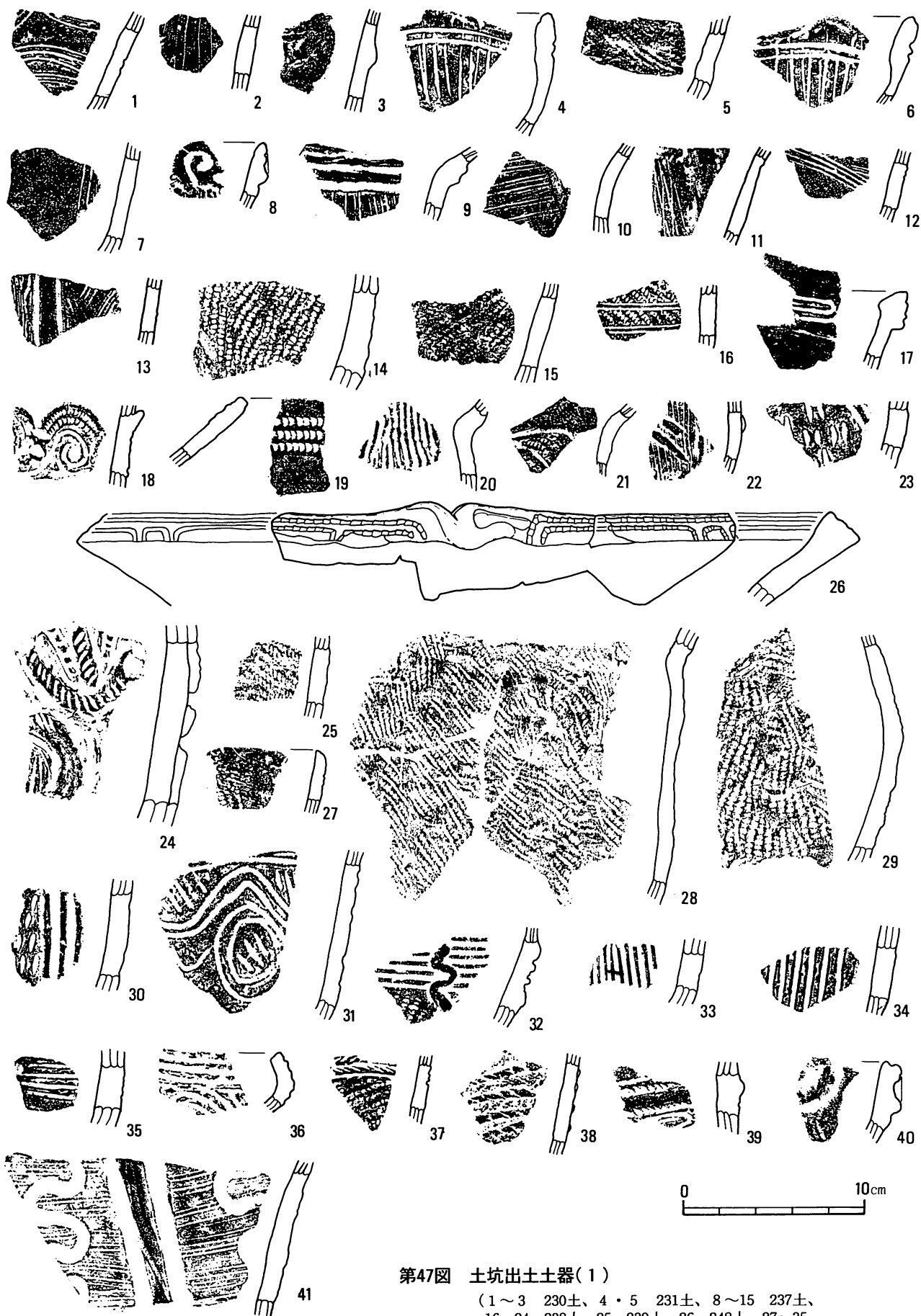
- 255
- 1-黒茶褐色土(焼土・炭化物が若干混入、やわらかい)
 - 2-暗黄茶褐色土(炭化物が若干混入、やや細かい)
 - 3-明黄茶褐色土(炭化物が微量に混入、ややかたくなしまっている)



- 258
- 1-暗褐色土(暗茶褐色土粒子混入)
 - 2-暗褐色土(ローム小ブロック及び炭化物少量混入)
 - 3-暗茶褐色土(ローム小ブロック混入)
 - 4-暗褐色土(炭化物少量及びローム粒子混入)
 - 5-暗褐色土(炭化物混入、しまりあり)
 - 6-褐色土
 - 7-褐色土(暗褐色土粒子混入)
 - 8-褐色土(7層より明るい)
 - 9-暗黄褐色土(ロームブロック混入)

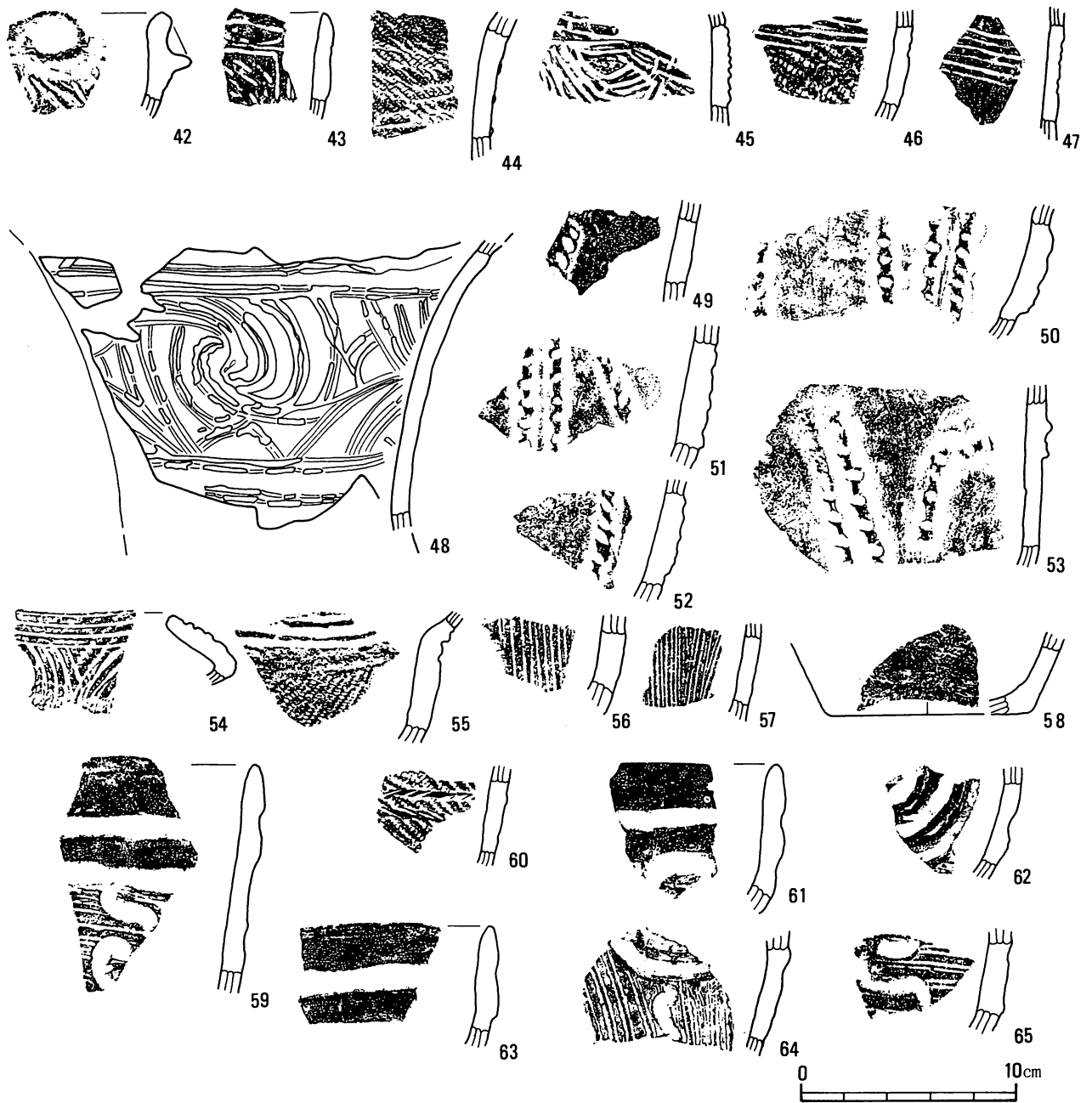


第46図 土坑(3)



第47图 土坑出土土器(1)

(1~3 230±, 4·5 231±, 8~15 237±,
 16~24 238±, 25 239±, 26 248±, 27~35
 251±, 36~41, 252±)



第48図 土坑出土土器(2)

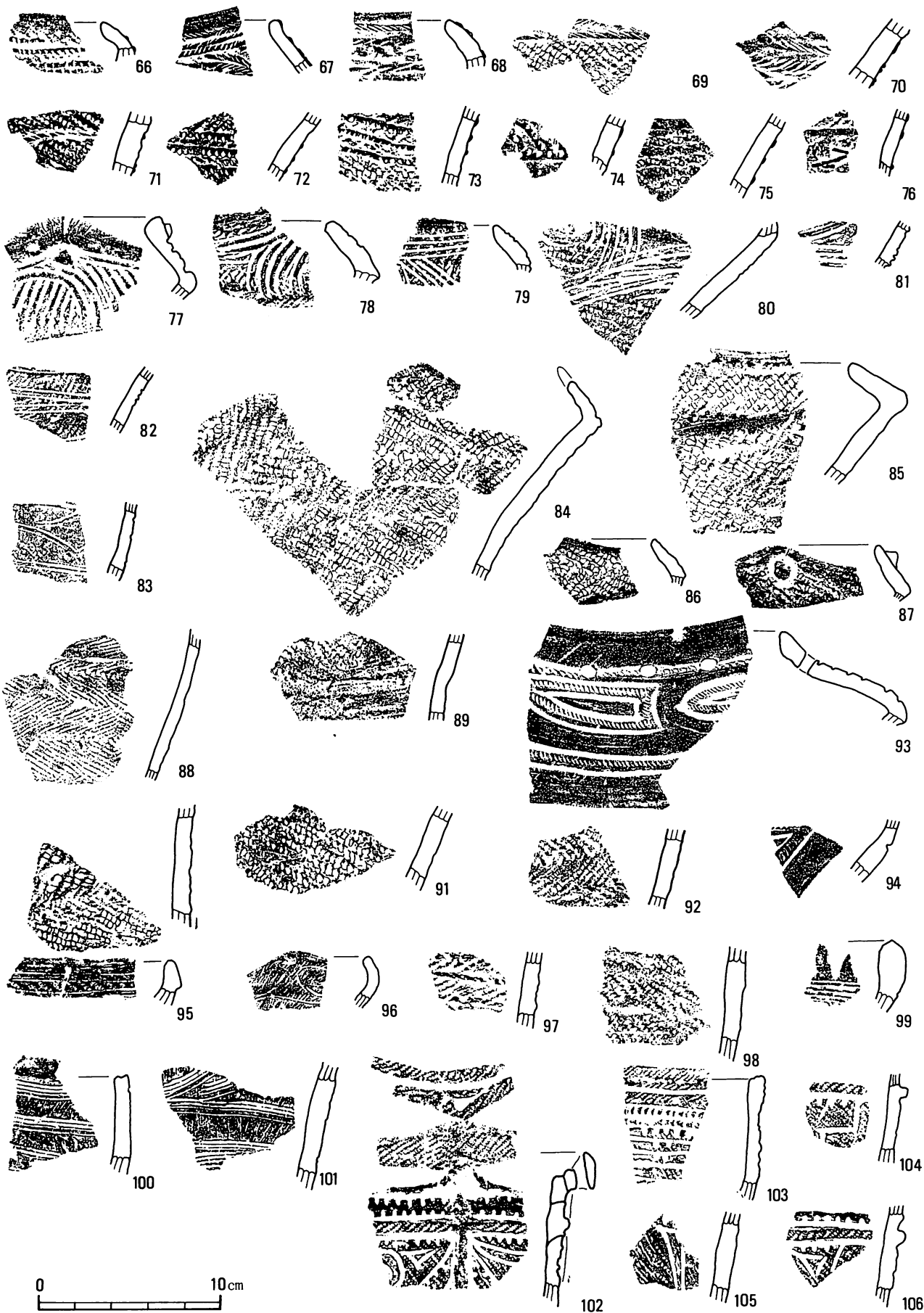
(42~49 254土、50・53 255土、54~58 256土、59~65 257土)

な状況のもと、坑底より約30cm上で、破損し凹石として再利用されたと考えられる大型の石棒(5)が発見され、また北巨摩方面では出土例が稀な小型の石錘(4)も出土している。この他に打製石斧3点(内2点は欠損品)、磨石兼凹石が2点見られる。第56図2の石鏃は第260号土坑で、また第56図1の石錐はやや大型のもので第268号土坑から、打製石斧は第260・267・272・275・282号土坑より、凹石は第256・258号土坑、石皿は第272号土坑からそれぞれ出土している。(野代)

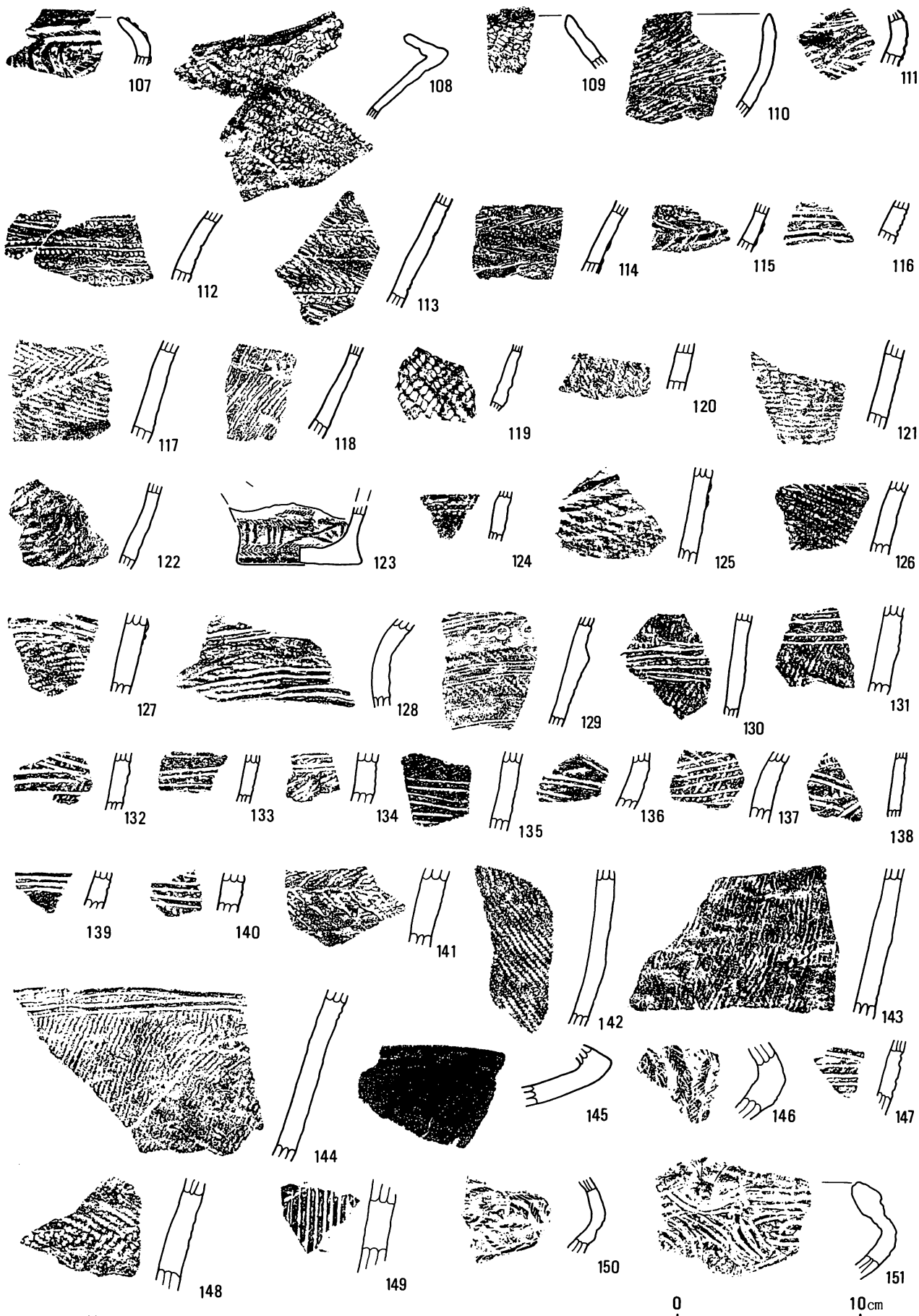
土偶(第56図)

土偶は2基の土坑から各1点ずつ出土している。

3は第230号土坑より出土した左足部分で、 $3.77 \times 1.96 \times 2.20$ cmを測る。4は第281号土坑より出土した左足部分で、 $2.60 \times 2.14 \times 2.24$ cmを測る。(野代)

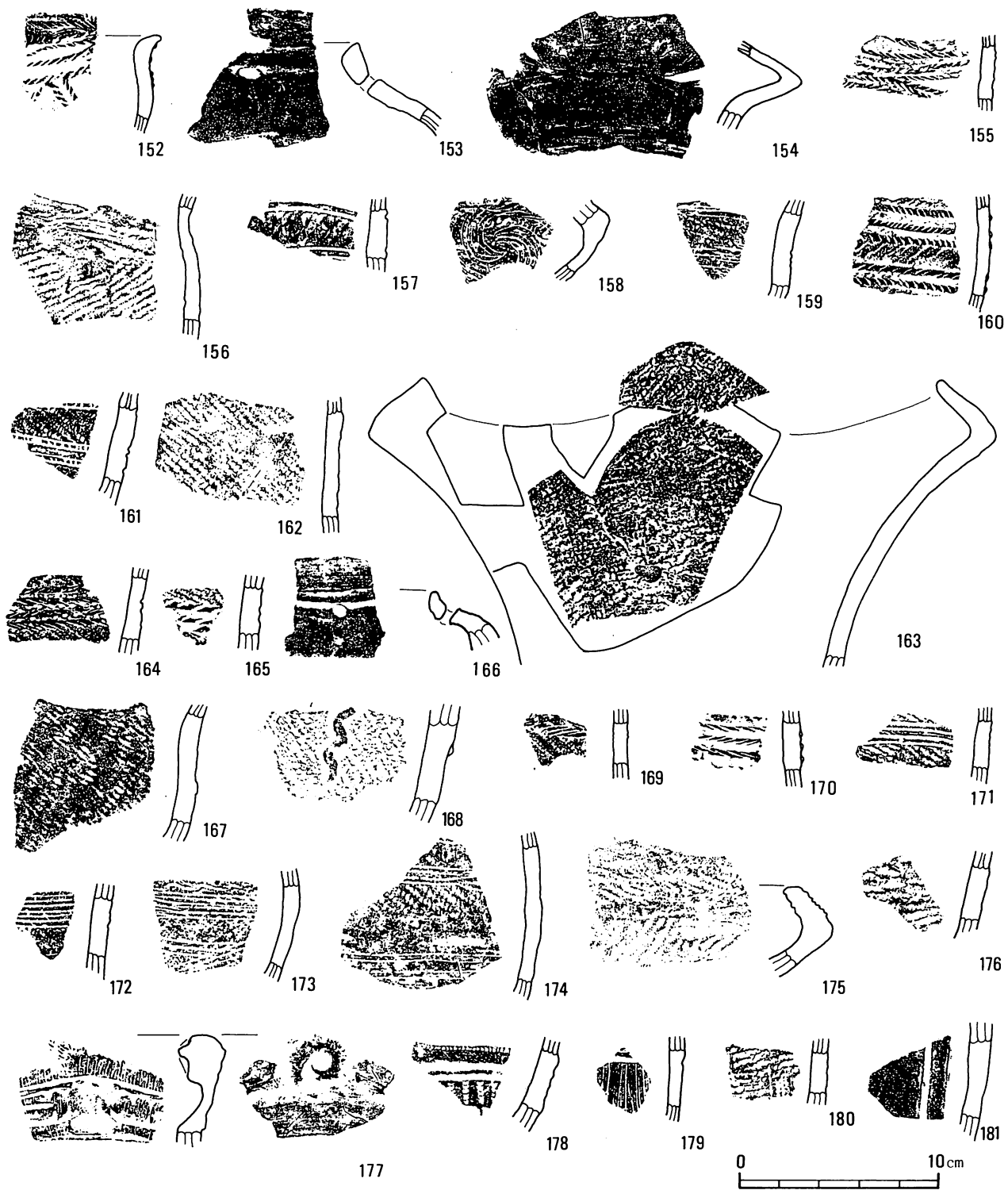


第49图 土坑出土土器(3) (66~94 258±、95~106 259±)



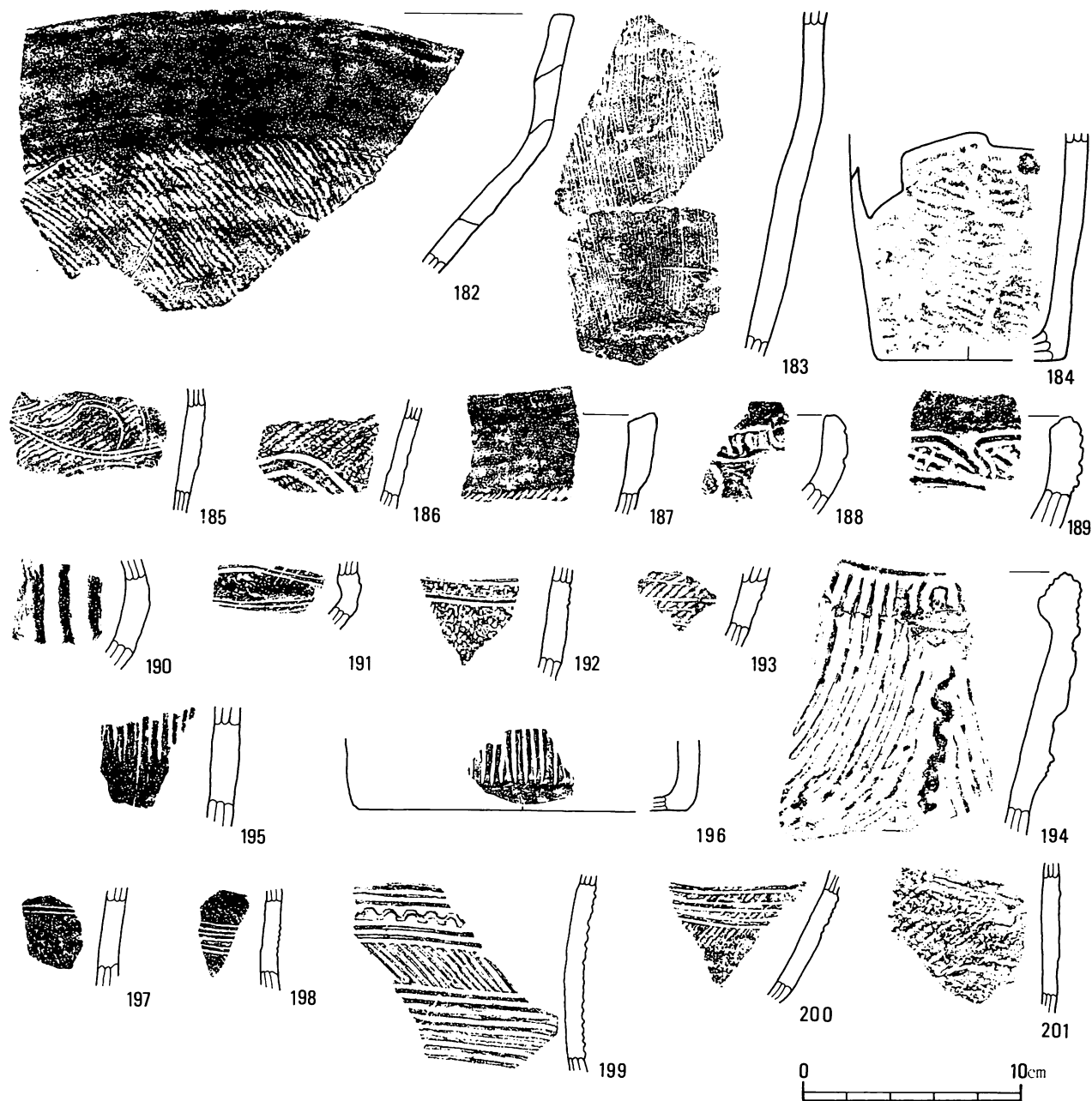
第50图 土坑出土土器(4)

(107~123 260±、124~145 262±、146~148 263±、149 264±、150·151 266±)



第51图 土坑出土土器(5)

(152~156 268±, 157 269±, 158·159 270±, 160~162 271±, 163~166 272±, 167·168 273±, 169~179 274±, 180 275±, 181 277±)

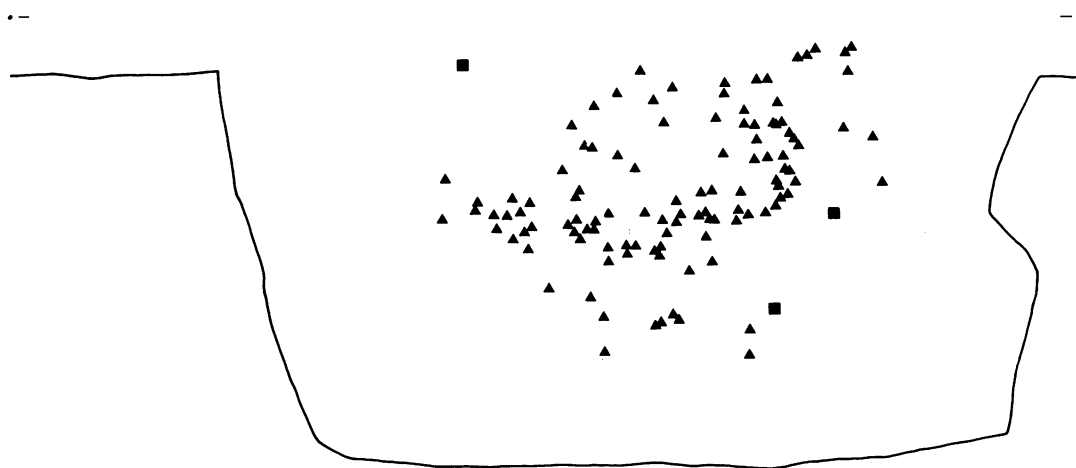
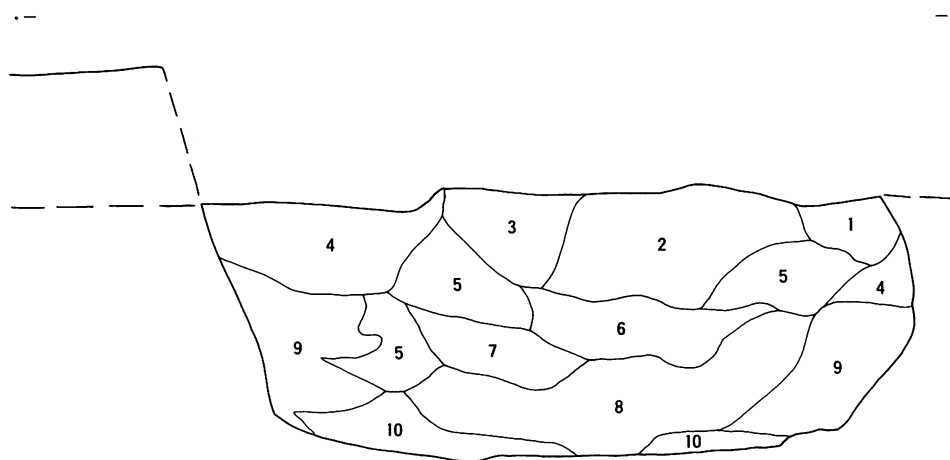


第52図 土坑出土土器(6)

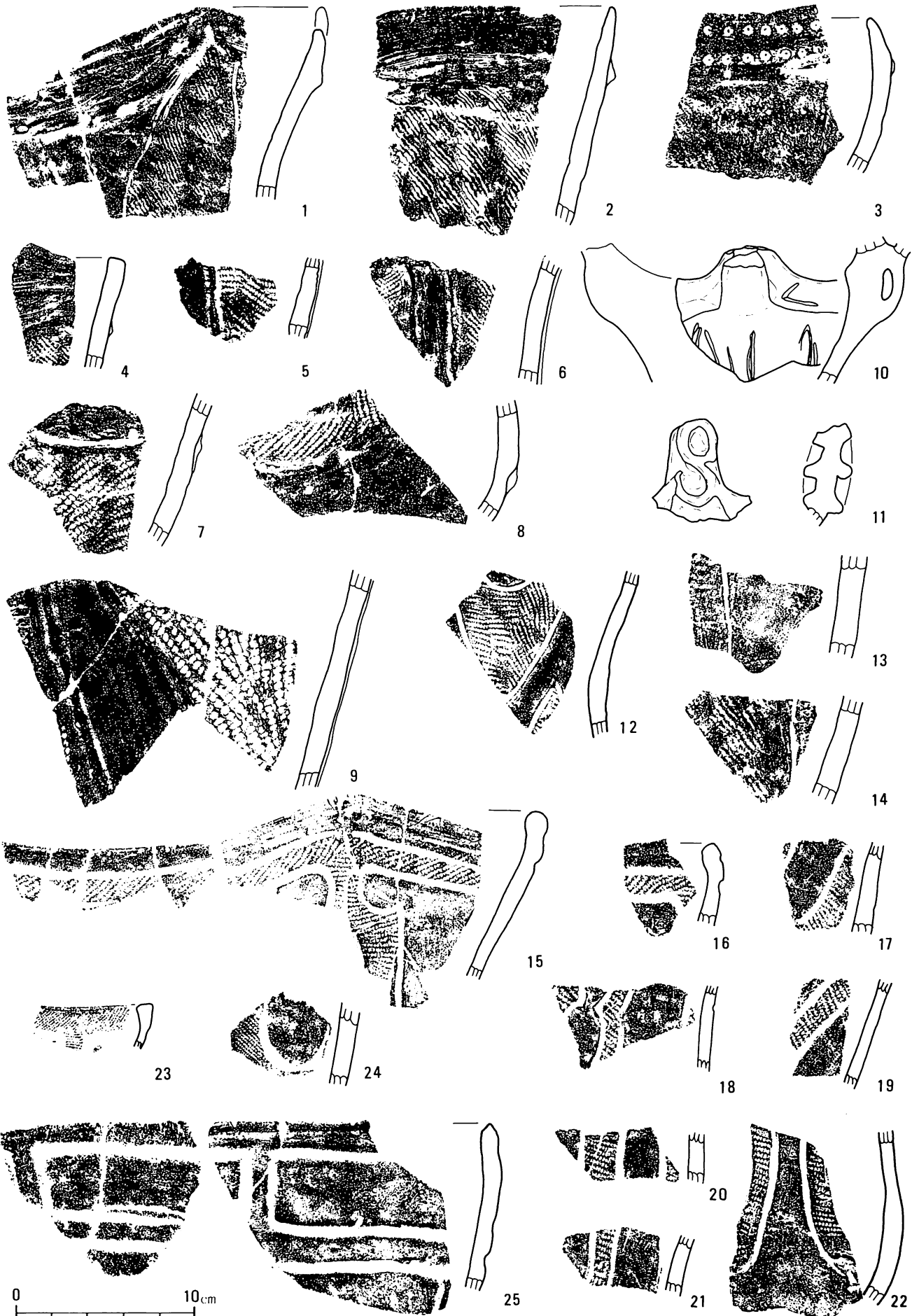
(182~184 279土、185~190 281土、191~194 282土、197~199 283土、200~201 285土)

第227号土坑 (第54図 1~25)

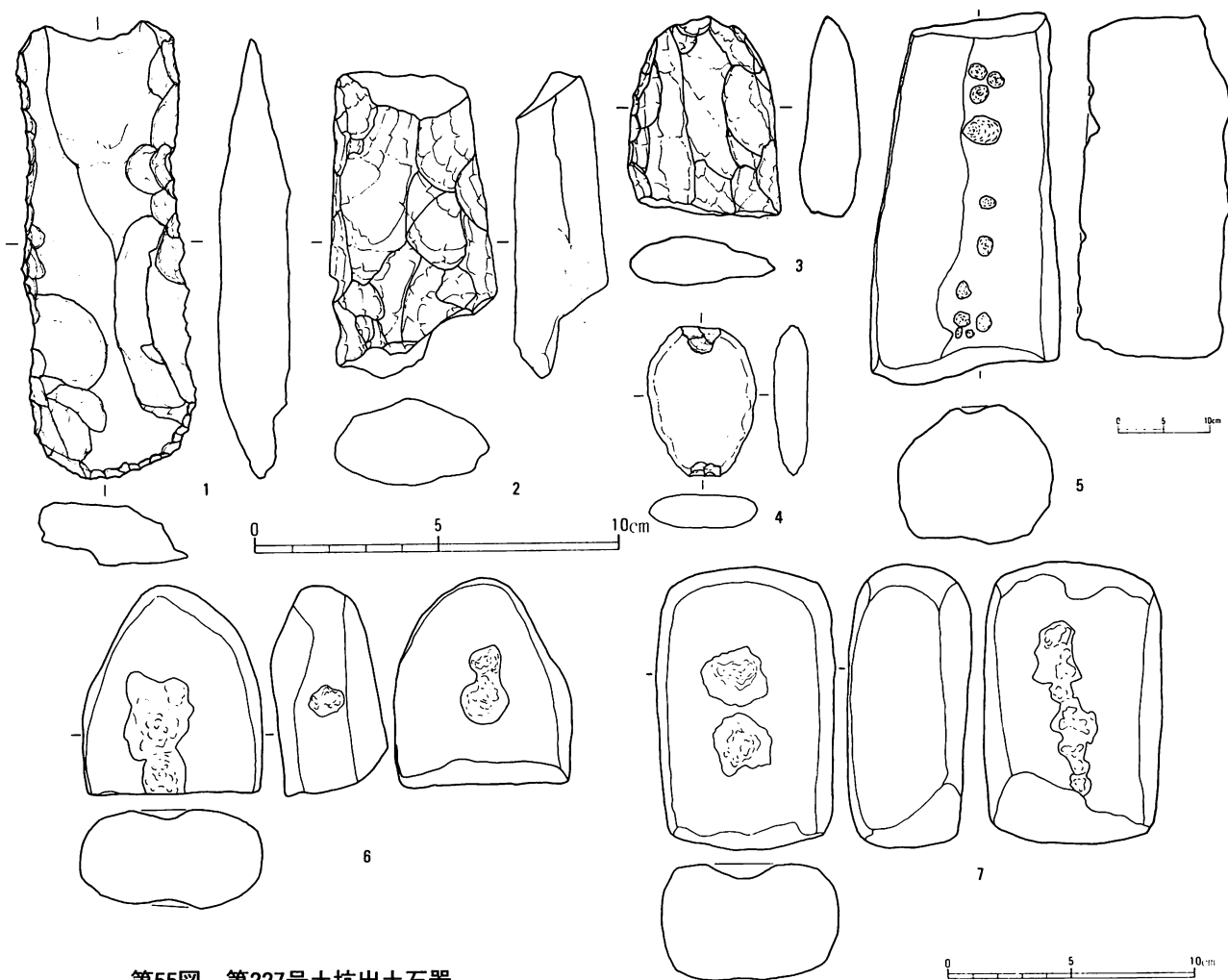
1~2・4は口縁部に無文帯を持ち、下端に1条の隆帯が巡るものである。1は波状縁の破片で波頂部から2条の沈線が垂下し、沈線区画内にLの無節縄文が縦位施文される。2は隆帯下にLの無節縄文が縦位帯状施される。4は隆帯下にRL単節縄文が施文される。3は、口縁部無文帯に2段にわたり円形の刺突列が巡るものである。隆帯下には縄文が施文されるが器面が摩滅しており、原体不明。5~9は胴部破片で、隆帯で文様を描き隆帯区画内に縄文が施文されるものを一括する。いずれもモチーフは不明。縄文は単節で5・6・9がRL、7・8がLRとなる。10・12~14は沈線によって文様を描くものを一括した。10は口縁部の破片で、把手部分を欠損する。胴部は細めの沈線で文様を描くが、V字状のモチーフとなるか。12~14は胴部破片である。12はV字状のモチーフで、沈線区画内にRL単節縄文が施される。13・14はモチーフ、縄文原体ともに不明。11は8の字状のモチーフを隆帯によって描いた把手部の破片である。15~22は二条を単位とする帯状の沈線で文様を描き、沈線



第53图 第227号土坑



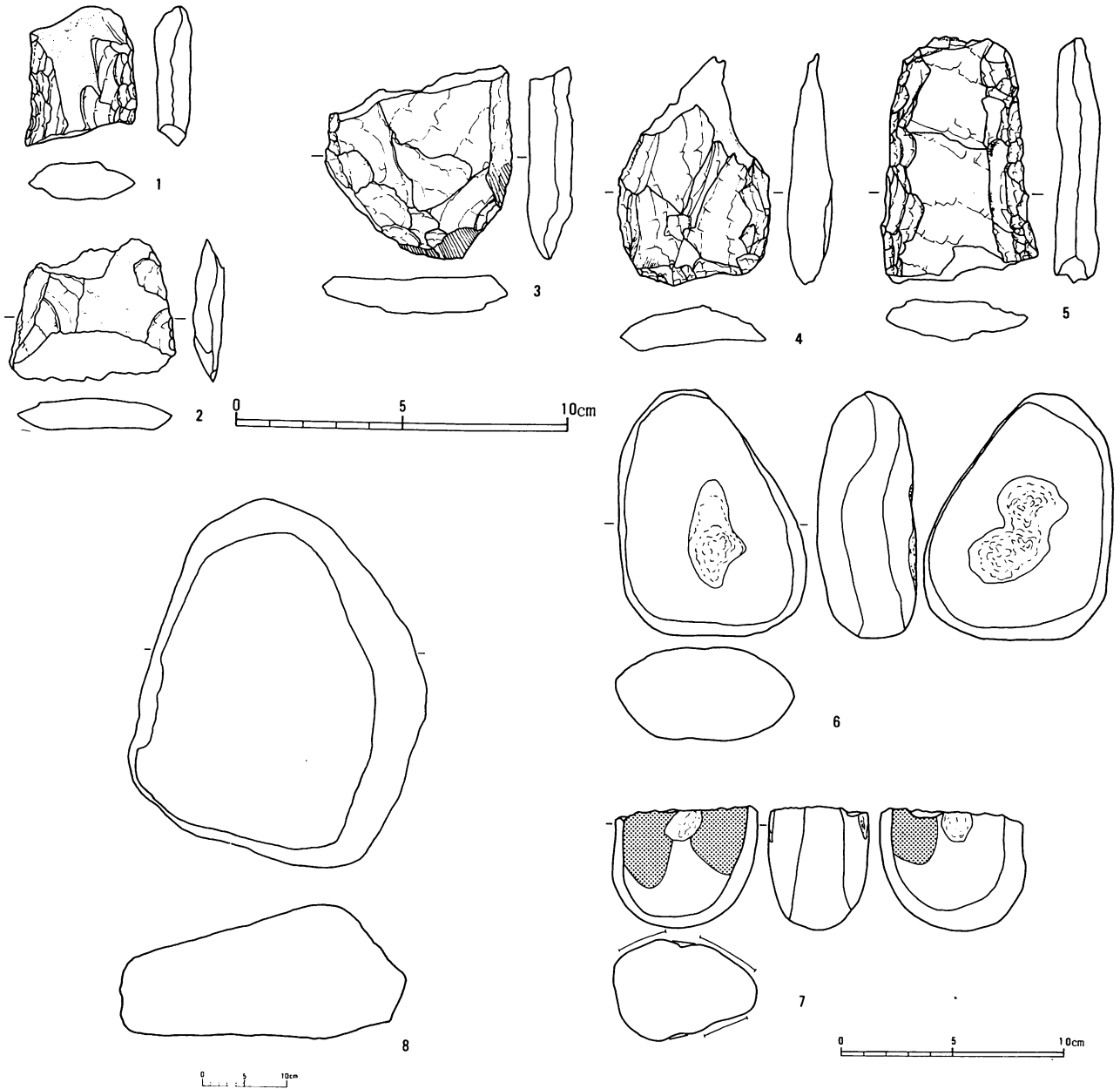
第54图 第227号土坑出土土器



第55図 第227号土坑出土石器

区画内に縄文が施されるものである。15・16は口縁部の破片で、いずれも口縁部に無文帯を持ち、沈線区画内にはLRの単節縄文が施される。15は緩やかな波状口縁の波頂部破片である。17～22は胴部の破片であるが、モチーフが判然としない。いずれもRL単節縄文が施される。23・24は太い沈線で文様を描き、節の細かい縄文が区画内に施されるものである。23は口縁部の破片で、LR単節の縄文帯が巡る。沈線は窓枠状のモチーフとなる。24は胴部破片で、沈線区画内にはRLの単節縄文が施される。25は太い沈線で文様を描くもので、縄文が施されないものである。口縁部には無文帯が巡り、沈線により窓枠状のモチーフが表出される。

以上本土坑から出土した土器は、いずれも中期末から後期初頭の範疇で捉えられよう。個体となる資料がないため文様から分類し概観したが、その編年的位置付けを行っておきたい。1～14は加曾利E式系統の土器群である。胴部に施される文様表出技法が、沈線（1・10・12～14）か隆帯（5～9）かで細別される。これらはいずれも破片資料であるため、細分型式は明確にできないが、凡そ加曾利E4式から称名寺式に伴出する加曾利E系統の土器群として捉えておきたい。また3は口縁部に巡る円形の刺突列を考慮すれば関沢類系の可能性ある。15～25は称名寺式の古い段階で捉えられよう。このうち23～25は、数次にわたる反復施文の結果表出された、太く陰影のある沈線によって文様を描いている点や、23・24にみられる細かい原体の縄文を用いていることから、称名寺式でも最も初期の段階で、中津系の土器群として捉えられる。（三田村）



第56図 土坑出土石器

(第227号土坑土層説明)

- 1-褐色土(暗褐色土を多量、小ロームブロックを若干含む)
- 2-暗褐色土(小ロームブロック・炭化物を若干含む)
- 3-暗褐色土(褐色土・炭化物を若干含む、2層より明るい)
- 4-褐色土(暗褐色土・炭化物を若干含む)
- 5-暗褐色土(褐色土・小ロームブロックを若干含む、2層より明るく、3層より暗い)
- 6-暗褐色(小ロームブロックを多量に含む)
- 7-暗褐色土(小ロームブロック・炭化物を若干含む、5・6層より暗い)
- 8-黄褐色ロームブロック土
- 9-黄褐色土(ローム粒子を多量に含む)
- 10-暗黄褐色土(ローム粒子を多量に含む)

表2 土坑一覧表 (227土~284土)

(単位: cm)

土坑番号	長径	短径	深さ	形態	坑底	立ち上がり	所見	時期
227	216	—	105	円形	平坦で円形	直に近いが、東側で袋状を呈する	礫土中より焼土が集中して検出された。石棒が出土(第55図)。	後期初頭 称名寺式
228	156	100	24	楕円形	平坦で楕円形	緩やか	北側に落ち込みが見られる。	中期
229	106	94	24	楕円形	平坦で楕円形	皿状に緩やか		中期前半 藤内式
230	97	90	57	不整形円形	平坦で円形	直に近い	上層より土偶の足が出土(第56図)。	前期後半 諸磯b式
231	91	76	26	不整形円形	ほぼ平坦で円形	やや緩やか	礫が数点混入する。やや中央付近が落ち込む。	中期初頭 五領ヶ台II式
232	102	94	47	円形	ほぼ平坦で円形	ほぼ直に近い	南東部がテラス状の張り出しが見られる。遺物は皆無	中期?
233	82	76	21	円形	凸凹で円形	ほぼ直に近い	坑底に2箇所落ち込みが認められる。	中期初頭 五領ヶ台II式
234	56	48	32	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	直に近い	遺物は皆無。	中期?
235	56	55	17	円形	ほぼ平坦で円形	直に近い	遺物は皆無。	中期?
236	42	40	10	円形	ほぼ平坦で円形	直に近い	遺物は皆無。	中期?
237	90	87	28	円形	ほぼ平坦で円形	直に近い		中期後半 曾利III式
238	159	146	83	円形	平坦で円形	直に近い	貯蔵穴か。	中期初頭 五領ヶ台II式?
239	90	54	13	隅丸長方形	ほぼ平坦で長方形	直に近い		中期?
240	98	74	8	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	遺物は皆無。	中期?
241	172	107	26	楕円形	ほぼ平坦で楕円形	緩やか	南西部が攪乱を受けている。	中期初頭 五領ヶ台II式
242	79	75	10	不整形楕円形	平坦で不整形楕円形	たらい状で直に近い	41住と切り合いが、ほぼ同時期に属する。	中期初頭 五領ヶ台II式
243	108	103	16	不整形	平坦で南側は皿状	北側は直に近く、南側は緩やか	遺物は皆無。	中期?
244	59	53	33	不整形楕円形	中央が窪む楕円形	すり鉢状	遺物は皆無。	中期?
245	125	83	28	楕円形	すり鉢状で円形	すり鉢状	遺物は皆無。	中期?
246	110	67	33	楕円形	斜めで不整形	南側は直で、北側は緩やか	中央付近が攪乱を受けている。	前期?
247	60	52	21	楕円形	平坦で楕円形	やや直に近い	遺物は皆無。	中期?
248	82	75	18	円形	平坦で円形	直に近い	表土削除段階で部分的に壊れてしまったが、浅鉢が出土している。	中期前半 猪沢II式
249	47	43	16	不整形	中央が窪む不整形	すり鉢状	遺物は皆無。	中期?
250	130	90	37	楕円形	平坦で弧状	直に近い	二つの土坑が重なっている。上記のものが東側に位置するもの。西側の土坑の方が新しい。遺物は皆無。	中期?
	65	54	26	楕円形	平坦で楕円形	直に近い		
251	102	85	70	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	貯蔵穴か?	中期後半 曾利II式
252	145	108	35	隅丸長方形	平坦で隅丸長方形	直に近い、たらい状	二つの土坑が重なっている可能性がある。層の中間に根の攪乱あり。	中期後半 曾利I式
253	120	80	23	楕円形	凸凹で楕円形	直に近く皿状		中期後半 曾利IV式
254	97	—	13	円形	ほぼ平坦で円形	皿状	ビット状の落ち込みが3基。覆土に焼土を含み、土器も焼けた。	前期後半 諸磯b式
255	164	130	14	楕円形	凸凹で楕円形	皿状	東壁付近より、遺物がまとまって出土している。	中期後半曾利I式
256	96	80	29	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	252土と切り合う。	中期後半 曾利IV式
257	107	102	33	隅丸方形	平坦で隅丸方形	直に近くたらい状	中層付近に礫が集中し、遺物がまとまっている。	中期後半 曾利IV式
258	177	165	83	円形	平坦で円形	直に近い	遺物がまとまって出土している。	前期後半 諸磯b式
259	111	101	32	円形	すり鉢状で円形	緩やか		中期初頭 五領ヶ台II式
260	125	—	52	楕円形	平坦で円形	直に近い	中層付近で遺物が集中している。	前期後半 諸磯b式
261	103	90	39	楕円形	平坦で楕円形	直に近い。袋状を呈する	中層付近で炭化物・焼土が認められる。	前期後半 諸磯b式
262	115	95	54	楕円形	平坦で円形	直に近いが、東側で段を持つ	礫が多数認められる。	前期後半 諸磯b式
263	128	102	31	楕円形	平坦で楕円形	たらい状		前期後半 諸磯b式
264	95	90	27	円形	平坦で不整形円形	直に近い	西寄りの中層付近に大型の礫が認められる。	中期後半 曾利IV式

土坑番号	長径	短径	深さ	形 態	坑 底	立ち上がり	所 見	時 期
265	103	93	24	円形	平坦で円形	皿状		前期後半 諸磯b式
266	60	57	8	不整楕円形	平坦で不整楕円形	たらい状		前期後半 諸磯b式
267	—	—	38	不明	すり鉢状で円形	緩やか	礫が多数混入し、覆土の状況から意図的に埋め戻されたようだ。	前期後半 諸磯b式
268	94	90	14	不整円形	凸凹で不整円形	皿状	47住と切り合う。	前期後半 諸磯b式
269	81	65	38	楕円形	平坦で不整円形	直に近い	42住と切り合う。	前期後半 諸磯b式
270	95	82	29	円形	平坦で不整円形	直に近い	42住と切り合う。	前期後半 諸磯b式
271	73	64	35	楕円形	平坦で楕円形	直に近い	北側の一部を攪乱されている。	前期後半 諸磯b式
272	98	95	77	不整円形	平坦で不整円形	直に近い	坑底付近に大型の礫が認められる。袋状で貯蔵穴か？	前期後半 諸磯b式
273	—	90	26	不整円形	平坦で不整円形	皿状	274土に切られている。	前期後半 諸磯b式
274	95	80	28	楕円形	平坦で楕円形	直	273土を切る。	中期後半 五領ヶ台II式
275	92	88	35	円形	中央が窪む円形	緩やか		中期後半 曾利III式
276	80	67	20	楕円形	平坦で楕円形	直に近い		中期？
277	80	67	20	楕円形	平坦で円形	直に近い	大型の礫が認められる。	中期後半 曾利IV式
278	96	78	22	楕円形	平坦で楕円形	直に近い		中期？
279	79	78	53	円形	平坦で円形	直		中期後半 曾利II式
280	79	77	15	円形	平坦で円形	皿状	遺物は皆無。北東部が攪乱を受けている。	中期？
281	90	80	—	円形	平坦で円形	直に近い	土偶の足(第56図)が出土している。河川跡に切られる。	中期後半 曾利I式
282	89	82	24	円形	平坦で円形	直に近い	遺物が中層付近に集中している。	中期後半 曾利II式
283	—	60	28	瓢箪形	凸凹で皿状	南側は直、北側は緩やか	279土に切られる。河川跡に切られる。	前期後半 諸磯b式
284	100	—	15	楕円形	平坦で隅丸方形	皿状で緩やか	41住と切り合う。時期的には併行。	中期初頭 五領ヶ台II式

表3 土坑出土石器観察表

※()は現存値

図番号	出土位置	器 種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石 材	形 態	備 考
第55図1	227土	打製石斧	12.35	4.5	1.74	125.9	安山岩	短冊形	
” 2	”	”	8.22	4.51	2.48	98.5	頁岩	”	
” 3	”	”	5.39	4.12	1.48	46.8	”	”	
” 4	”	石 錘	4.02	2.90	0.81	15.1	安山岩		
” 5	”	石 棒	40.2	21.2	15.2	1730.0	花崗岩		凹み 表11
” 6	”	凹 石	8.22	7.29	4.23	360.5	安山岩		凹み表2、裏1、側1
” 7	”	”	11.37	7.11	4.78	637.0	”		凹み表2、裏4
第56図1	282土	打製石斧	(4.03)	(3.40)	(1.10)	(20.9)	頁岩	短冊形	刃部欠損
” 2	260土	”	(4.26)	(4.95)	(0.81)	(21.5)	”	”	刃部・基部欠損
” 3	267土	”	(5.60)	(5.56)	(1.32)	(45.1)	”	”	基部欠損
” 4	272土	”	(6.76)	(4.60)	1.35	(39.4)	砂岩	”	”
” 5	275土	”	(7.22)	(4.60)	(1.37)	(61.3)	頁岩	”	刃部欠損
” 6	256土	凹 石	10.99	8.34	4.22	454.9	安山岩		凹み表1裏2
” 7	258土	”	(5.08)	(6.58)	(4.50)	(199.9)	”		凹み表1裏1磨面3
” 8	272土	石 皿	44.50	35.80	16.30	7500.0	”		
第57図1	260土	石 鏃	1.63	2.03	0.36	0.8	黒曜石	無茎凹基	
” 2	268土	石 錐	8.32	2.00	1.36	17.2	”		

第3節 溝・河川跡

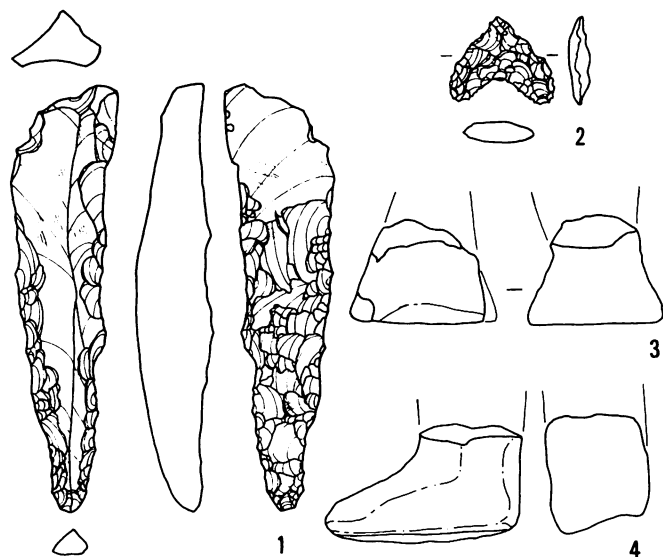
第1項 溝 (第59図)

位置 調査区の北側、C-25~27グリッドに存在する。河川跡の東側に隣接する。

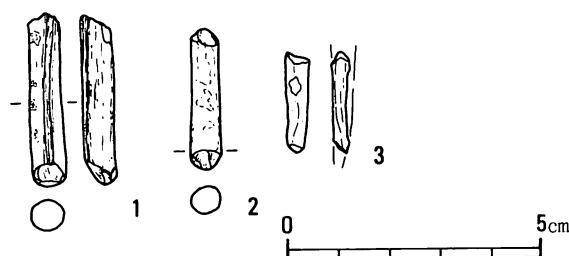
形態・規模 幅2m程度で、深さが15~20cmと浅い。覆土はとても柔らかく、地境の溝とも考えられる。本溝は河川跡の上層と類似しており、ほぼ同時期まで機能していた様子が窺える。河川跡との合流地点付近で東側に張り出しを持つ。遺物は図示しなかったが、覆土より陶器片および寛永通寶(新寛永)の破片、木片などが出土していることから、本溝の時期は近世以降に比定されよう。(野代)

第2項 河川跡 (第59図)

位置 調査区の全域、北側より南側に向けて流れて、調査区の中央付近でクランク状に蛇行している。A-36~38、B-32~38、C-27~32グリッドに存在する。形態・規模 川幅は2.4~3.5m、深さ0.65~1.2mを測る。北側は部分的に攪乱を受けている。河床には部分的に砂礫が集中する箇所が存在し、そのいくつかの地点では、縄文時代の石器等が多数認められたが、これらのものは流されてきたものと思われる。またこの



第57図 土坑出土石器・土偶



第58図 パステル形石器

内のいくつかには、ピット状の穴が存在したが、これは流水による河食作用で生じたものと考えられ、これはこの河川跡がかつて長期的にある程度の水量を維持していたことを示すものである。

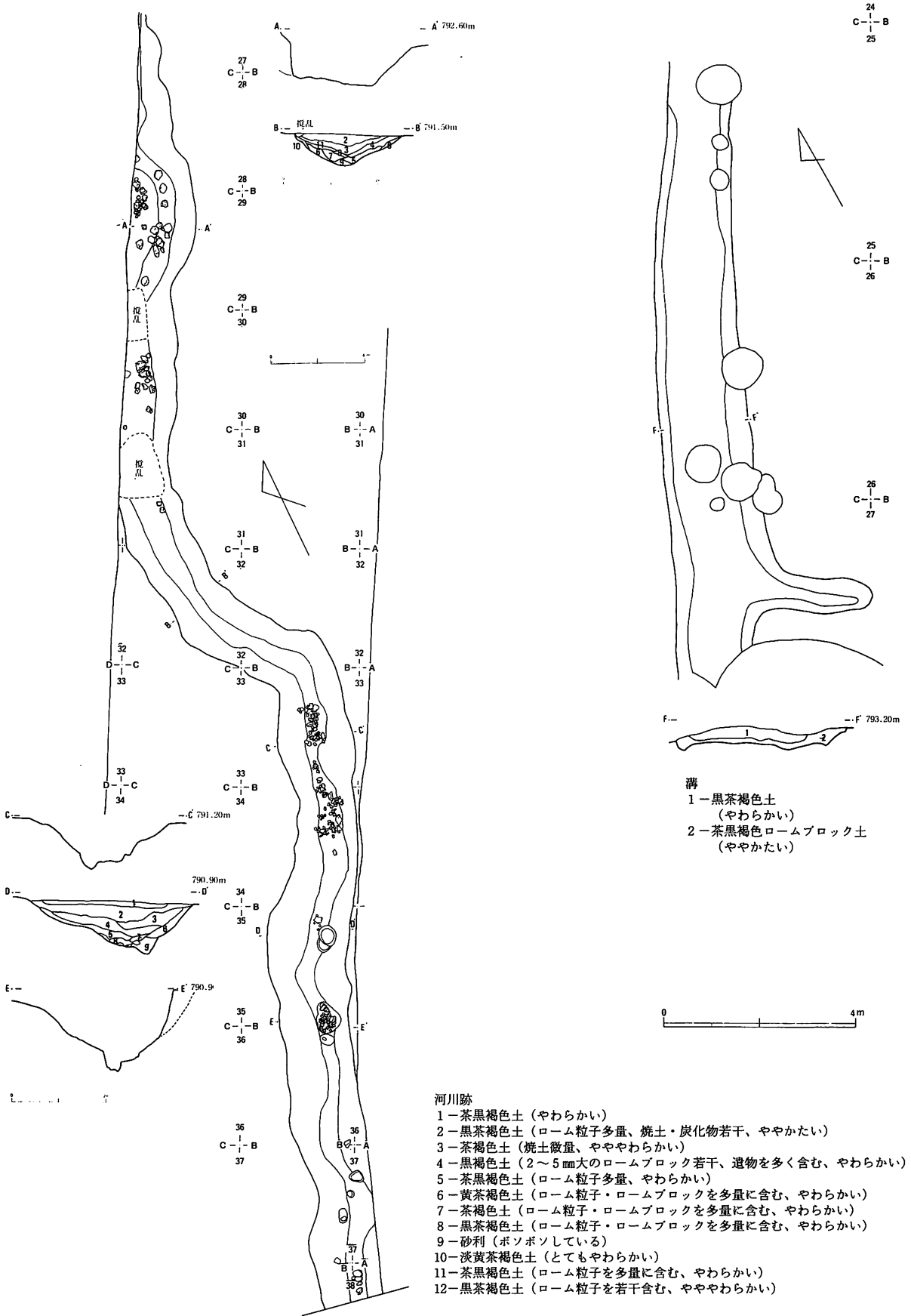
遺物 図示しなかったが、覆土から周囲の遺構からの流れ込みと考えられる縄文時代の打製石斧や磨石、凹石といった遺物が多量に認められた。上層付近からは、文久永宝や寛永通寶、ニッケル10銭貨などが出土した。中層付近からは平安時代の土師片や水晶塊が出土している。以上のような点および覆土の状況により、本河川跡は平安時代以降より機能の初現が認められ、その痕跡が窪みとして存在しているのは近世末ないし昭和初期までと推定される。(野代)

第4節 包含層出土遺物

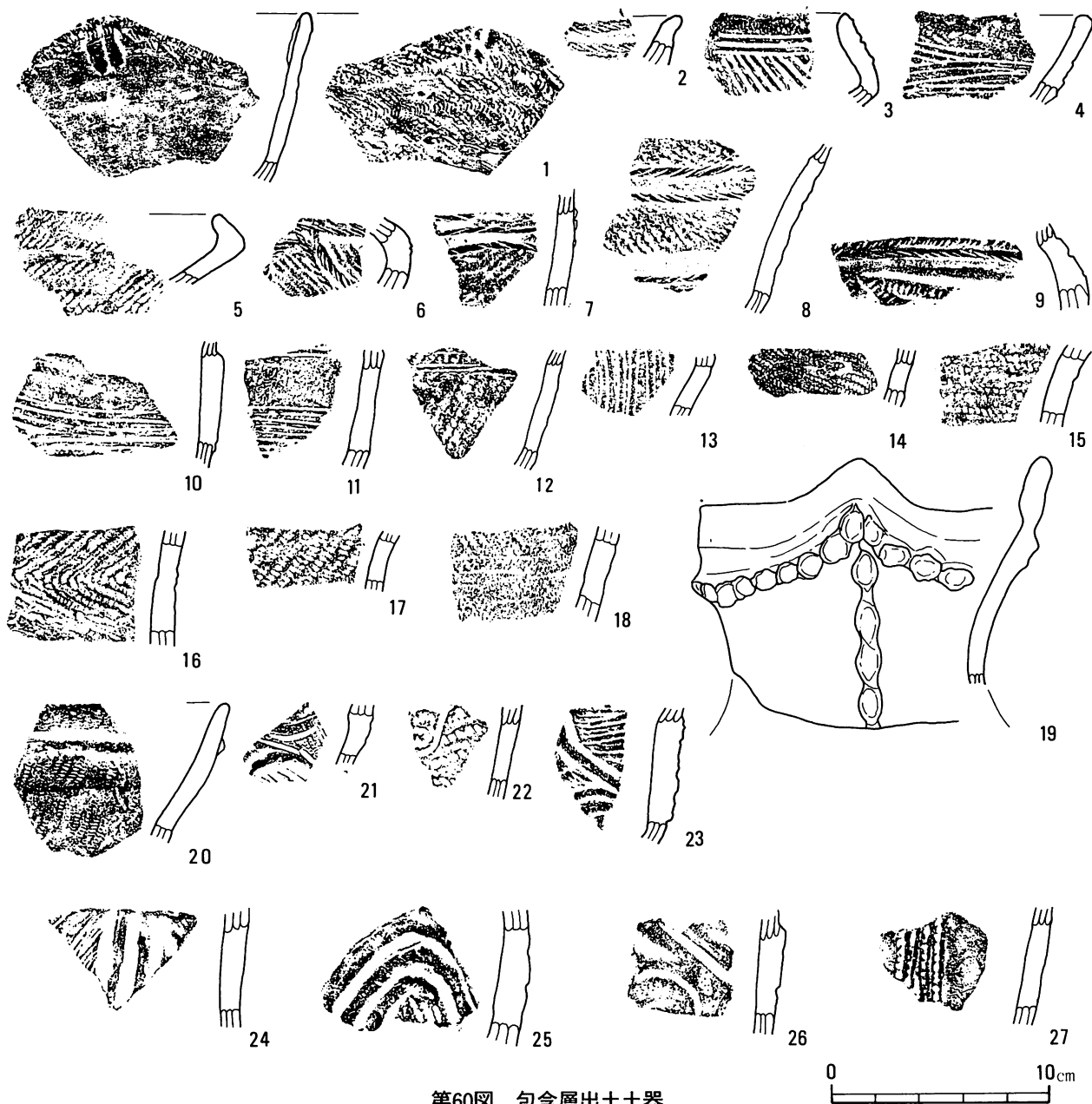
包含層は薄かったため、遺物はあまり存在しなかったが、ここで図示したものが全てではなく、紙面の関係で図示できなかったことをここに付記しておく。ここでは特殊と考えられるものと良好と考えられる遺物を対象についてのみ扱うこととした。

土器 (第60図)

1は、波状を呈する口縁部の破片である。口唇部内面には爪形文が施され、粘土紐が縦位に貼り付けされる。外面の口唇部には、地文として縄文が施され、内面と同様に器面には爪形文が横位に施文される。北白川下層式に属するものと思われる。2~15、17・18は、地文に縄文が施され、粘土紐による貼り付けと刻みが序文されるもので、諸磯b式期に比定される。13は第45号住居跡のピット1からの出土、15は第46号住居跡のピット1の出土遺物である。16は第45号住居跡のピット3の出土遺物で諸磯式期である。器面には結節羽状縄文が施される。17は第45号住居跡のピット1の出土遺物である。18は第45号住居跡のピット3の出土遺物である。19は、口縁部に突起が施される。口縁部直下には粘土紐が横位に施され、口縁部に沿って波状を呈する。また波頂部から粘土



第59図 溝・河川跡

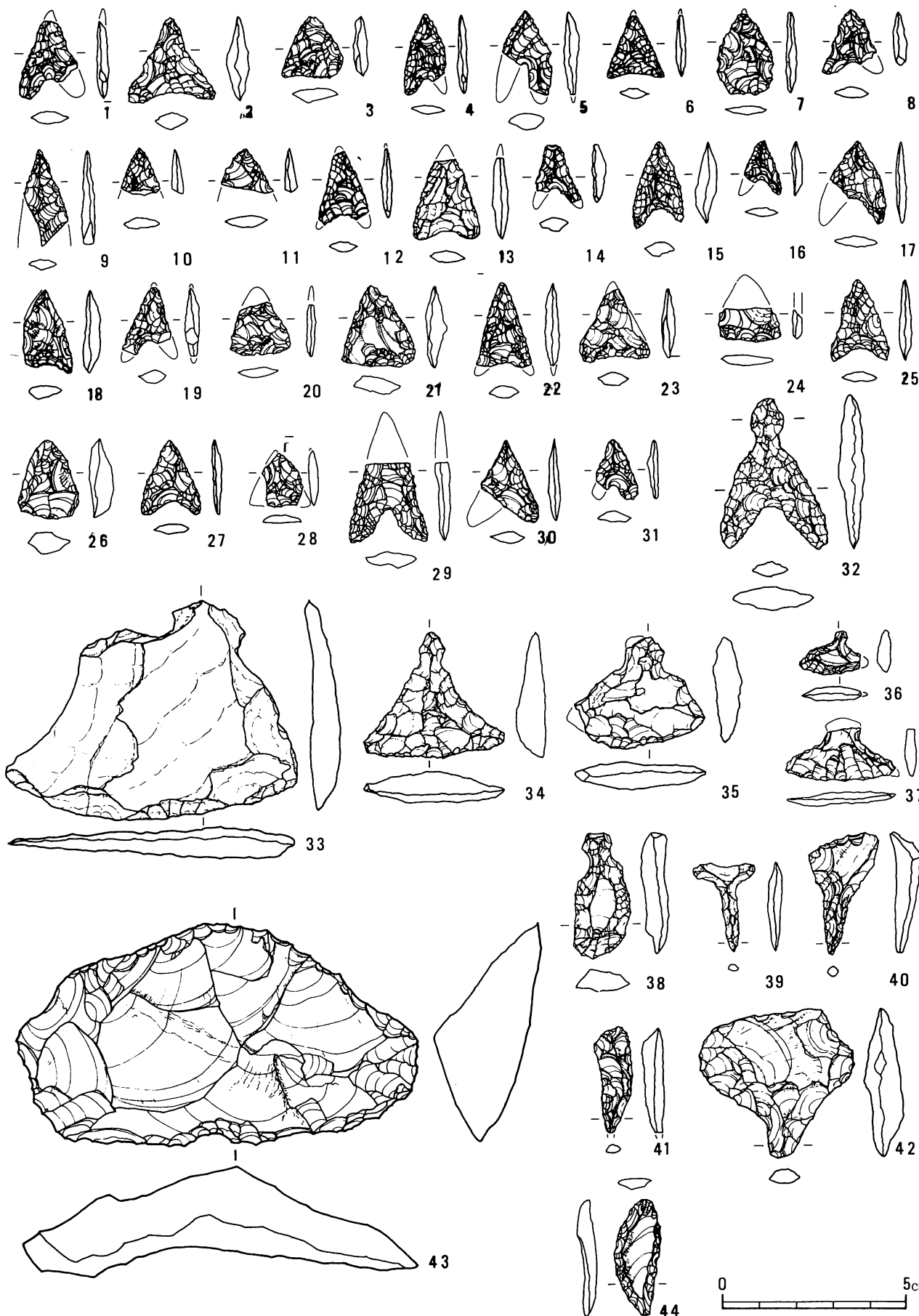


第60図 包含層出土土器

紐は、胴部に垂下させられ、その後指で押圧させられる。井戸尻式期と思われる。20は口縁部の破片で、横位に粘土紐が貼り付けされる。以下縄文が施文される。21は第45号住居跡のピット1からの出土で、器面には縄文が施され、平行沈線文が施文される。22は器面に縄文が施され、沈線文が施文される。23は中期前半のものと思われる、胴部には「B」字状に平行沈線文によって区画され、区画内には平行沈線文で充填される。24は縦位に幅広の平行沈線文が施され、沈線文の脇には菱形状沈線文が施される。25は「U」字状の平行沈線文が施文され、列点文が施文される。26は、器面に沈線文が施される。これらのものは曾利Ⅳ式期と思われる。27は器面に角押文が4条に施され、中期前半のものと思われる。(山本)

石器 (第61・64図)

1～31が石鏃である。大部分のものは黒曜石製であるが、2・13についてはチャート製である。全体を見渡すと31点中23点(74%)が欠損品であった。またこの欠損品である23点中12点(52%)が基部のみの破損、4点(17%)が刃部・基部の破損、7点(31%)が刃部のみといった内訳で、この包含層出土のものについてのみ対象としたならば、基部における欠損率は $52\% + 31\% = 83\%$ で異常に高いようである。形態については31点中3点



第61图 包含层出土石器(1)

は不明であるが、残り28点中10点（36％）が平基、18点（64％）が凹基で1：2の割合である。出土地点は、C-29～31グリッドに集中する傾向がある。

32は直剪鏃で、B-27グリッドより出土した。挟り部分で0.67cmを測り、黒曜石製である。時期的には前期後半か中期初頭に位置付けられよう。北陸地方で多く見られるもので、実測図は天地が逆かもしれない。県内での出土例は少なく、時期は異なるが豆塚遺跡で認められる程度で、興味深い資料である。

33～38は石匙で、33～27は横型、38は縦型である。33は大型の粗製のもので、これに比べて36はとても小型でその大きさはとても対照的であり、どのように使用したのか興味深い。

39～42は石錐、43・44は剥片を利用したスクレイパーである。

全体的に石鏃以外の石器は、黒曜石が大量に入手できる地理的条件下に在るにもかかわらず、不思議なことに材質の低下するチャートや泥板岩等石材が多様化する傾向があるようである。

第62図45～48・51は打製石斧、49は小剥離のある剥片石器、50は磨製石斧である。 (野代)

パステル形（石墨状）石器（第57図）

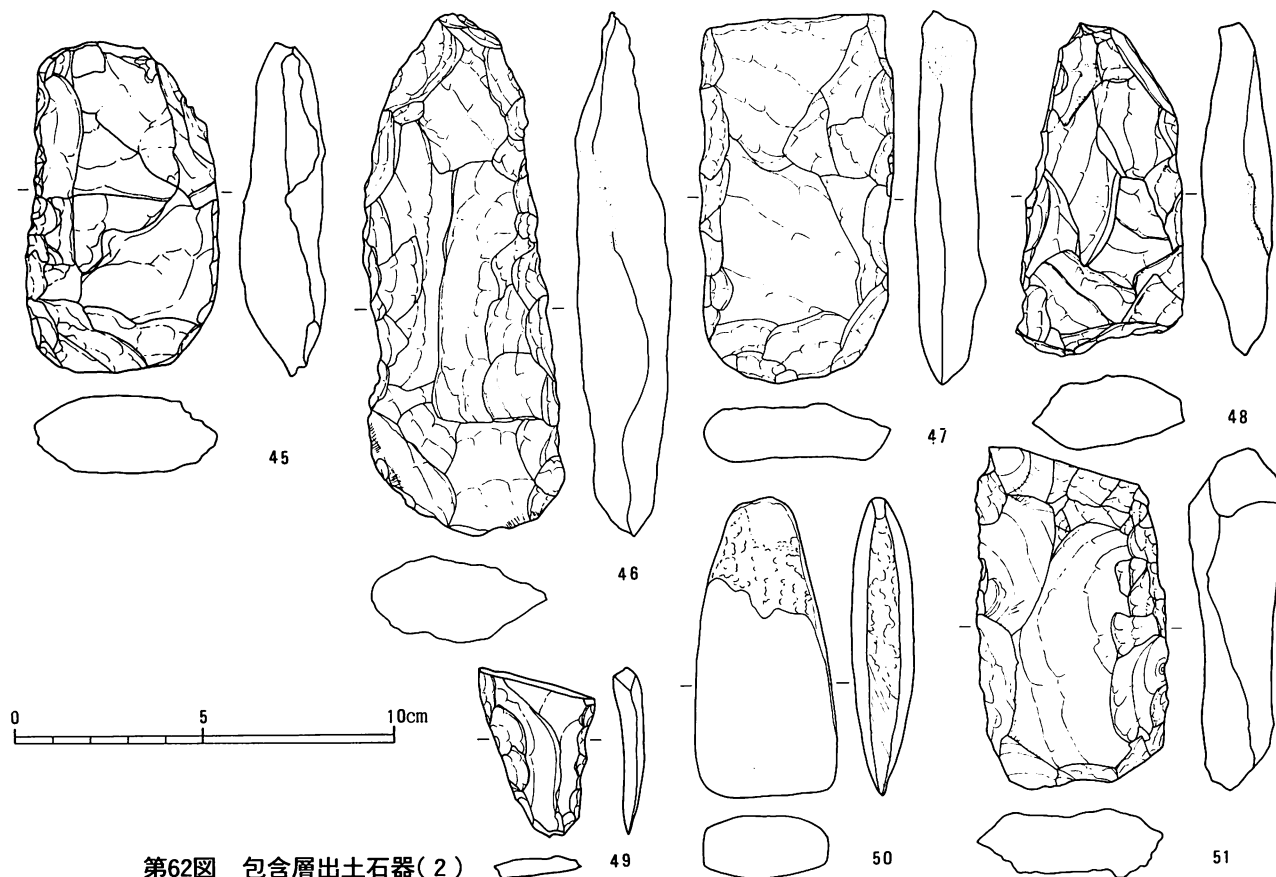
近・現代における石墨と類似するため、これらのものと混同しがちであるが、ここでは縄文時代前期に位置付けられる資料を紹介する。地域性としては、北陸地方（富山県周辺）における出土例が多く報告され（註1）、関東地方においても、中期後半以降ではその出土例が報告されている。

1はB-34グリッドより出土したもので、3.35×0.69×0.59cmを測る。図示した上部は欠失した状況が窺え、その反対側には使用痕が認められ、側面には線刻が施されている。断面形は楕円を呈する。

2はB-31グリッドより出土したもので、2.74×0.54cmを測る。両端に使用痕と考えられる面がみとめられ、断面形はほぼ円形を呈している。

3は第47号住居跡より出土したもので、1.94×0.42×0.28cmを測る。欠損したものと考えられるが、下部の使用痕ははっきりしない。断面形は楕円で、太さが異なる。 (野代)

（註1）藤田富士夫「パステル形石製品について」『考古学論究』創刊号、1991



第62図 包含層出土石器(2)

表4 包含出土石器観察表

※()は現存値

図番号	出土位置	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	石材	形態	備考
第61図1	A-28	石 鏃	(2.02)	(1.92)	0.46	1.2	黒曜石	無茎凹基	刃部・基部欠損
" 2	B-28	"	2.34	2.39	0.61	1.9	チャート	"	
" 3	B-30	"	1.72	1.69	0.47	1.1	"	無茎平基	
" 4	B-30	"	2.27	(1.18)	0.29	0.6	"	無茎凹基	基部欠損
" 5	B-30	"	2.33	(1.43)	0.41	0.8	"	"	"
" 6	B-32	"	(1.74)	1.57	0.3	0.5	"	無茎平基	刃部欠損
" 7	B-33	"	(2.27)	1.56	0.3	0.9	"	"	"
" 8	B-33	"	1.83	(1.50)	0.37	0.6	"	無茎凹基	基部欠損
" 9	B-35	"	(2.69)	(1.27)	0.36	0.8	"	不明	"
" 10	C-28	"	(1.29)	(1.08)	0.32	0.38	"	"	"
" 11	C-28	"	(1.28)	(1.47)	0.36	0.4	"	"	"
" 12	C-29	"	(2.03)	(1.41)	0.34	0.7	"	無茎凹基	刃部・基部欠損
" 13	C-29	"	(2.24)	1.9	0.42	1.7	チャート	"	刃部欠損
" 14	C-29	"	(1.74)	(1.17)	0.37	0.7	"	"	基部欠損
" 15	C-30	"	2.41	1.44	0.52	1.2	"	"	
" 16	C-30	"	1.49	(1.03)	0.25	0.2	"	"	基部欠損
" 17	C-30	"	2.36	(1.67)	0.29	0.6	"	"	"
" 18	C-30	"	2.40	1.34	0.52	1.4	"	無茎平基	
" 19	C-30	"	(2.03)	(1.41)	0.34	0.5	"	無茎凹基	刃部・基部欠損
" 20	C-30	"	(1.45)	1.66	0.25	0.6	"	無茎平基	刃部欠損
" 21	C-31	"	2.26	2.07	0.6	1.9	"	"	
" 22	C-31	"	2.39	(1.55)	0.46	1.1	"	無茎凹基	基部欠損
" 23	C-31	"	(2.02)	1.92	0.46	1.2	"	無茎平基	刃部欠損
" 24	C-31	"	(0.94)	1.72	0.29	0.6	"	"	"
" 25	C-32	"	2.29	1.63	0.39	0.9	"	無茎凹基	
" 26	C-32	"	2.17	1.67	0.67	2.1	"	無茎平基	
" 27	C-33	"	2.03	1.65	0.28	0.6	"	無茎凹基	
" 28	C-37	"	(1.5)	(1.10)	0.26	0.4	"	無茎平基	刃部・基部欠損
" 29	表採	"	(2.24)	2.2	0.42	1.5	"	無茎凹基	刃部欠損
" 30	"	"	2.32	(1.68)	0.3	0.7	"	"	基部欠損
" 31	"	"	1.69	(1.08)	0.32	0.3	"	"	"
" 32	B-27	直 剪 鏃	4.2	2.9	0.66	4.0	"		
" 33	C-27	石 匙	7.93	5.78	0.81	32.2	泥板岩		
" 34	C-30	"	3.5	3.88	0.85	1.98	チャート	横 型	
" 35	C-30	"	(2.83)	(3.54)	0.75	6.6	"	"	刃部・基部欠損
" 36	表採	"	1.69	(1.21)	0.42	0.7	黒曜石	"	
" 37	B-31	"	(3.01)	(1.49)	0.36	1.4	"	"	刃部欠損
" 38	B-36	"	3.5	1.55	0.79	3.4	"	縦 型	
" 39	A-38	石 錐	2.53	1.76	0.4	0.8	泥板岩		
" 40	C-27	"	3.42	1.93	0.71	2.8	黒曜石		
" 41	表採	"	2.99	1.05	0.57	1.4	"		
" 42	C-27	"	4.02	4.25	0.89	14.2	チャート		
" 43	A-27	スクレイパー	11	6.07	2.26	138.5	"		
" 44	B-33	石 錐	3.24	1.25	0.52	1.8	黒曜石		
" 45	A-26	打製石斧	8.58	4.89	2.10	119.3	泥板岩	短冊形	
" 46	B-34	"	13.63	5.01	2.22	179.3	安山岩	"	
" 47	B-36	"	9.72	5.00	1.72	134.3	"	"	
" 48	C-29	"	8.57	4.27	1.78	82.1	泥板岩	"	
" 49	C-33	剥片石器	4.54	3.14	0.70	9.5	"		
" 50	B-34	磨製石斧	7.82	3.76	1.52	81.4	輝緑岩	短冊形	
" 51	A-28	打製石斧	9.04	4.88	2.50	136.1	泥板岩		

第Ⅳ章 総括

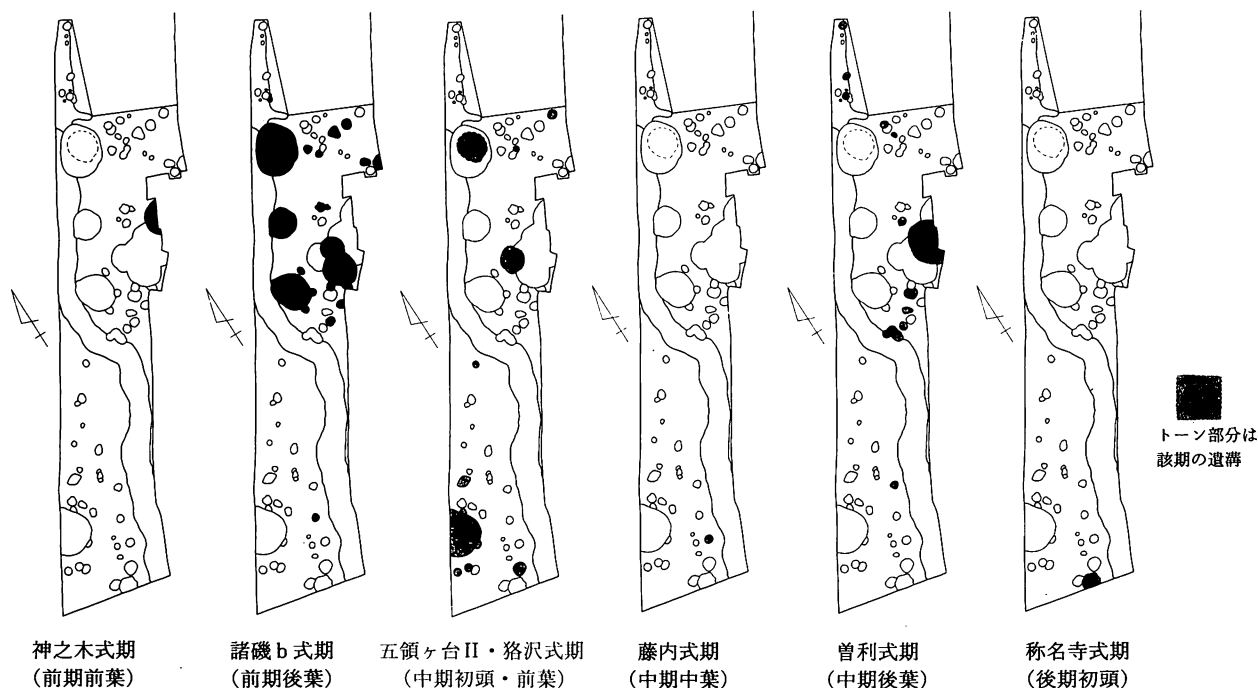
第1節 縄文時代の遺構変遷

第63図に示したものが、本調査区における縄文時代の時期別の遺構推移である。本調査区では、前述のように前期前半～後期初頭段階に至る遺構が存在する。全体的に遺構の密度は、それほど濃くはない。第1次から第4次にわたる調査で、主に中期中葉に位置付けられる環状に展開するであろう集落が、本区を挟んで両サイドに存在し、位置的に興味深い地点であったが、その空白地帯からは前期後半や中期初頭といった時間的な継続性を考える上で、納得いく時期の遺構が姿を表したのである。

次に遺構の推移について延べるが、全体的には調査区中央付近に遺構が集中する傾向がある。人類の生活痕が初めて認められる前期の遺構は調査区北側部分に集中し、前葉の神之木式期では住居跡のみ、後葉の諸磯b式期では河川跡を挟んで北側部分に住居跡と土坑が混在している。該期の場合まとまって存在する遺構の在り方を示すが、同時期の遺跡でもこれほどの密で存在するケースはとて少ないように感じられる、そういった意味では貴重な例を提示してくれた。続いて中期では調査区ほぼ全域にわたって分布を示すようになり、初頭段階の五領ヶ台・貉沢式期では前述のような展開を示すが、前者では調査区南側に住居跡を囲むようにして同時期の土坑がまとまって分布する。後者では北側部分に住居跡と土坑が散在する。どちらにしても密集する事なく分散型の集落構成をしている。続いて中葉の藤内式期では、土坑が1基だけが南側に存在するのみになってしまう。つづいて後葉の曾利式期では、調査区中央付近の住居跡を中心にして土坑が北側に集中して分布し、I期では土坑3基、II期では土坑2基、III基では土坑2基、IV期では土坑4基、V期では住居跡2基と推移する。そして後期では、調査区南端に存在するのみであるが、ここで発見された遺構は初頭段階称名寺式期の大型の土坑が1基のみで、住居跡は存在しなかった。

このように甲ッ原遺跡における縄文人の定着は、本調査区の北側に隣接した部分で前期初頭の住居跡が存在するため、該期より開始されたものと考えられるが、本調査区においては前述のように前期神之木式を初現として諸磯b式、中期五領ヶ台II式・貉沢式を経た直後から定住を示す住居跡の存在が認められなくなり、再び曾利式期で住居跡が存在するようにはなるものの、以後は後期初頭に土坑が見られるだけまで衰退し、やがて姿が見えなくなってしまうのである。

(野代)



第63図 遺構変遷図

第2節 彩色土器

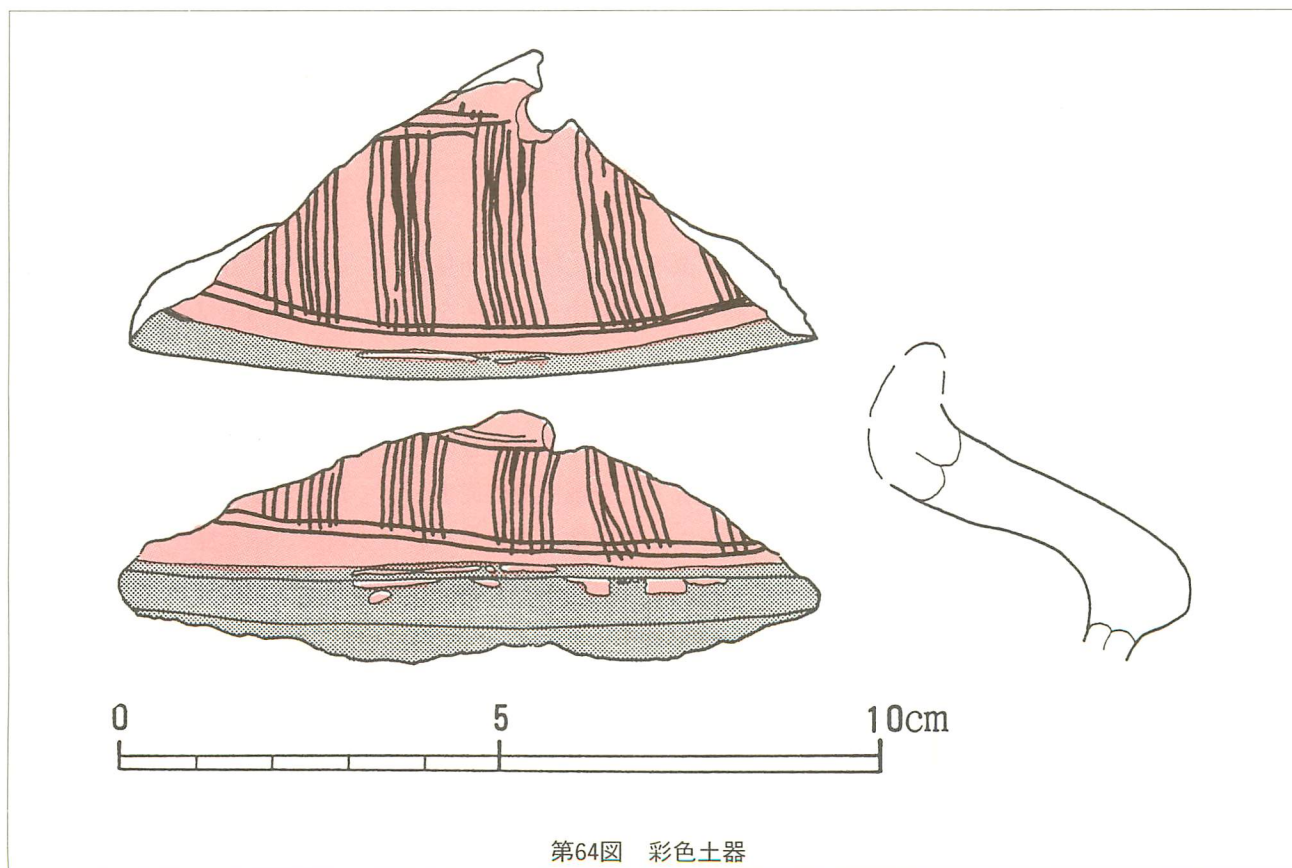
これは、諸磯b式期の住居跡群に囲まれた第46号住居跡より出土したもの（第64図）で、残念ながら直接遺構に伴うものではない。

ここに示したものは、ベンガラ（酸化鉄）を混ぜた赤漆や油煙などを混ぜたと考えられる黒漆を用いて土器の表面に文様を描いたものである。器形は諸磯期特有の有孔浅鉢形土器の口肩部分で、破片の大きさは約4×9cmを測る。文様は他の出土例から一般的に眼球状、渦巻状、帯状、方形や三角形を線で表現しているようであるが、本資料の場合は外面の地に赤漆を塗布し、筆状の工具を用いて細く長い集合線（7～8本）を黒漆によって放射状に文様を、またこれに対して直角方向に2～3本を単位とする平行線を描き出している。また胴部の《く》の字におれる部分には帯状に黒漆が塗られており、内面には部分的に赤漆が付着している。完形当時に器を上から見たならば、全面真っ赤な地に黒の縁取りがされ、その中は集合線が放射状に展開していた様子が想定され、従来の縄文土器のイメージを一新するものであったであろう。

塗布技術的には、普通一般的な場合土器焼成後に塗布する例が多く知られているが、本資料の場合には焼き付け塗布といった技法が用いられたので、器面が熱い段階で漆を塗り込んだため密着しており、このため剥がれ落ちる事なく、低湿地などといった立地でなく普通の台地に占地する遺跡でありながら、良好な遺存状態を保つことができたのであろう。時期的には前期末葉の諸磯c式の直前段階に比定されよう。本資料と類似した資料は、県内では大泉村天神遺跡。県外では山形県押出遺跡、福井県鳥浜貝塚、長野県阿久遺跡などといった日本海沿岸部から中部高地を中心とした地域で主に発見されているようである。本資料の場合特に良好なもので、遺存状態、施文方法、塗布技術においては、鳥浜貝塚で出土したものに極めて近似しているように思われる。

本県の場合、前述のとおり天神遺跡での出土例が知られているが、甲ッ原遺跡とは約1kmしか離れておらず興味深いものである。また時同じくして本調査区の隣接部分を村教委が宅地造成に伴って調査を行っていた部分でも、やはり破片資料であるが1点出土している。このように本遺跡周辺からは同様の資料の出土例が知られており、八ヶ岳一帯からは今後の調査の進行によってさらに資料が増加していくものと考えられる。ここで記しておくが、県内外において前期後半の遺跡として著名な御坂町の花鳥山遺跡では、同様の資料の出土は皆無である。こういった地域性も踏まえて、分布の広がりや技法、技術に関する分析をとおして中部高地に栄えた漆文化と生業活動の解明が大きな課題である。

（野代）



第V章 まとめ

甲ッ原遺跡の発掘調査は、一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に先立って、1989年度から1993年度まで調査が行われ、約8,000㎡の調査が終了しており、今後もさらに継続される予定である。

今回の報告は、1993年度第5次調査を報告書としてまとめたもので、調査面積は1,000㎡と狭いながらも、そこから発見された遺構・出土した遺物はとても豊富なものがあった。

まず遺構については、縄文時代前期神之木式諸磯b式期が6軒、五領ヶ台式期1軒、貉沢式期2軒、曾利V式期2軒の計11軒が調査され、土坑およびピットは72基、平安時代以降と考えられている旧河道が発見された。住居跡については、第41号住居跡は極めて特異な例で、規模・形態ともにしっかりしたものであり、周辺には該期に属する土坑が集中している。また土坑については第227号土坑の存在で、中期末葉から後期初頭段階に位置づけられるものが発見され、道路によって約半分は調査できなかったものの、その出土遺物は多量であった。特に坑底から約30cm上で欠損した石棒の出土があり、石棒による祭祀の終了後の姿とも受け取れるような例ともいえそうである。

また本遺跡内において、曾利期の住居跡と同期の土坑がつけられたと思われる時期にずれが生じている。土坑は曾利I式期からIV式期まで確認され、本遺跡内では住居跡は曾利V式期の1軒が調査されただけである。しかし周辺、特に本遺跡の道路をはさんだ西側では、1993年度に大泉村教育委員会が調査を行った「甲ッ原遺跡第6地点」（伊藤公明 1994 『甲ッ原遺跡 第6地点・第7地点』 大泉村埋蔵文化財調査報告書 10集）では、縄文時代前期諸磯b式期・中期藤内から井戸尻式期・曾利II式期・中期後葉の住居跡が発見されていることから、まだ未調査部分に土坑のずれを生じた時期の住居跡が存在している可能性が考えられる。

集落については、本遺跡で住居跡が散漫になっていること、そして第6遺跡の住居跡の存在から、A区の環状を呈すると思われる集落の範囲がおぼろげながら見えてきたように思われる。

出土遺物として特筆されるものでは、日本海沿岸部から中部高地にかけての地域で発見されている彩色土器（赤漆や黒漆を顔料として土器の表面に描いたもの）の破片がある。この土器片は極めて良好な状態であり、彩られた文様がまったく剝離せずに認められた。1989年度から1993年度までの調査において、このような良好な資料の出土例はなく、また同一個体をなす土器片の出土は認められていない。周辺遺跡において、彩色土器片の出土は確認されているが、今回出土したような良好な状態として発見されてはいない。この彩色土器が甲ッ原遺跡で一個体として存在していたものか、破片として存在していたのかは不明であるが、大変貴重な資料であるといえる。

ほかには黒曜石製の直剪鏃、ドングリ・クルミ・栗等の炭化種子が発見され、これらのものが縄文時代前期後半の諸磯b式期に位置付けられるもので、他地域との交流関係や食生活を考える上で県内では勿論のこと、全国的にも貴重な資料を提供するに至ったものと考えられる。

甲ッ原遺跡は第5次調査を終了し、今後も継続される予定である。現在、第1次調査から第4次調査までの整理を進行しており、随時報告する予定ですが、今回ここで第1回目の報告書を作成する運びとなりました。

尚末筆となりましたが、第1次調査から第5次調査まで発掘作業に従事してくださいました方々、そして整理にあたって下さいました方々に御礼を申し上げるとともに、地元の大泉村教育委員会、国立歴史民俗博物館の永島正春氏、富山市教育委員会の藤田富士夫氏、奈良県立橿原考古学研究所の室賀照子氏、関係諸機関の方々には多大なるご協力・ご指導を賜わったことを厚く感謝申し上げます。 (山本)

附編

甲ッ原遺跡出土の炭化種実

吉川純子（パレオ・ラボ）

1. 炭化種実の同定結果と若干の考察

甲ッ原遺跡より採取された試料は、すべて炭化した種実で、47住の番号無し試料以外は堆積物中から拾い出された状態であった。なお、47住の番号無し試料は炭化種実のほかに木材片や砂礫を含むことから、飾別された状態のままである。出土した分類群の種類名と、出土部位、個数を表1に示す。

出土種実では、クヌギ、オニグルミが多く、ほかには、コムギ近似類、キハダ、堅果類を出土した。出土状況や時代は不明であるが、炭化種実として残り易いのは、熱を受けても激しい燃焼が起こりにくく、木材と類似した成分をもつ種類や部位があげられる。試料の中では、オニグルミ、キハダがこれに当たる。また、果実の皮が比較的硬く、種子が比較的大きな塊となっているものは、内部が炭化し易い。クヌギ、コナラ属、堅果類がこれである。外部はかなり燃焼したようで、果皮は剥がれてしまい、残っていない。なお、ムギなどの軟らかく、脂肪や、炭水化物の多い、果皮の薄い果実は直接炎を受けないような、特殊な状況下でないと燃焼してしまい、炭化種実として残るのは稀である。

2. 炭化種実の形態記載

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.) の核は、完形では3 cm前後の卵形で先端が尖っている。核壁は緻密で硬く、縦に2本の縫線があり、表面には不規則でゆるい凹凸と、浅く細かい筋が走る。内部は、大きく4室ほどに分かれ、中の仁は脂肪に富み、食用とされる。表面の特徴と、壁の構造が特殊なため、かなり小さな破片となっても同定が可能である。木材の破片とは、表面の構造のほか、曲面があること、断面に導管などの組織が認められないことで区別する。

クヌギ (*Quercus acutissima* Carruth.) の種子は、ほぼ球形で、縦に浅い筋が多数走る。ここで出土している種子はやや小さい。材は現在でも炭用として利用され、種子はかつてあく抜きの後食用として利用された。

コナラ属 (*Quercus* sp.) は、半分以下の破片になってしまった産状であるが、内部構造や表面がコナラ属の種子の特徴をもっているものをさす。

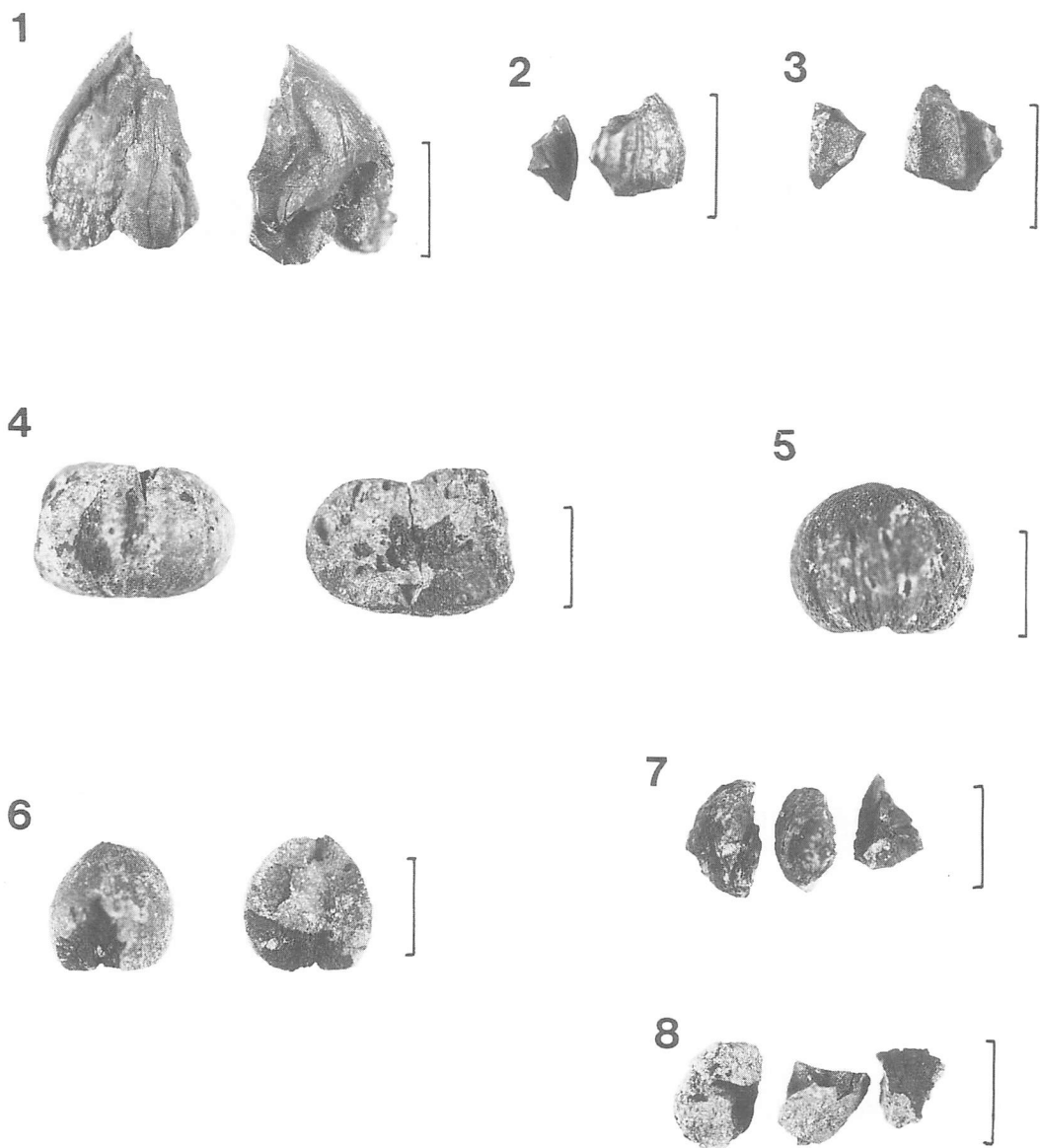
堅果の種子破片は、コナラ属が炭化したときにみられるような中心に収束するような構造がみられず、全体にやや緻密である。割れ方も不規則、トチノキの炭化した種子の破片に似るが、破片が小さいため、特定できない。

キハダ (*Phellodendron amurense* Rupr.) の種子は扁平な舟形で、表面には細かい網目模様がある。現在でも樹皮を薬用としているほか、かつては染料として用いられた。

コムギ近似種 (cf. *Triticum* sp.) は、腹面に1本の溝と背面にへそがある。長さは3.3 mmでかなり小さい。

表1 甲ッ原遺跡炭化種実一覧表 (分類群名, 部位, 個数: +は小さな破片を示す)

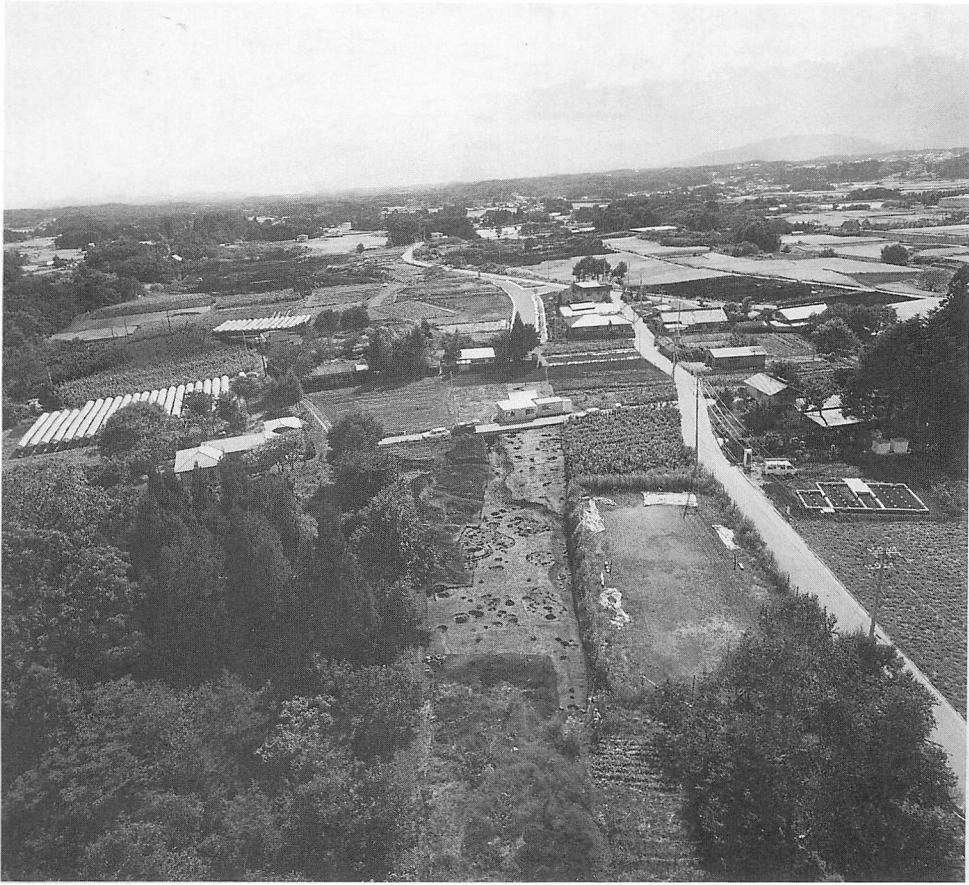
42住ピット1	コナラ属、種子破片、1	47住C-7	オニグルミ、核破片、2
43住	オニグルミ、核破片、2	3	コナラ属、種子破片、5
46住A区C-1	クヌギ、種子半分、1	4	クヌギ、種子破片、1
47住A区C-2	オニグルミ、核破片、11	5	クヌギ、種子破片、1
A区C-11	クヌギ、種子半分、2、種子破片、2	番号無し	オニグルミ、核破片、136
B区C-8	クヌギ、種子破片、1		キハダ、種子、2
B区C-10	クヌギ、種子破片、1		コムギ近似類、果実、1
ベルトC-12	オニグルミ、核破片、21	48住	コナラ属、種子破片、1
ベルトC-13	コナラ属、種子破片、3	A区186	堅果類、種子破片、4+
ベルトC-14	オニグルミ、核破片、6	267土	クヌギ、種子半分、1
ベルトC-15	オニグルミ、核破片、4		コナラ属、種子破片、3
北	クヌギ、種子半分、3	272土	クヌギ、種子半分、1、種子破片、1
	コナラ属、種子破片、3		コナラ属、種子破片、30+
南C-9	オニグルミ、核破片、2	275土	クヌギ、種子破片、4
C-6	クヌギ、種子破片、2		コナラ属、種子破片、3+



図版 甲ッ原遺跡出土の炭化種実 (スケールは1 cm)

1. オニグルミ、核破片、表裏 (47住C-7) 2. オニグルミ、核破片、表 (43住) 3. オニグルミ、核破片、裏 (43住) 4. クヌギ、種子半分、表裏 (267土) 5. クヌギ、種子半分、表 (272土) 6. コナラ属、種子破片、表裏 (42住ピット1) 7. コナラ属、種子破片 (267土) 8. 堅果、種子破片 (A区186土)

版 图



遺跡全景（北から南を望む）



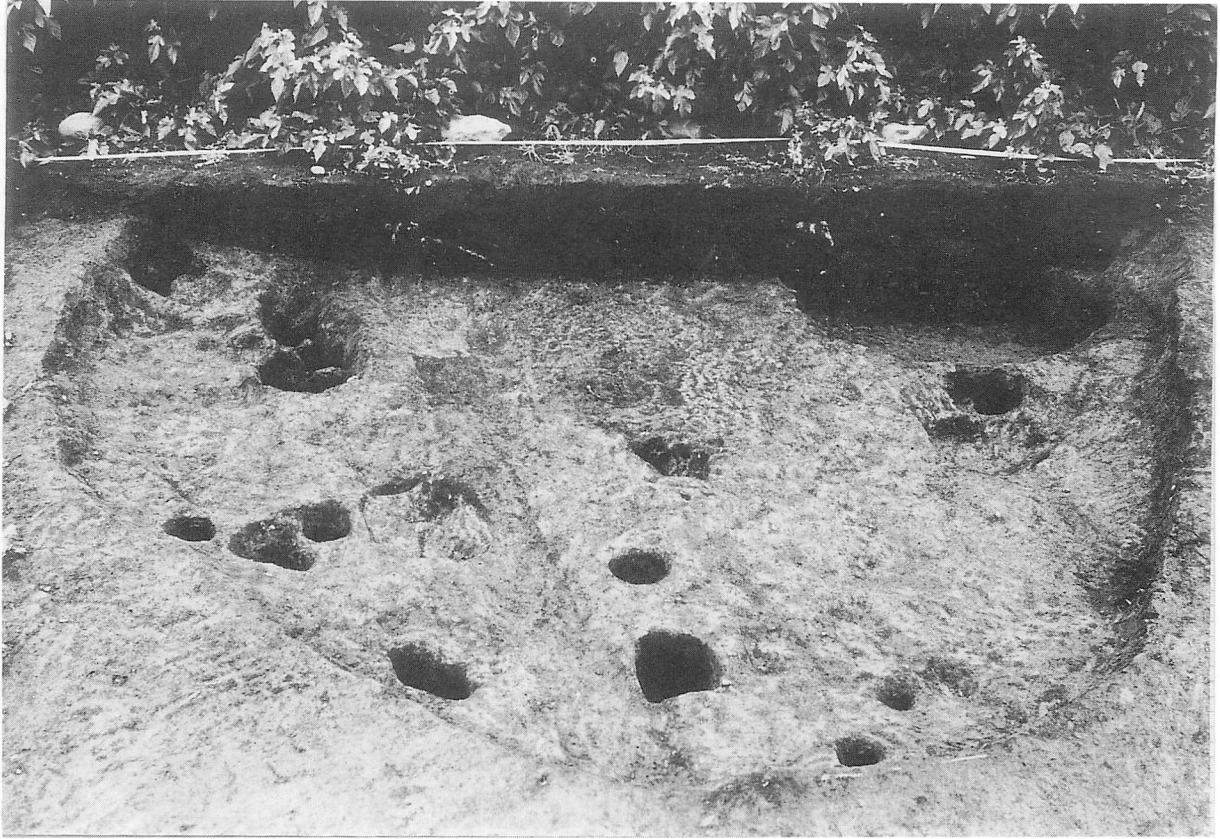
遺跡全景（上空より）



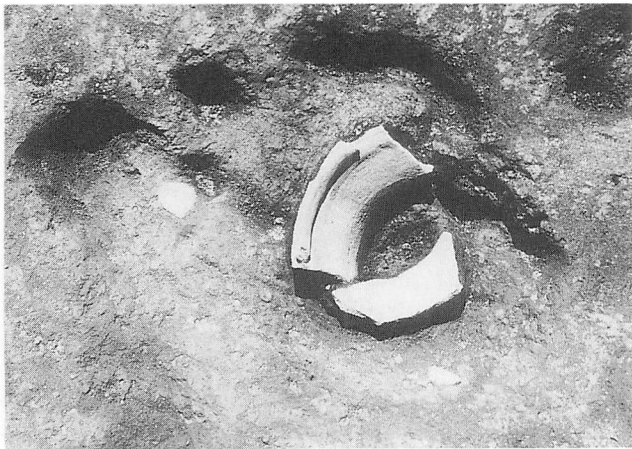
完掘状況（北側から）



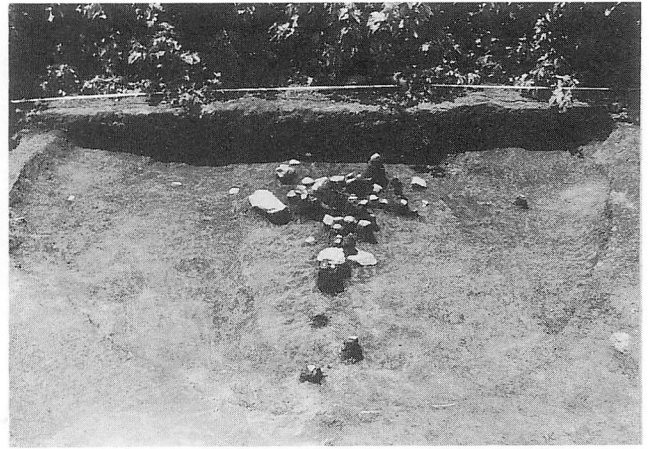
確認状況（南側から）



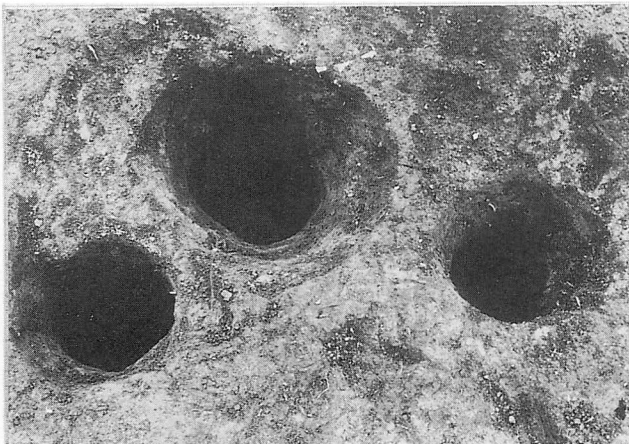
第41号住居跡 完掘状況



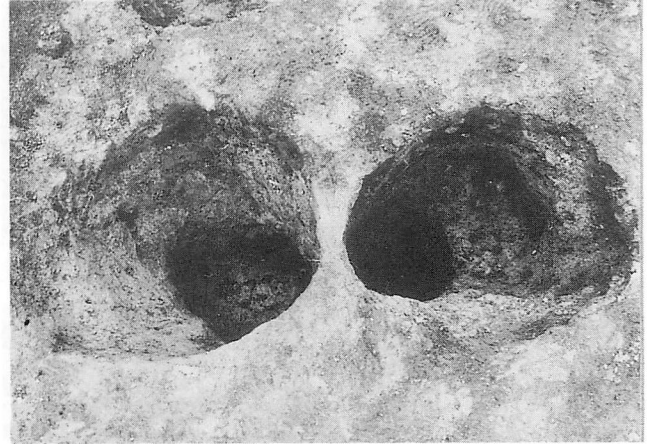
第41号住居跡 炉遺物出土状況



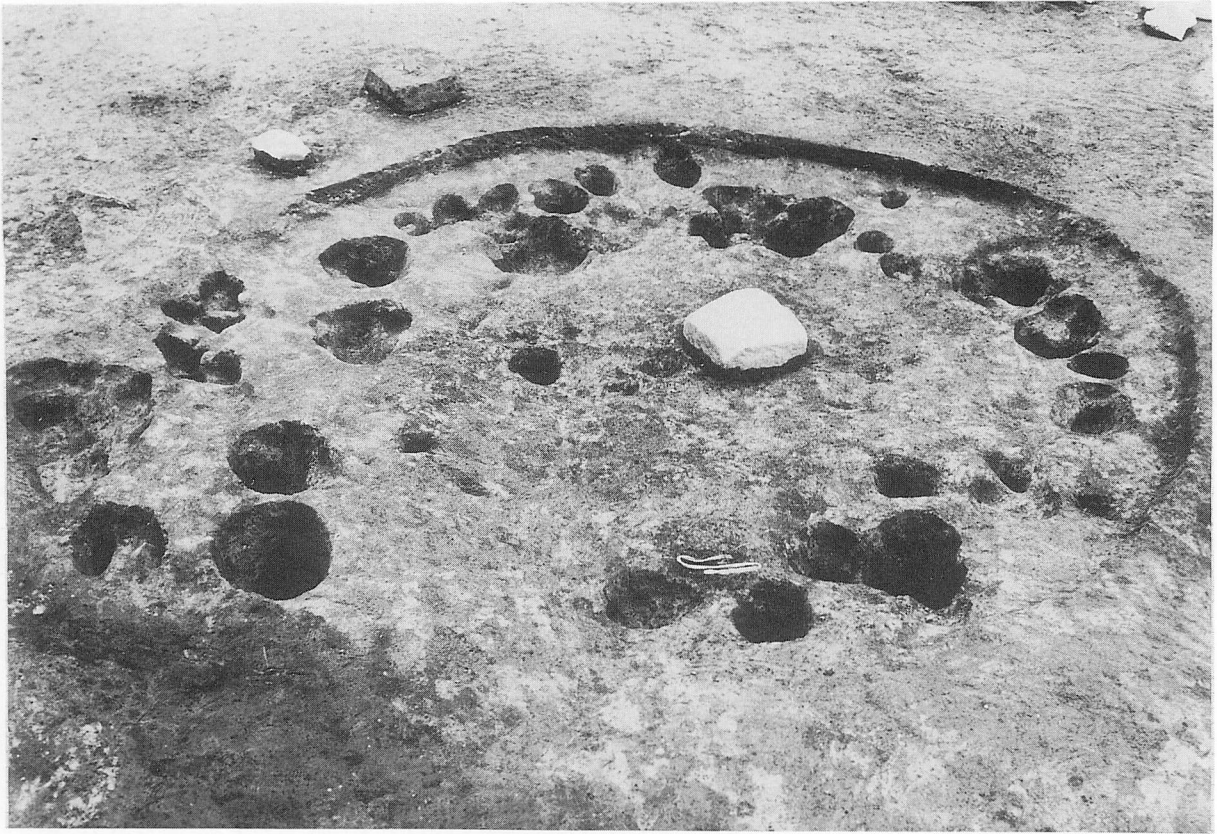
第41号住居跡 遺物出土状況



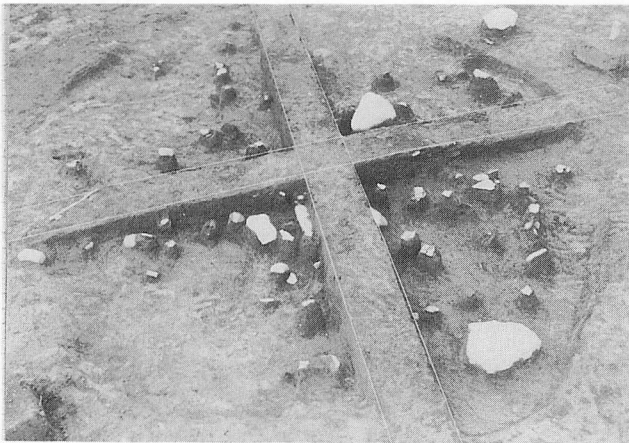
第41号住居跡ピット



第41号住居跡ピット



第42号住居跡 完掘状況



第42号住居跡 土層断面



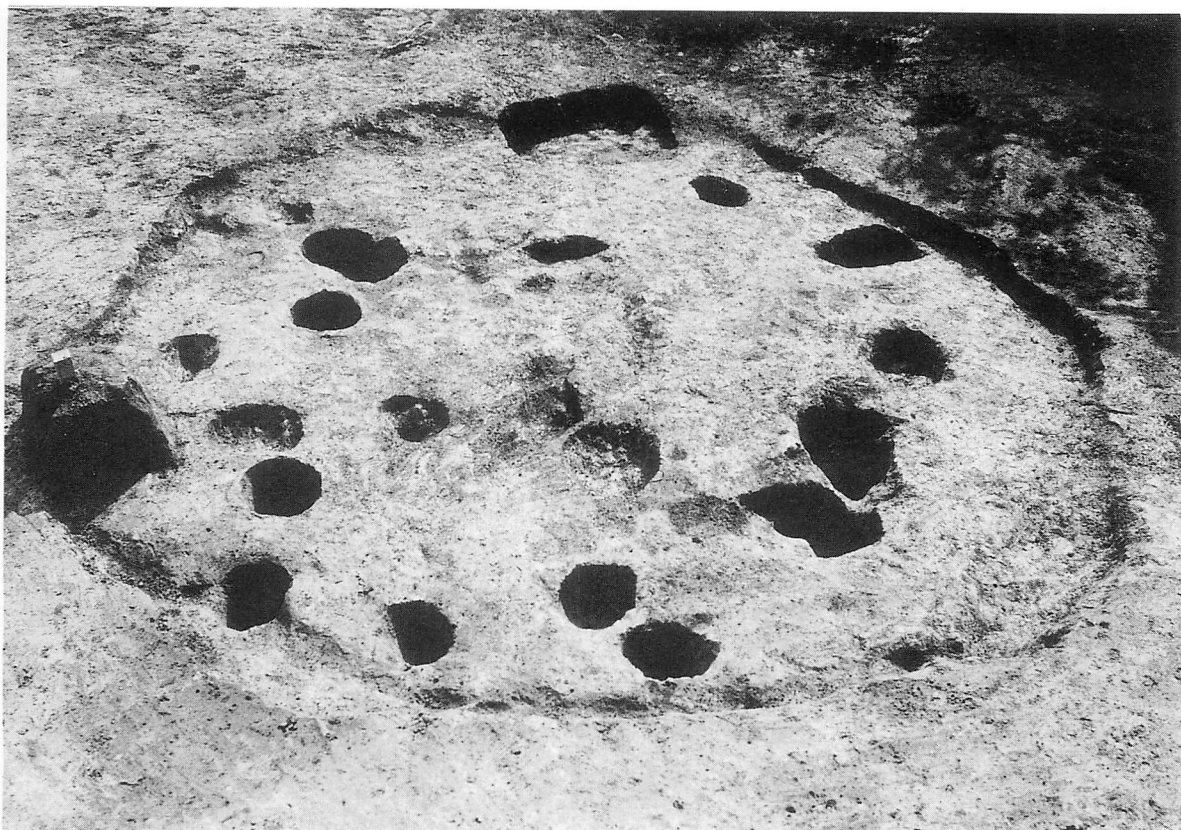
第43号住居跡 遺物出土状況



調査状況



第43号住居跡 遺物出土状況



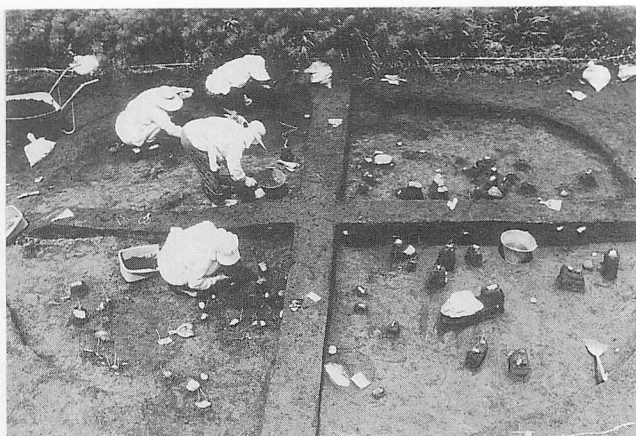
第43号住居跡 完掘状況



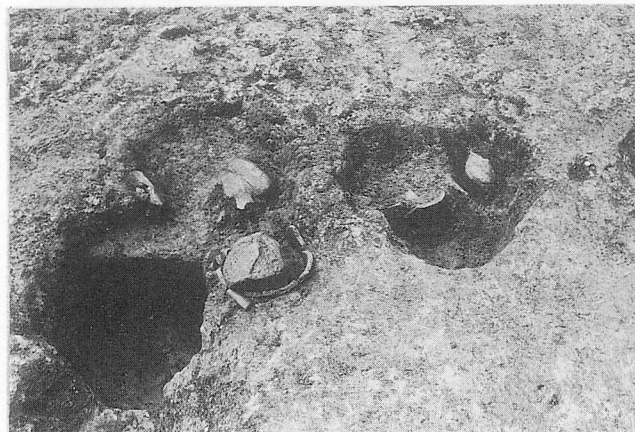
第44号住居跡 完掘状況



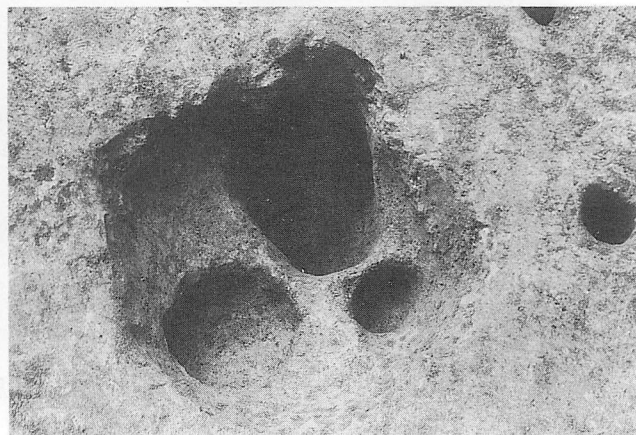
第44号住居跡 遺物出土状況



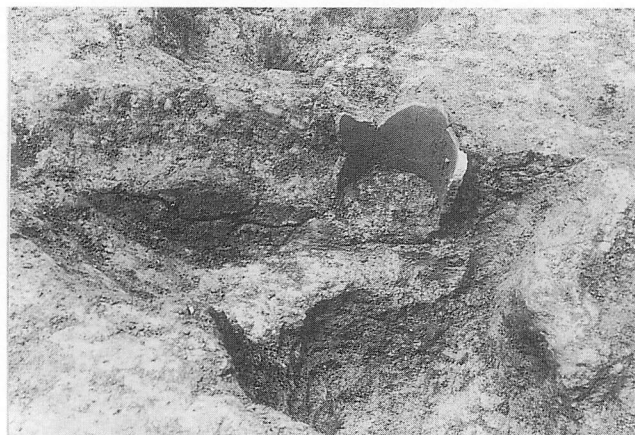
調査状況



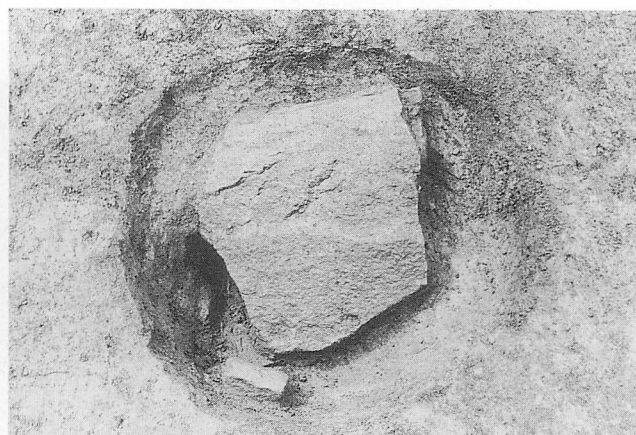
第44号住居跡 炉遺物出土状況



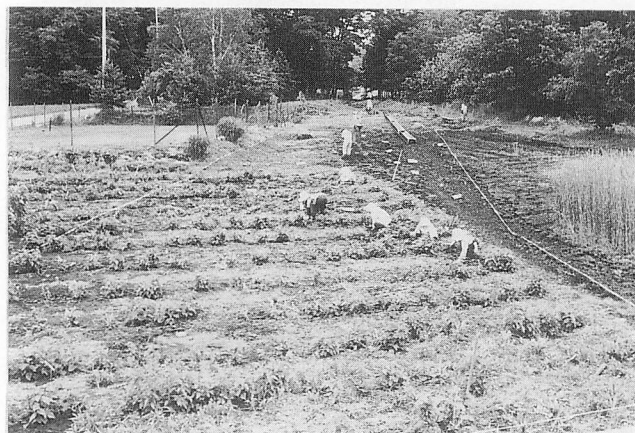
第44号住居跡ピット



第44号住居跡 炉遺物出土状況



第44号住居跡ピット



調査状況



調査状況



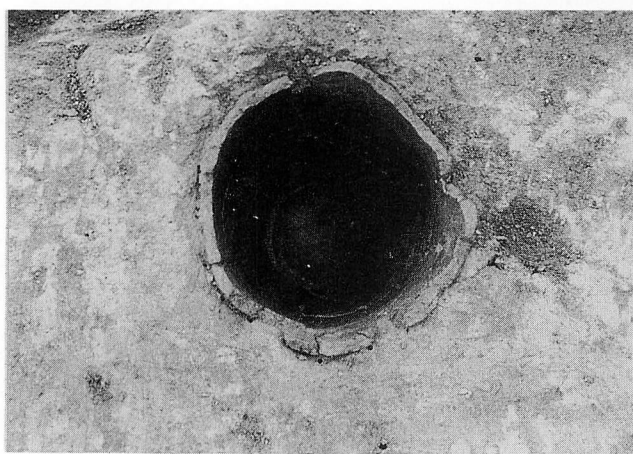
第45・46・47・48・49号住居跡实施状况



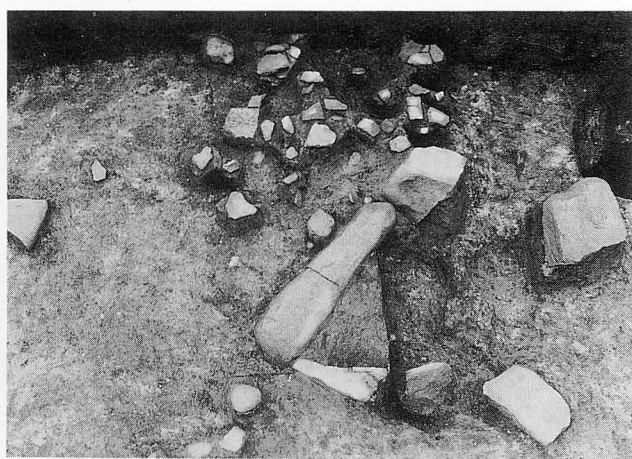
第48号住居跡实施状况



第45・45'号住居跡完掘狀況



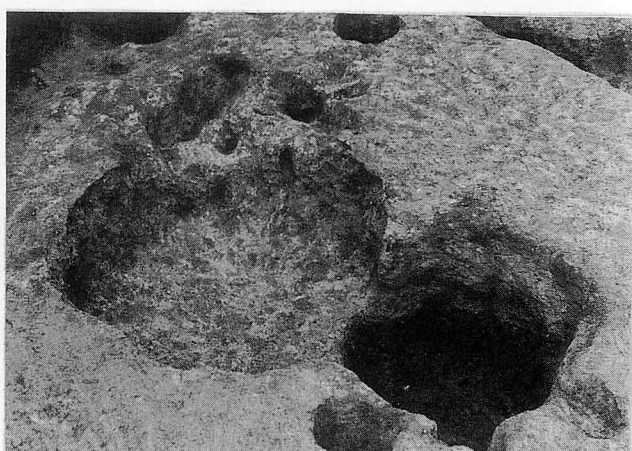
第45号住居跡 炉遺物出土狀況



第45号住居跡 埋甕出土狀況



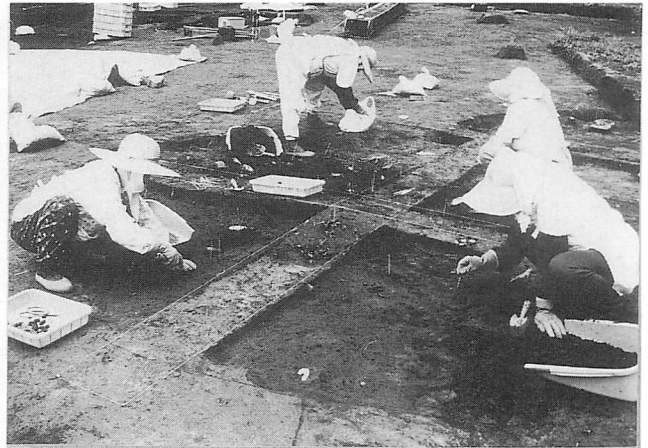
第45号住居跡 土坑



第45号住居跡 土坑



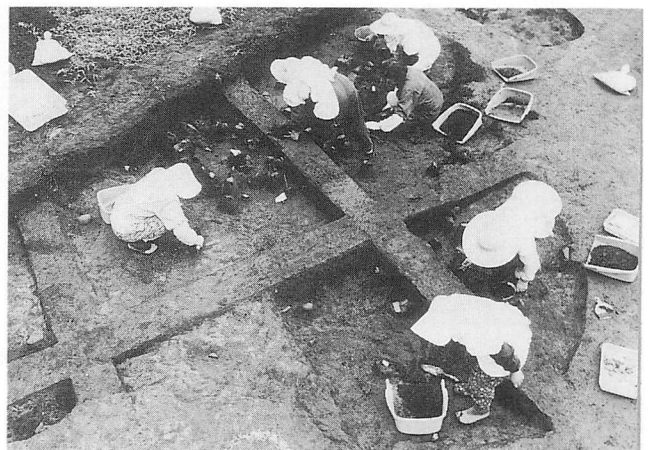
第45'号住居跡 埋甕



調査状況



第46号住居跡 炉遺物出土状況



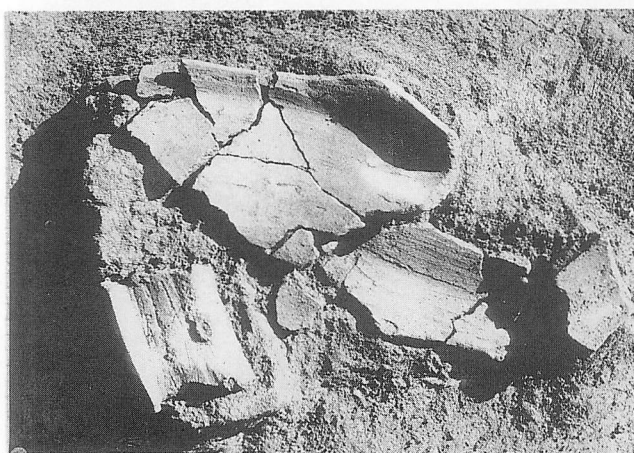
調査状況



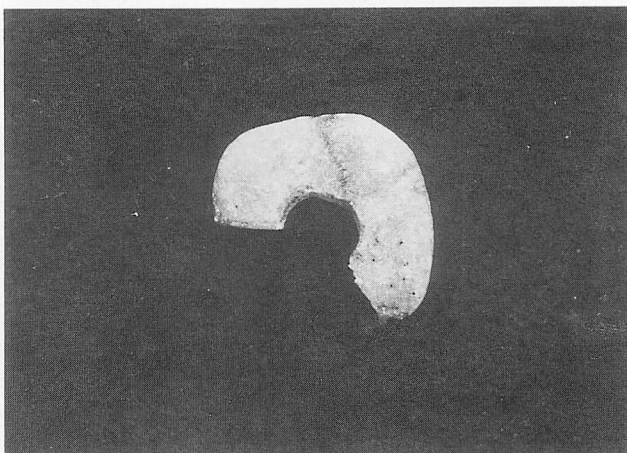
第46住居跡 完掘状況



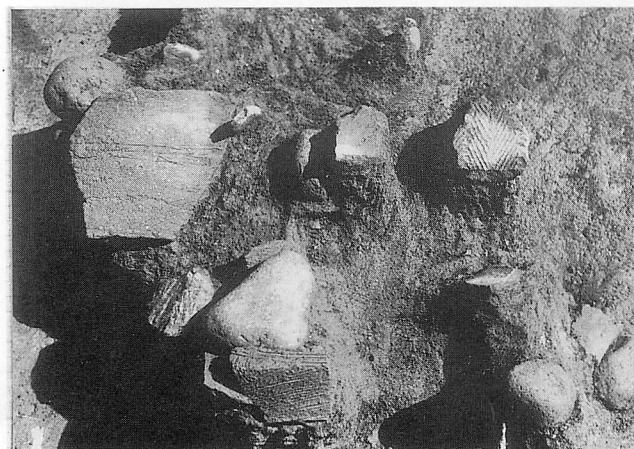
第47号住居跡 完掘狀況



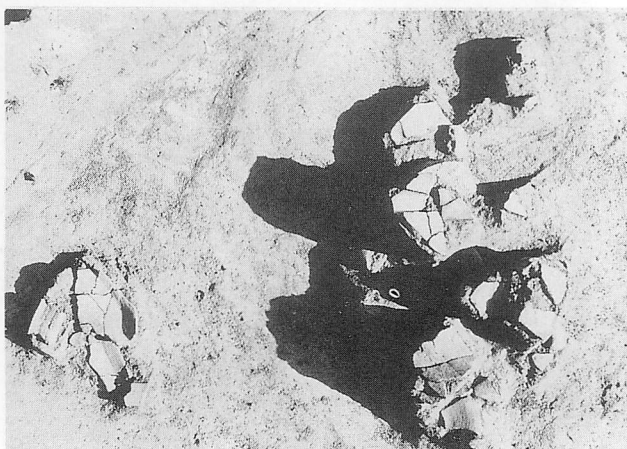
第47号住居跡 遺物出土狀況



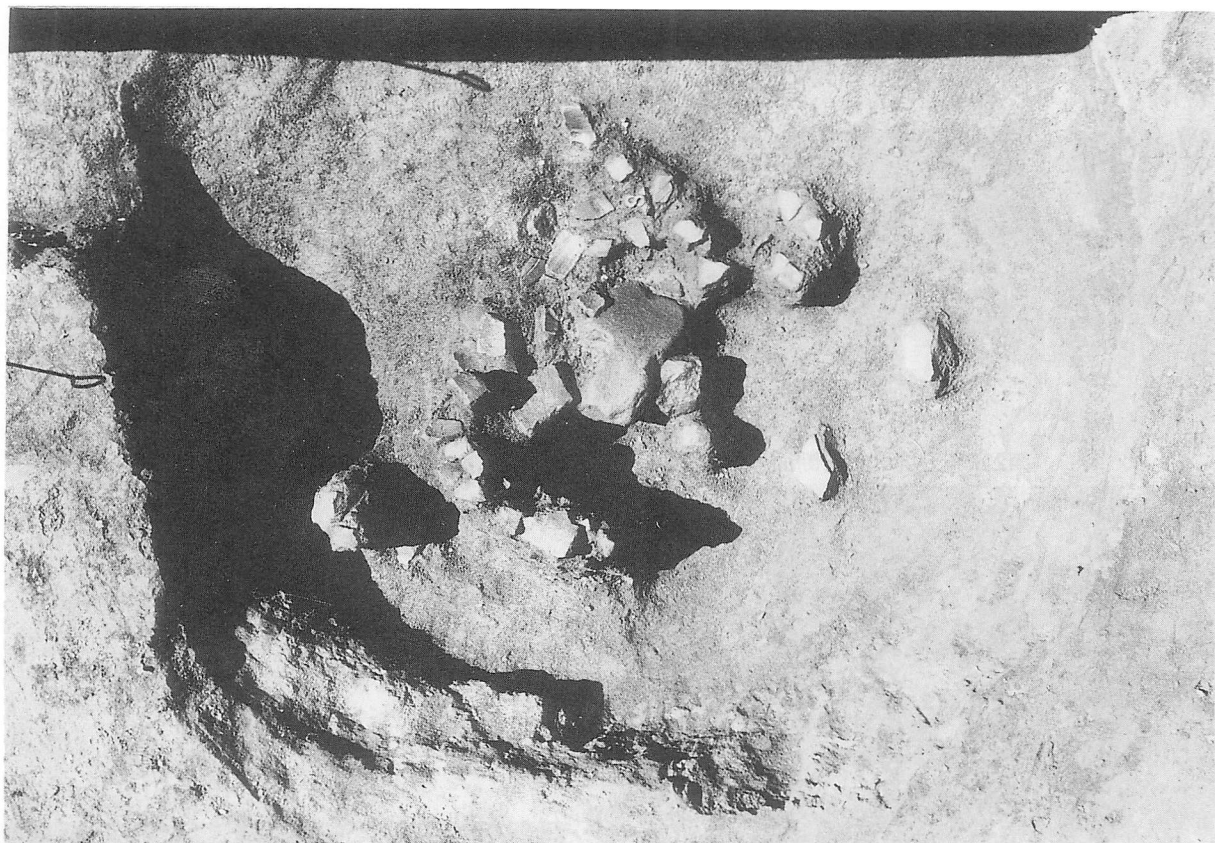
第47号住居跡 遺物出土狀況



第47号住居跡 遺物出土狀況



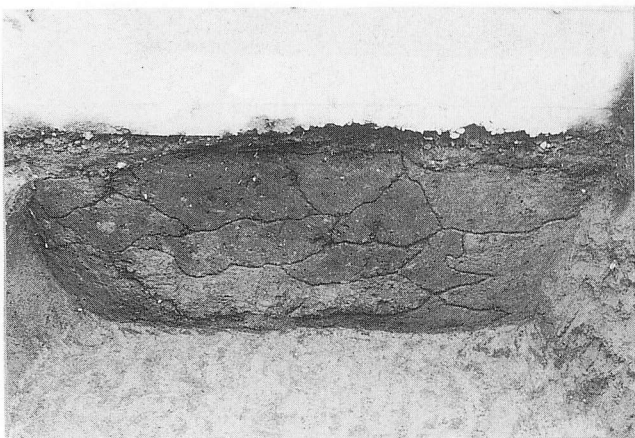
第47号住居跡 遺物出土狀況



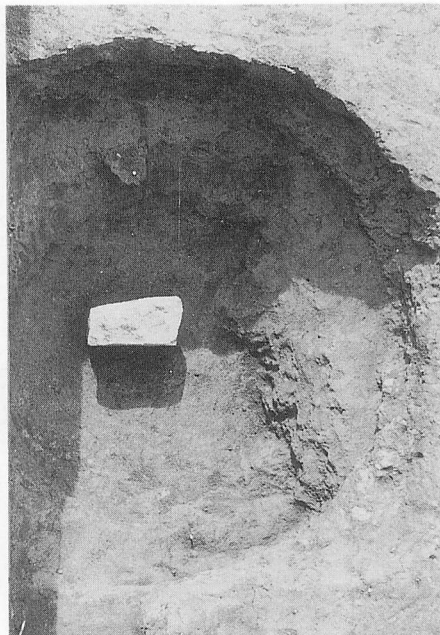
第227号土坑 遺物出土狀況



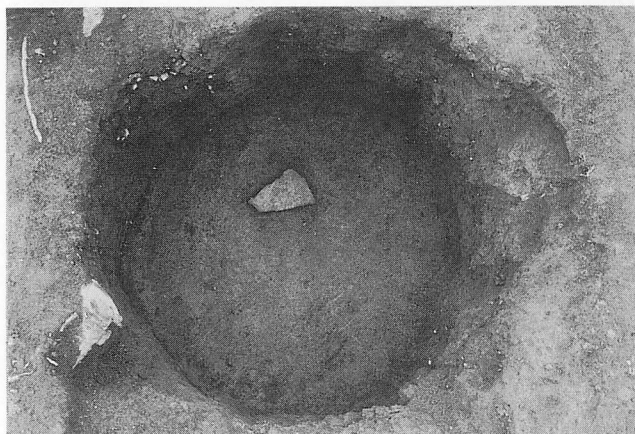
第227号土坑 完掘狀況



第227号土坑 土层断面



第227号土坑 石棒出土状况



第230号土坑



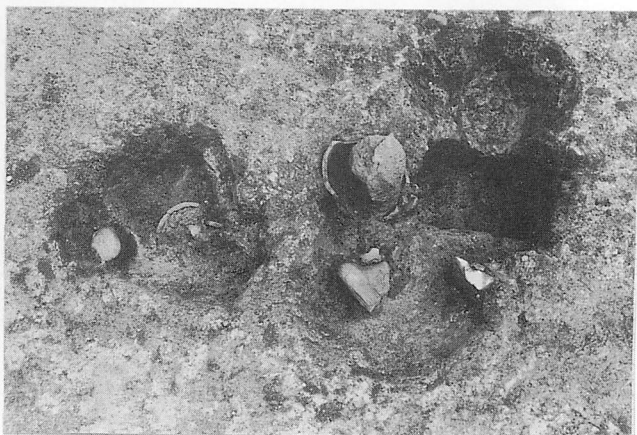
第233号、232号土坑



第238号土坑



第248号土坑 遺物出土状况



第251号土坑 遺物出土状况



第255号土坑 遺物出土状况



第255号土坑 遺物出土状况



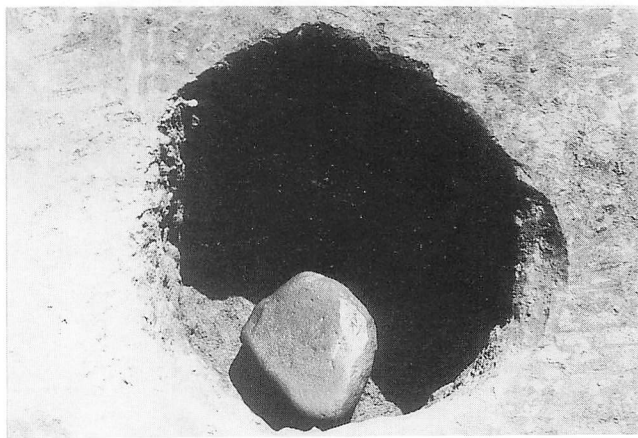
第258号土坑



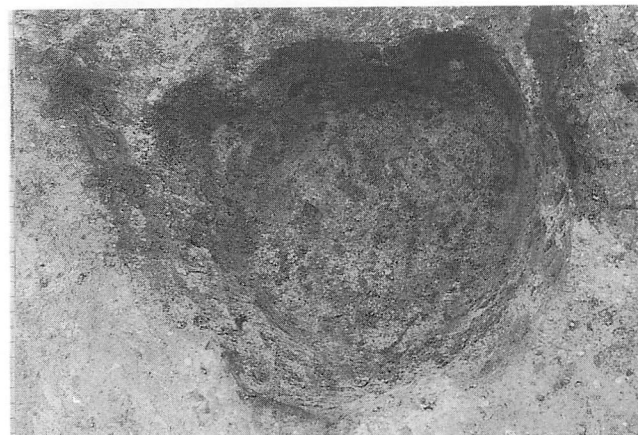
第258号土坑



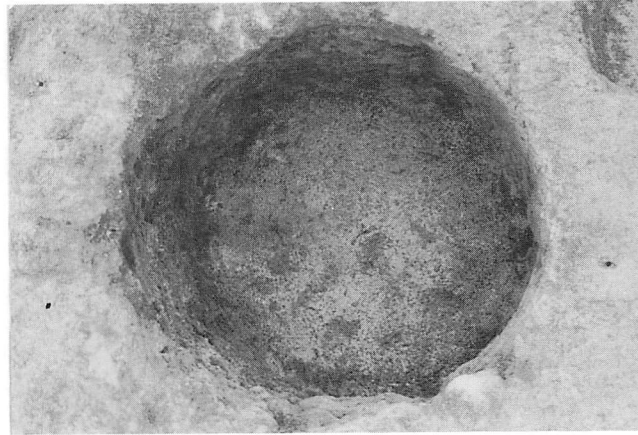
第272号土坑 遺物出土状况



第272号土坑



第269号土坑



第279号土坑



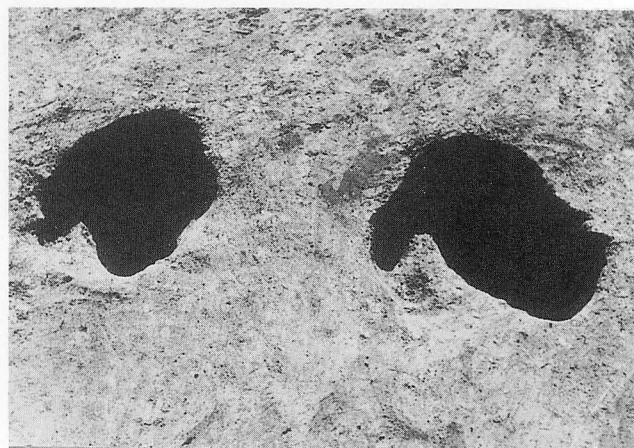
第281号土坑



第281号土坑



第281号土坑



B-28グリッド ピット



調査状況



溝



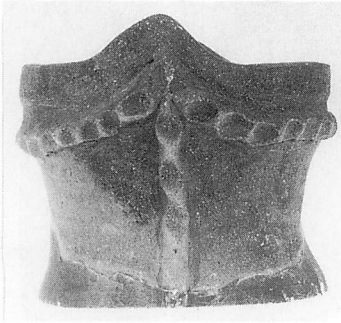
前期諸磯b式土器
(第272号土坑出土)



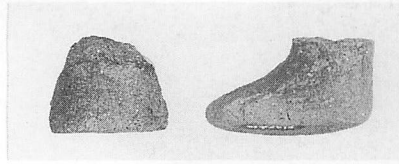
中期貉沢式土器
(第44'号住居跡出土)



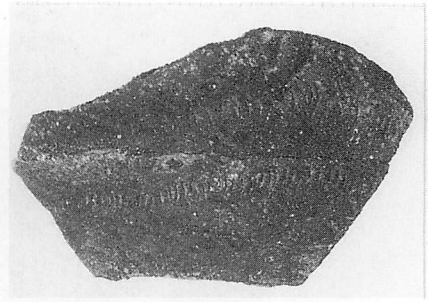
中期貉沢式土器
(第44'号住居跡出土)



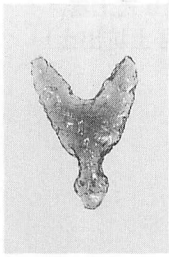
中期井戸尻式土器
(包含層出土)



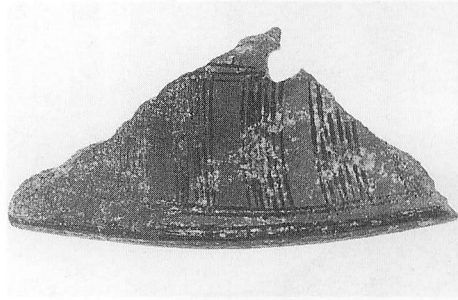
土偶



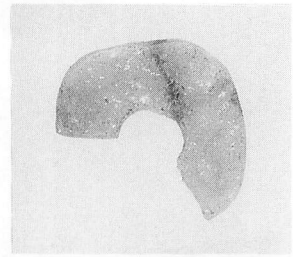
前期北白川下層式土器
(包含層出土)



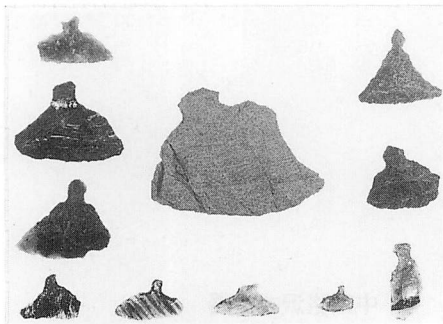
直剪鋸



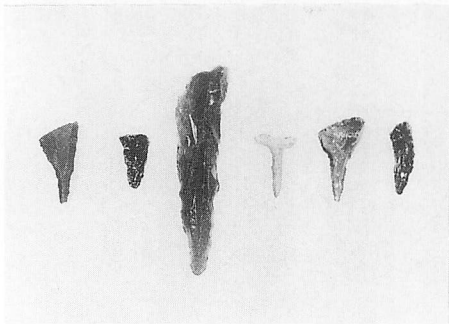
彩色土器



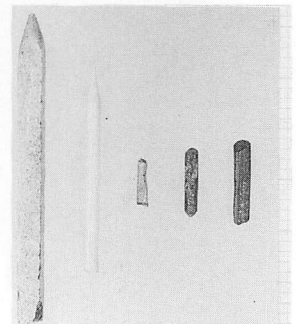
玦状耳飾



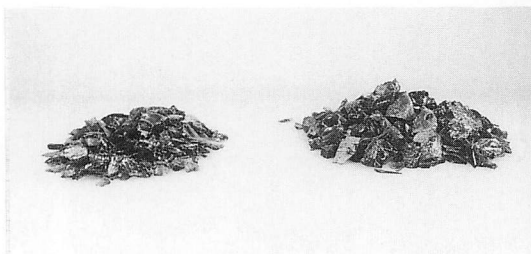
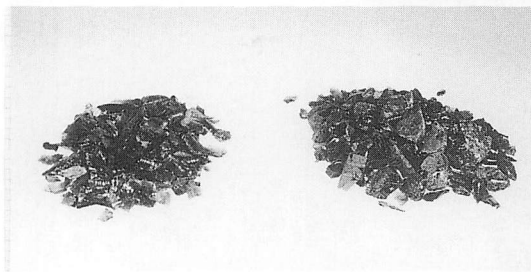
石匙



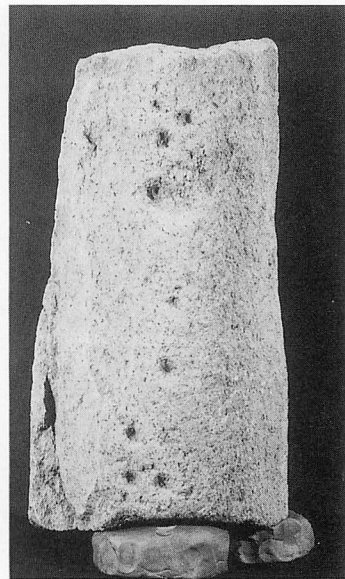
石錐



パステル形石器
(右の2本は現在の石墨)



剥片
(土出 第46号住居跡と第47号住居跡)



石棒
(第227号土坑出土)

甲ッ原遺跡報告書概要

フリガナ	カブツツパライセキ	
書名	甲ッ原遺跡 (第5次) I	
副題	県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第96集	
編著者名	山本茂樹・野代幸和	
発行者	山梨県教育委員会	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話番号	山梨県東八代郡中道町下曾根923・☎0552-66-3016	
印刷所	株式会社 少国民社	
印刷日・発行日	1994年3月22日・1994年3月31日	
遺跡概要	遺跡所在地	山梨県北巨摩郡大泉村西井出字大林8845外
	1/25000地図名・位置	谷戸・北緯35°51′ 東経138°24′
	主要な時代	縄文時代前～後期、平安時代、近世
	主要な遺構	縄文時代前～中期の住居跡11基 (前期神之木式期1軒・諸磯b式期5軒、中期五領ヶ台II式期1軒・猪沢式期2軒・曾利V式期2軒)、前～中期の土坑およびピット72基、平安時代の河川跡、近世の溝
	主要な遺物	縄文時代前～後期の土器、石器 (打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、石錘、石錐、石皿、磨石、敲石、凹石)
	特殊遺構 特殊遺物	縄文時代後期の大型フラスコ形土坑 直剪鏃、彩色土器、土偶、パステル形石器、玦状耳飾、炭化種子 (オニグルミ、クヌギ、キハダ)
調査期間	1993年6月1日～10月8日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第96集

甲ッ原遺跡 (第5次) I

—県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査報告書—

印刷日 1994年3月22日

発行日 1994年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 少国民社

